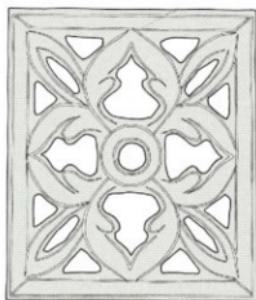


飛鳥・藤原宮発掘調査概報 25



1 9 9 5 年 5 月

奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮発掘調査概報25 正誤表

頁	行	誤	正
4	13	S D (井戸)	S D (溝)
39	Fig.32	六条条間路	七条条間路
		六条大路	七条大路
53	Fig.40	S K3247	S X3247
78	5	S D260	S D289
81	5	S X3391	S X3390
84	8	22.8m	20.4m
88	17	S D260	S D289
112	32	諸施設とともに	諸施設とともに

飛鳥・藤原宮発掘調査概報25

目 次

I 1994年発掘調査地一覧表	2
I 藤原宮の調査	5
1 西方官衙地区の調査	7
A 第76次	7
B 第75-6次	13
C 第71-15次	17
D 第75-7次	18
E 第75-12次	20
2 東二坊大路・宮東面・東方官衙地区の調査（第75-13次）	25
3 宮西面外濠の調査（第75-1次）	35
4 宮内その他の調査	36
A 第75-5次	36
B 第75-9次	36
II 藤原京の調査	37
1 左京七条二・三坊の調査（第74次）	39
2 左京七条一・二坊の調査（第75次）	45
3 左京八条四坊（日向寺）の調査（第75-4次）	51
4 左京十二条二坊（雷丘北方遺跡第4次）の調査（第71-13次）	52
5 左京十二条三坊（雷丘東方遺跡）の調査（第75-3次）	58
6 左京その他の調査	61
A 左京五条一坊の調査（第75-10次）	61
B 左京十二条四・五坊の調査（第75-8次）	62
7 右京七条二坊の調査（第75-11次）	63
8 木葉師寺の調査	66
A 木葉師寺1993-3次	66
B 木葉師寺1994-1次	74
III 飛鳥地域の調査	75
1 水落遺跡第7次調査	77
2 山田道第7次調査	89
3 甘樅丘東麓の調査	94
A 第71-12次	94
B 第75-2次	95
4 川原寺の調査	102
A 川原寺1993-2次	102
B 川原寺1993-3次	107
5 橋寺の調査（橋寺1993-1次）	108
6 山田寺第9次調査	109
P L. (写真図版)	
1 : 第76次、2 : 第75-6次、3 : 第75-7次、4 : 第75-12次、5・6 : 第74次、 7 : 第75次、8 : 第71-13次、9 : 第75-3次、10 : 第75-10次、11 : 第75-11次、 12 : 木葉師寺1993-3次、13 : 水落遺跡第7次、14 : 山田道第7次、15 : 第75-2次、 16 : 川原寺1993-2次、17 : 山田寺第9次	

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
藤原宮 71- 12	6 AMK - D	73m ²	94. 1.10～ 94. 1.12	高市郡明日香村豊浦 (甘櫻丘東麓)	国有地	登山道建設	金子 裕之	94
71-13	6 AMH - J	434m ²	94. 1.10～ 94. 4. 7	高市郡明日香村雷手 (左京十・一条二坊)	奈良県	道路建設 (雷丘北方)	西口 勇生	52～57
71-15	6 AJF - Q	80m ²	94. 3. 7～ 94. 3. 14	樞原市繩手町170- 1 (宮西方官衙地区)	中西利	擁壁工事等	村田 和弘	17
74	5 AWG - H・P	2368m ²	93.12. 1～ 94. 3.24	樞原市木之木町54- 2 他 (左京七条二・三坊)	樞原市	市道飛驒～ 木之木線建設	鳥田 敏男	39～44
75	5 AWH - A 5 AWG - G・P 5 AJH - F	2200m ²	94. 4. 4～ 94. 8. 8	樞原市木之木町326他 (左京七条一・二坊)	樞原市	山道飛驒～ 木之木線建設	上原 真人	45～50
75-1	5 AJL - F	100m ²	94. 4. 4～ 94. 4.21	樞原市四分町302 (宮西面外濠)	樞原市	道路拡幅	深澤 芳樹	35
75-2	5 AKG - L・M	360m ²	94. 5. 9～ 94. 6.30	明日香村川原 (甘櫻丘東麓)	国有地	駐車場建設	次山 淳	95～ 101
75-3	5 AMH - D・E・F 5 AMJ - A	500m ²	94. 6.14～ 94. 7.13	明日香村雷東浦 (左京十二条一坊)	奈良県	道路拡幅 (雷丘東方)	大脇 淑	58～60
75-4	5 BNG - E	16m ²	94. 6.16～ 94. 6.22	樞原市南浦888 (左京八条四坊)	西井輝男	住宅建設	深澤 芳樹	51
75-5	5 AJII - P・H・A 5 AJG - F・N 5 AJC - U・N	630m ²	94. 6.28～ 94. 7.18	樞原市四分町他 (宮内)	樞原市	四分木之木 線水道管布 設替		36
75-6	5 AJG - U	84m ²	94. 7.14～ 94. 8. 2	樞原市四分町 293- 2・294 (宮西方官衙地区)	樞原市	四分地建 替	大脇 淑	13～16
75-7	5 AJF - Q	160m ²	94. 7.19～ 94. 8. 5	樞原市繩手町167- 6 (宮西方官衙地区)	田村進・隆 久	作業小屋建 設	大脇 淑	18～19
75-8	5 AMC - Q・R 5 AMH - B・C	68.7m ²	94. 8. 1～ 94. 8.10	明日香村奥山 (左京十・一条四・五坊)	明日香村	下水道堅坑	伊藤敬太郎	62
75-9	5 AJC - P	14.6m ²	94. 9.14～ 94. 9.22	樞原市高殿町245 (宮内)	三橋栄次	住宅建替	鳥井 敏男	36
75-10	5 AJC - B	50m ²	94.10. 3～ 94.10.11	樞原市下八鈴町141 (左京五条二坊)	山尾吉史	住宅建替	鳥井 敏男	61
75-11	5 AJM - C・D	528m ²	94.10. 3～ 94.11. 1	樞原市四分町 256- 3・12・13 (右京七条二坊)	奈良県	バイパス建 設	金子 裕之	63～65
75-12	5 AJE - U	436m ²	94.10.11～ 94.11.15	樞原市醍醐町43- 5 (宮西方官衙地区)	森口清信他	宅地造成	佐川 正敏	20～24

Tab. 1 1994年度発掘調査地一覧(1)

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
75-13	5 A J B	384m ²	94.11.10～ 94.11.28 94.12. 1～ 94.12. 8	樋原市高殿町 (宮内)	樋原市	道路拡張	金子 裕之 橋本 義則	25～34
75-14	5 A J K - C	70m ²	95. 1.23～ 95. 1.27	樋原市綱手町 199-4・192-1・6 (宮内)	樋原市	歩道拡張	橋本 義則	未収録
75-15	5 AWII	300m ²	94.12.12～ 95. 2. 1	樋原市飛驒町94-1 (左京七条一坊)	樋原市	住宅建設	荒木 浩司	未収録
75-16	5 AMII - J	710m ²	95. 1. 9～ 95. 4. 8	明日香村雷上地内 (左京十一条三坊)	奈良県	県道新設 (雷丘北方)	川越 俊一	未収録
75-17	5 B NG	10m ²	95. 2.13～ 95. 2.15	樋原市南浦49 (左京八条四坊)	田中博史	住宅建設	藤田 盟児	未収録
75-18	5 A J G	200m ²	95. 3. 7～ 95. 3.27	樋原市四分町 (宮西方官衙地区)	樋原市	四分団地造成	藤田 盟児	未収録
76	5 A J G - S - R	2050m ²	94. 8. 1～ 94.10. 5	樋原市四分町288・289 (宮西方官衙地区)	樋原市	四分団地造成	佐川 正敏	7～12
77	5 A JL - E 5 A J G - T	900m ²	94.12. 1～ 95. 2. 6	樋原市四分町 (宮西方官衙地区)	樋原市	四分団地造成	藤田 盟児	未収録
本葉師寺 1993-3次	6 BM Y - D	307m ²	94. 2.10～ 94. 4.15	樋原市城殿町 282・283・284 (右京八条三坊)	西田佐芋	計画調査	花谷 浩	66～73
本葉師寺 1994-1次	5 BM Y - L - K	170m ²	94. 9.21～ 94.10. 6	樋原市城殿町 231-1・232-1 (右京八条三坊)	太田憲佑	住宅新築	島田 敏男	74
本葉師寺 1994-2次	5 BM Y - N	558m ²	95. 2. 3～	樋原市城殿町 282・283・284 (右京八条三坊)	西田佐芋	計画調査	花谷 浩	未収録
川原寺 1993-2次	5 B KH - A	83.5m ²	93.12. 7～ 94. 1.27	明日香村川原	関西電力等	電線等埋設	花谷 浩	102～ 106
川原寺 1993-3次	5 B KH - G	1m ²	94. 1.13	明日香村川原876	河合義照	住宅増築	村田 和弘	107
橘寺 1993-1次	5 B TB - C	4.1m ²	94. 1.26～ 94. 2. 7	明日香村橘字北ノ門	関西電力等	電線等埋設	花谷 浩	108
山田寺 第9次	5 BYD - A・F	80m ²	94.11. 7～ 94.12. 7	桜井市山田994-1・ 1040・1245・1246	国有地	計画調査	黒崎 直	109～ 112
山田道 第7次	5 AMD - P	255m ²	94. 4.18～ 94. 5.24	明日香村雷・飛鳥	奈良県	ポケットパーク設置	伊藤 武	89～93
水落遺跡 第7次	5 AME - P・Q	600m ²	94. 8. 1～ 94.12.15	明日香村大字飛鳥 291-1	豊田純行	計画調査	西口 寿生	77～88

Tab. 2 1994年度発掘調査一覧(2)

凡　例

1. 本書は奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1994年1月から同年12月までにおこなった藤原宮跡・藤原京跡および飛鳥地域の発掘調査の概要報告である。1993年度の調査で未報告分については本書に収録した。各調査の執筆は、原則として各現場の発掘担当者がおこなった。なお、写真は井上直大が撮影し、宮川伴子が整理した。
2. 発掘調査一覧表には、1994年度の調査地をすべて示すとともに、本書に収録した1993年度の調査地を再録した。なお、各寺院では年度毎の通し番号を次数として付けた。
3. 発掘遺構図に用いた座標値は、平面直角座標第VI座標系によった。高さはすべて海拔高で示す。
4. 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』を『報告』、『奈良国立文化財研究所年報』を『年報』、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』と省略した。
5. 遺構には、個々の遺跡もしくは大地区別ごとに一連の番号を付け、番号の前に、遺構の種類を示す、S A (塙)、S B (建物)、S D (井戸)、S F (道路)、S K (土坑)、S X (その他)などの番号を付けた。
6. 7世紀の土器の時代区分は飛鳥 I ~ V と表す。詳しくは『報告』 II p.92~100を参照されたい。
7. 第75~6次調査 (p.14~16)、第75~13次調査 (p.30~34) の寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定を、天理大学附属天理参考館の金原正明氏と古環境研究所の金原正子女史・中村亮仁氏に依頼し、その結果について御寄稿いただいた。
8. 本書の編集は、部長猪熊兼勝の指導のもと、島田敏男が行った。

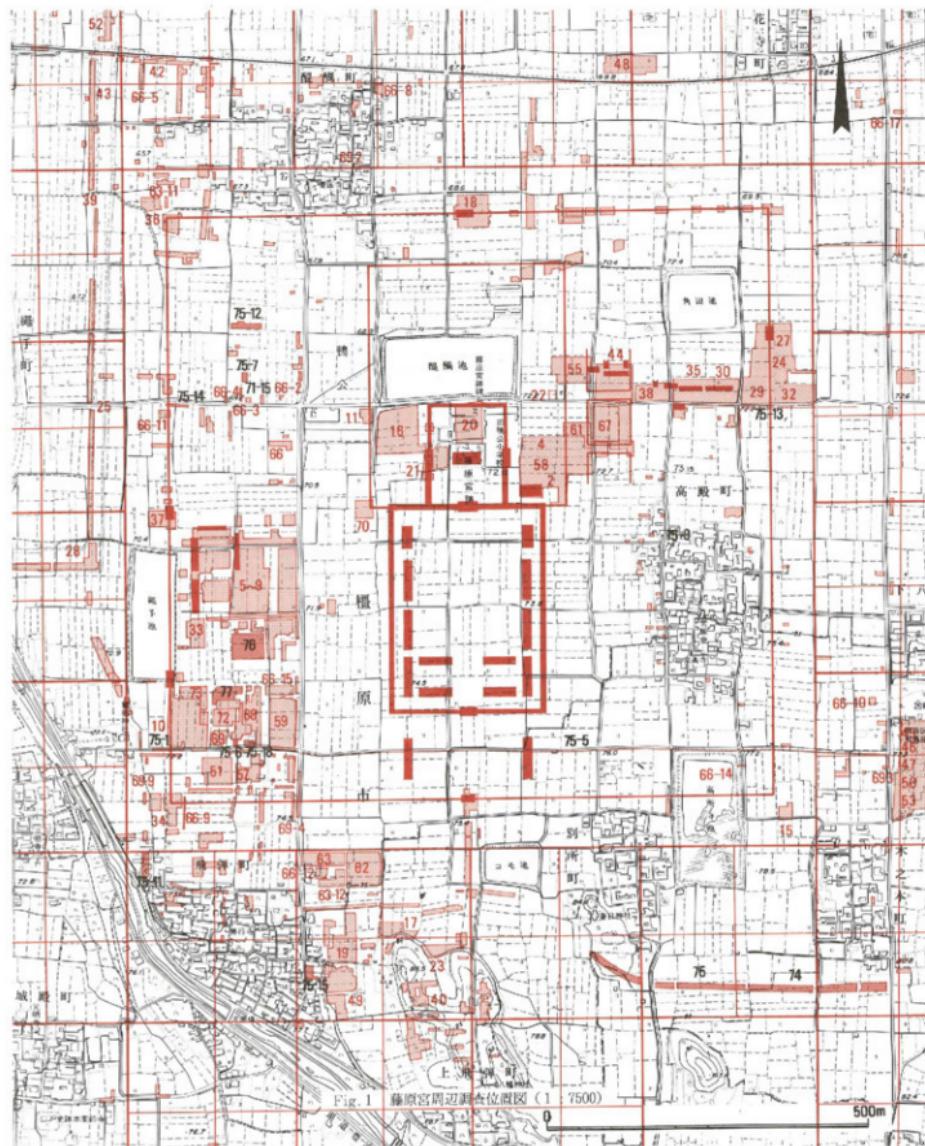
飛鳥藤原宮発掘調査部1994年度現場班

1993年12月～1994年3月		4月～7月		8月～11月		12月～1995年3月	
金子	裕之	大脇	潔	黒崎	直	川越	俊一
西口	壽生	上原	貞人	金子	裕之	橋本	義則
花谷	浩	深澤	芳樹	西口	壽生	花谷	浩
島田	敏男	次山	淳	佐川	正敏	藤田	麗兒
村田	和弘	伊藤	武	島田	敏男	村田	和弘
伊藤	敬太郎	羽鳥	幸一	伊藤	敬太郎	荒木	浩司
		肥	塚	肥	隆保		

表紙カット：本薬師寺出土金銅製垂木先金具復元図（1：2）

本薬師寺1993~3次調査で出土した垂木先金具である。全形のはば1/2が出土し一辺12cm×10.5cmの長方形に復元できる。金銅製で、対葉花紋を透かし彫り毛彫りの輪郭線を刻んでいる。同形・同紋の垂木先金具が平城薬師寺からも出土している。（本文70P参照）

I 藤原宮の調査



調査次数	調査地名	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
藤原宮 71-15	6 A J F - Q	80m ²	94. 3. 7～ 94. 3.14	樺原市繩手町170-1 (宮西方官衙地区)	中西利一	擁壁工事等	村田 和弘	17
75-1	5 A J L - F	100m ²	94. 4. 4～ 94. 4.21	樺原市四分町302 (宮西面外濠)	樺原市	道路拡幅	深澤 芳樹	35
75-5	5 A J H - P・H・A 5 A J G - F・N 5 A J C - U・N	630m ²	94. 6.28～ 94. 7.18	樺原市四分町他(宮内) 樺原市	四分木之本 継水道管布 設替		深澤 芳樹	36
75-6	5 A J G - U	84m ²	94. 7.14～ 94. 8. 2	樺原市四分町 233-2・294 (宮西方官衙地区)	樺原市	四分畠地跡 替	大脇 潔	13～16
75-7	5 A J F - Q	160m ²	94. 7.19～ 94. 8. 5	樺原市繩手町167-6 (宮西方官衙地区)	田村進・隆 久	作業小屋建 設	大脇 潔	18～19
75-9	5 A J C - P	14.6m ²	94. 9.14～ 94. 9.22	樺原市高殿町245 (宮内)	三橋榮次	住宅建替	島田 敏男	36
75-12	5 A J E - U	436m ²	94.10.11～ 94.11.15	樺原市醍醐町43-5 (宮西方官衙地区)	森口清信他	宅地造成	佐川 正敏	20～24
75-13	5 A J B	384m ²	94.11.10～ 94.11.28 94.12. 1～ 94.12. 8	樺原市高殿町(宮内)	樺原市	道路拡張	金子 裕之 橋本 義則	25～34
75-14	5 A J K - C	70m ²	95. 1.23～ 95. 1.27	樺原市繩手町 199-4・192-1・6 (宮内)	樺原市	歩道拡張	橋本 義則	未収録
75-18	5 A J G	200m ²	95. 3. 7～ 95. 3.27	樺原市四分町 (宮西方官衙地区)	樺原市	四分畠地造 成	藤田 豊児	未収録
76	5 A J G - S・R	2050m ²	94. 8. 1～ 94.10. 5	樺原市四分町288・289 (宮西方官衙地区)	樺原市	四分畠地造 成	佐川 正敏	7～12
77	5 A J L - E 5 A J G - T	900m ²	94.12. 1～ 95. 2. 6	樺原市四分町 (宮西方官衙地区)	樺原市	四分畠地造 成	藤田 豊児	未収録

Tab. 3 藤原宮の調査一覧

1 西方官衙地区の調査

A 第76次調査

(1994年8月～10月)

本調査は奈良県橿原市が四分町288・289番地において予定している住宅改良事業用地の造成に伴う事前調査である。調査区は東西50m、南北40mで設定し、東を若干拡張したので、調査面積は2050m²となった。1994年8月1日から上土掘削を開始、同年10月5日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。本調査区は藤原宮西方官衙地区にあたり、宮西面南門の北東部、すなわち宮内先行条坊の五条西二坊東南坪に位置する。調査区の北では鴨公小学校の移転（第5～9次調査）や個人住宅の建設に伴い（第54-9、58-2、60-13、63-10次調査）、西では鴨公幼稚園の建設に伴い（第33次調査）、東では倉庫の建設などに伴い（第27-9、63-5、63-8次調査）、南では四分団地の建て替えに伴い、発掘調査が数次にわたって行われてきた。その結果、宮内先行条坊五条西二坊東南坪の北半には、四周を掘立柱塀 S A 1215・1216・6985・7000で囲まれた長方形の区画があることが判明した。この区画の北辺の塀 S A 1215は宮内先行条坊の五条々間路南側溝の内側に、東辺の塀 S A 6985は宮内先行条坊の西一坊大路西側溝想定位置の内側に、それぞれ位置するので、区画は先行条坊側溝の掘削後の宮直前期に設置されたと考えられている。本調査区では、その区画の南辺の塀 S A 7000の西半部と西辺の塀 S A 1216への曲がり角、さらにその区画の南の利用状況が明らかになると予想された。また四分団地にあった弥生時代の集落に北接する空間の利用状況についても、情報が得られると期待された。

遺構

調査の結果、弥生時代から藤原宮期までの遺構を検出した（Fig. 3）。なお、多くの土坑の所属時期は出土遺物の整理を待って決めていた。

藤原宮期とその直前の遺構 遺構は耕土・床土直下で確認できるが、本来の生活面はすでに削平されている（Fig. 2）。掘立柱建物4棟（S B 8200～8203）、掘立柱塀4条（S A 1216・7000・8204・8205）がある。S B 8200は調査区東南隅にある桁行5間以上（柱間寸法約2.1m）、梁行2間（柱間寸法約2.4m）の南北棟で、柱掘形は一辺1m強と大きい。S B 8201は調査区南寄り中央にあり、桁行3間、梁行2間の東西棟で、柱間寸法は1.5～1.8mである。S B 8202は調査区西南隅にあり、桁行3間、梁行2間の南北棟で、柱間寸法は1.5mである。北で若干西に振れ

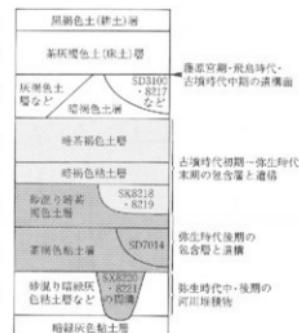


Fig. 2 第76次調査基本層序模式図

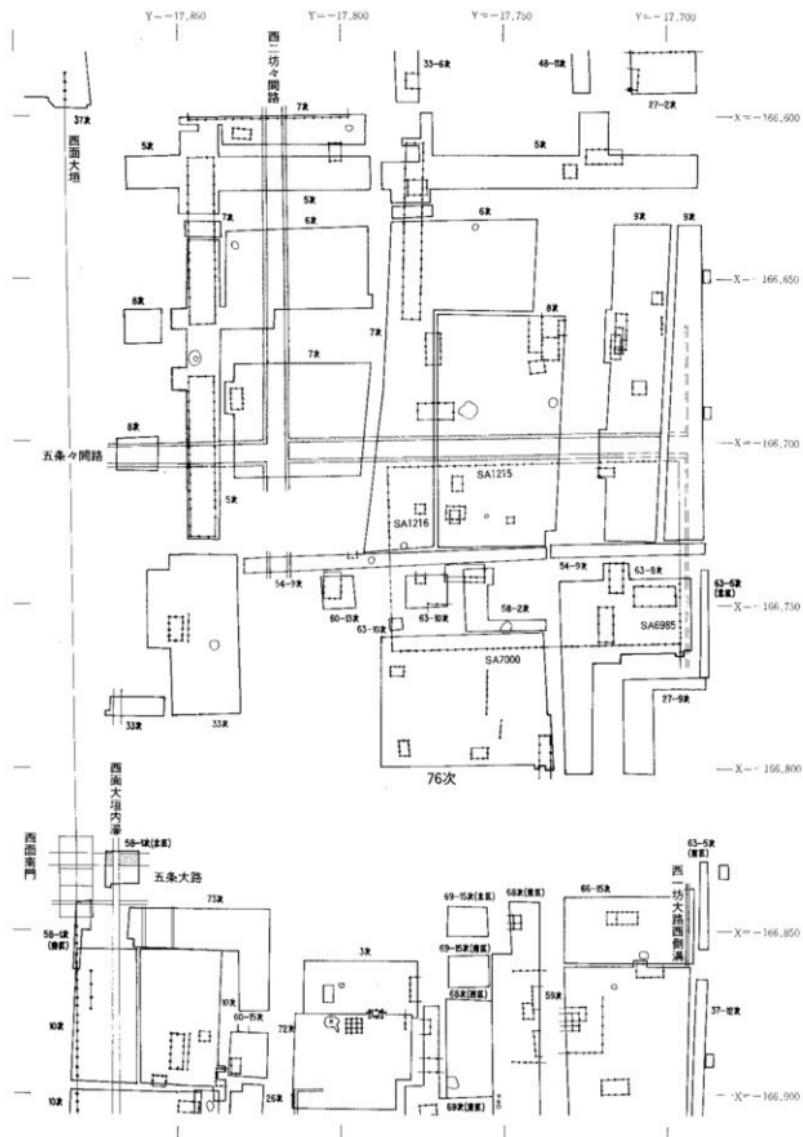


Fig. 3 第76次調査位置図および周辺調査の施照宮跡等の遺構 (1 : 1500)

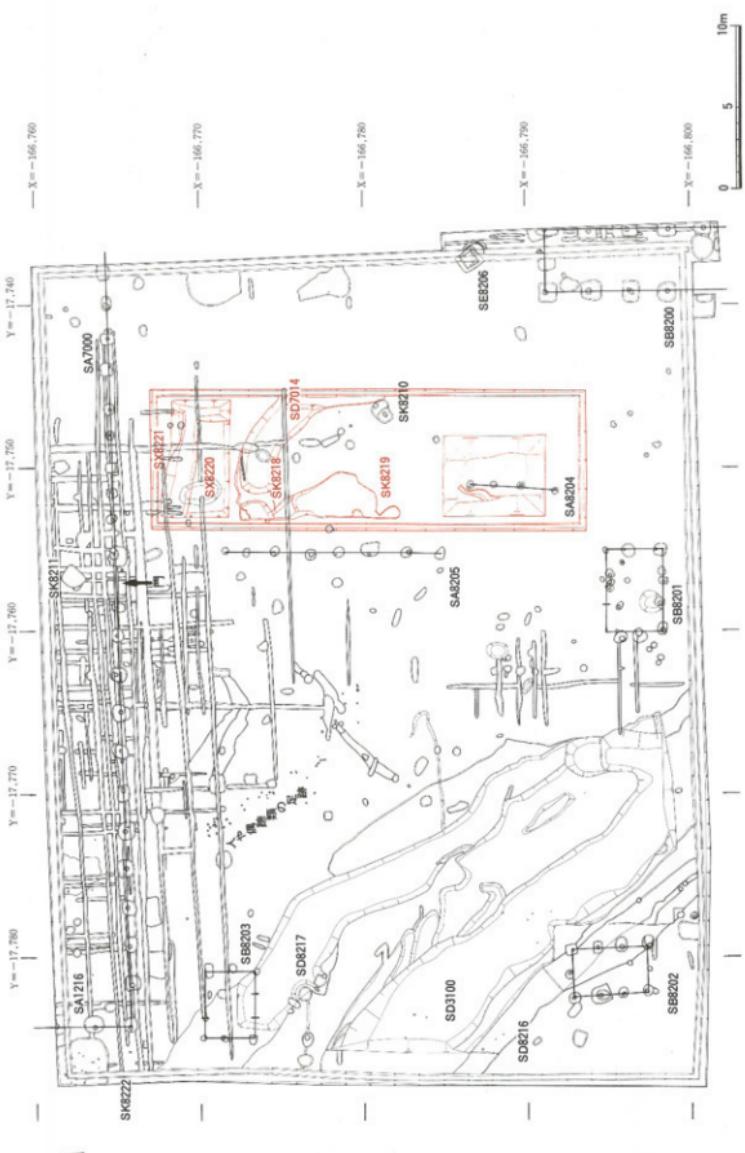


Fig. 4 第3/6次調查地圖 (1 : 300)

る。S B 8203は調査区西寄り中央にあり、東西2間（約4m）、南北2間（約3m）で、柱間寸法は不揃いである。第63-8次調査で検出されたS A 7000の西半が、21間分検出できた。さらにこれが調査区西北隅で北に曲がり、第6次調査で検出されたS A 1216につながることが判明した。S A 7000は柱間寸法が1.5~2.4mで、西寄りの掘形平面は東のものに比べて大きく、かつ深い。S A 1216は2間分を検出した。その柱間寸法は2.1mである。S A 8204はS B 8201の東北にあり、柱間寸法が1.5~2.1mの南北廻（3間）で、掘形は浅い。北で東に若干振れる。S A 8205はS A 8204の西北にあり、柱間が1.5~2.4mの南北廻（7間）である。

飛鳥時代の遺構 井戸S E 8206は調査区東壁中央の床土直下で検出した（Fig. 5）。北で西に45°振ることから、その所属時期を飛鳥時代と推定している。掘形は一辺1.3~1.5mの方形で、深さは1.5mと浅い。井戸底は後述する弥生時代の河川S D 7014の埋土である灰色砂層の上にあたる。井戸底に三枚組接ぎによる蒸籠組の井戸枠が一段分残されている。男木は長さ80~83cm、幅18~24cm、厚さ3cmの板を材料とし、枘の長さは4.5~5cmである。女木は長さ92~94cm、幅24cm、厚さ3cmの板を材料とし、枘の長さは6.5~7cmである。井戸の掘形の深さからみて、井戸枠は少なくとも三段分あったと推定される。井戸枠の内面に沿って、自然木の先を削って尖らせた木杭10数本を井戸底から地下1mほど打ち込み、井戸枠の外面に土と木切れを入れて裏込めして、井戸枠を固定していたらしい。井戸枠のうち2枚の井戸底に接していた面に、太枘穴が残っているので、これらは別の井戸枠もしくは建築部材を転用したと考えられる。この太枘は再利用の際に、すでに抜かれている。



Fig. 5 飛鳥時代の井戸S E 8206（西から）



Fig. 6 古墳時代の河川S D 3100（北西から）

古墳時代の遺構 床上下の灰褐色土層を掘り下げ、現地表下0.7~1mで旧河川3条（S D 3100・8216・8217）を検出した。いずれも東南から西北へ流れる。切り合いから、S D 8217→3100→8216の順に新しくなる。S D 8217は幅2m前後、深さ0.5mで、その埋土には土師器のみを含む。S D 3100は第33次調査でも検出されており、幅4~8m、深さが最も深い所で2m以上ある本格的な河川である。岸が崩落する危険があるので、川底の検出は断念した。その埋土の大半は砂層と礫層の互層からなる。そこから5世紀後半の土師器と須恵器、韓式土器が出土し、とくに埋土最上層からの出土量が最も多い。S D 8216は幅約1m、深さ10cm程で、埋土には土器の細片を含む。なおS D 8217にはほぼ平行して、人

と偶蹄類の足跡を多数検出した。

弥生時代の遺構　弥生時代の遺構・遺物を検出するため、下層調査区（面積243m²）を設定した。基本層序灰褐色土層下の暗茶褐色土層とその下の暗褐色粘土層からは、弥生時代末期～古墳時代初期の過渡期の土器が出土した。それらを順次掘り下げて、砂混り暗茶褐色土層上面で土坑2基（S K 8218・8219）を検出した。出土土器からみて、弥生時代末期～古墳時代初期の土坑である。砂混り暗茶褐色土層からは弥生時代後期の土器が多量に出土した（Fig. 7）。その下位の茶褐色粘土層上面で旧河川1条（S D 7014）を検出した。埋土の灰色砂層から弥生時代後期の土器が出土した。S D 7014は第63-8次調査でみつかっている河川のつづきである。下層調査区の南北にさらに深掘区を設定した。その結果、まず北区では、砂混り暗緑灰粘土層上面で方形周溝墓2基（S X 8220・8221）を部分的に検出した。S X 8220の北側の溝がS X 8221の南側の溝となり、両者の東側の溝は南北方向に連続する。その一辺は6m以上あり、残存する周溝の上幅は2m、深さは1.5mである。砂混り暗緑灰色粘土層から暗緑灰色粘土層までの土層を削り出し、上に封土を盛ったのである。封土部分はすでに削平されている。周溝から土器片が1点出土したが、細片のため時期は特定できない。しかし、層位的にみれば、S X 8220・8221は弥生時代後期のものと推定される。なおS D 7014より北の砂混り暗緑灰色粘土層から暗緑灰色粘土層までの土層は、後述する南区に比べて安定している。つぎにS D 7014より南は砂とシルト、粘土の互層の厚い堆積物が確認され、流れを何度も変えた旧河川の堆積土の一部であったことが判明した。堆積土からは弥生時代中～後期の土器と流木が出土した。

まとめ

先行条坊五条西二坊東南坪の北半の区画　本調査によって、この区画の東西幅が87.5～88m、南北幅が58.2～58.8mであることが判明した。南辺の塙S A 7000は東西41間である。西から12間目が幅3.8mと広く、12間目の柱がS A 8205の延長上にあることから、ここが門だった可能性がある（Fig. 4↑印）。北辺の塙S A 1215は41もしくは42間、西辺の塙S A 1216は推定25間である。さて区画の位置や規模は何を基準に設定されたのだろうか。S A 1215の位置が先行条坊五条々間路に、S A 6985の位置が西一坊大路に規制されていることから、この区画の造営時期は従来、



Fig. 7 弥生時代後期土器の集中（西北から）



Fig. 8 方形周溝墓S X 8220・8221（東から）

先行条坊の側溝を掘削した宮直前期に近い時期と考えられてきた。区画の東西幅87.5~88mは、藤原京の地割りの基準値である750大尺の $\frac{1}{3}$ の250大尺である。区画の南北幅58.2~58.8mは、完数尺が得られないが、先行条坊五条大路北側溝と五条々間路南側溝の間の敷地のほぼ $\frac{1}{2}$ にあたる。その後この区画内の建物配置が大きく改変されるとか、区画端を切る新しい建物が建てられることはなく、この区画は先行条坊の西一坊大路を宮内道路とする藤原宮期にも存続した可能性がある。第63-8次調査では、この区画の東南隅のS A 6985が南へ少なくとも1間延びることが確認されている。しかし、S A 6985はさらに南の第27-9次調査区までは延びていなかった。また、本調査区で検出したこの区画の西南隅で、S A 1216が南へ延びることはない。したがって、この区画の南側に同規模の区画はない。また、区画の南側で検出された建物も少ない。藤原宮の西側の西面中門寄りの官衙については、馬寮が候補に挙げられている(『報告』Ⅱ)。平城宮では西面中門佐伯門に接してその南北に馬寮があり、さらに藤原宮西面中門の東南部でも桁行18~20間の長大な建物4棟が整然と建てられているからである。ともあれ、文字資料の発見を待って、官衙の機能に結論を下すことになろう。

推定飛鳥時代の井戸 S E 8206 井戸S E 8206は、蒸籠組井戸としては飛鳥・藤原地域で最古の部類に属する。この井戸の時期をさらに絞り込む遺物はみつからなかった。本調査区にはS E 8206と同様の振れをもつ建物遺構はないが、約100m西方の第33次調査区にはS E 8206と同様の振れをもつ掘立柱建物S B 3085~3088がある。あるいは両者の間になんらかの関連があるのかもしれない。

古墳時代の旧河川 S D 3100の土器はどこから捨てられたか S D 3100の埋土最上層は暗褐色土で、出土土器には完形品が多く含まれており、しかも遠方から流されてきた形跡がない。本調査区でこの時期の住居跡はみつかっていないが、本調査区の南で行われた第3次調査で、土坑S K 580と井戸S E 555・669から同時期の土師器と須恵器が出土している(『報告』Ⅲ)。したがって、四分遺跡には土坑や井戸を含む古墳時代の集落があって、そこからS D 3100に土器が廃棄された可能性が高い。

弥生時代四分遺跡の北側の様相 弥生時代後期の土器を比較的多く含む土層は、下層調査区以外に、古墳時代の河川S D 3100の両岸断面でも確認できるので、四分遺跡の北側にも後期のある段階の生活廃棄物の廃棄場があったようだ。つぎに第69-12次・第71-1次調査などによって、弥生時代四分遺跡の北側には、方形周溝墓がまとめて存在した可能性が高まっている。今回検出した2基の方形周溝墓S X 8220・8221は、それらの一群をなすものであり、從来検出されたもののなかで、集落に最も近接している。その時期は層位的にみて、弥生時代後期と推定される。さらに下層調査区の深堀南区の土層の堆積状況からみて、弥生時代中期から後期にかけてのある段階に、四分遺跡の北側で、洪水が頻繁に発生したと推定される。

(1994年7月~8月)

本調査は、市営住宅の建設に先立ち、樋原市四分町で実施したものである。調査地は、藤原宮西方官衙地域にあたり、第69次東区の南、第69次西区の東に位置する。今回の調査では、藤原宮期における当地域の利用状況と、下層の弥生時代集落の広がりを確認することを目的とした。東西7m、南北12mの範囲を上層と下層にわけて調査した。調査面積は84m²である。

遺構

上層遺構 調査区の基本的層序は、上から現代の盛土、水田の旧耕土・床土・黄灰色砂質土・灰褐色微砂質土の順であり、上層遺構は、灰褐色微砂質土の上面で検出した。

上層で検出した主な遺構には、小規模な掘立柱建物 S B 8340と、東西溝 S D 8335がある。

S B 8340は、桁行3間、梁行2間の南北棟建物である。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m前後でばらつきがあり、直径約10cmほどの柱痕跡が残る。柱穴出土の遺物が少ないため、その所属時期は明らかではないが、藤原宮期直前から藤原宮期にかけての遺構と考えられる。

東西溝 S D 8335は、幅約1m、深さ約0.1mの浅い溝であるが、周辺の調査区では延長部分を検出しておらず、その性格は不明である。7世紀後半の土器が少量出土した。

下層遺構 東西5.5m・南北11mの調査区で、下層の調査を実施した。層序は、藤原宮期の遺構を検出した灰褐色微砂質土から下に順に、明黄灰色粘質土、黒褐色土、黄色土混黒褐色土、青灰色砂質土（地山）である。弥生時代の遺構検出は青灰色砂質土上面で行った。その結果、弥生時代中期に属する土坑や溝などがみつかり、調査地北端の井戸 S E 8332からは特に豊富な遺物が出土した。

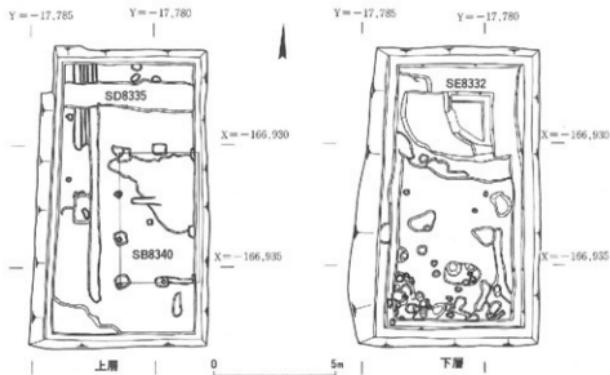


Fig. 9 第75-6次調査遺構図 (1 : 200)

S E 8332は掘形上面が直径5.5m内外の円形に近い素掘り井戸で、深さは1.7mである。底から30cmほどは疊混青灰色砂に達しており、特に湧水が激しかった。この井戸からはおもに弥生中期前半の土器に伴って木製の鍬・斧柄・腰掛・容器、用途不明の鹿角製品、さらにクマネズミ属 (*Rattus sp.*) 頭骨・穿孔されたイノシシの下顎骨などが出土した。

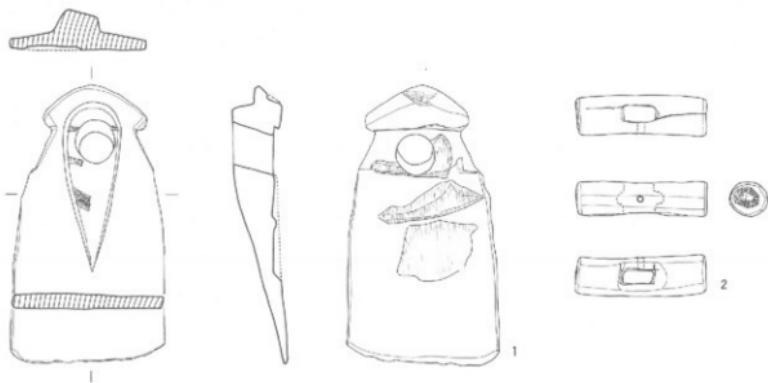


Fig. 10 S E 8332出土木製品 (1) (1 : 4)・鹿角製品 (2) (1 : 3)

藤原宮第75-6次調査（四分遺跡）における寄生虫卵・植物遺体分析

試料と方法 試料は、井戸 S E 8332の上部・中部・下部および地山の計4点である。

寄生虫卵分析は、試料1cm³にフッ化水素酸処理を施しプレパラートを作製して行った。1cm³あたりの出現数は計数比から算定した。

花粉分析は、試料に水酸化カリウム処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の各処理を施し行った。花粉出現量（定量）については、その計数比から試料1cm³の出現数を算定した。

種実同定は各々100ccを0.25mmの篩で水洗選別し、分類を肉眼および実体顕微鏡下で行った。

寄生虫卵分析 (Tab. 4) 寄生虫卵は回虫類、鞭虫類、マンソン裂頭条虫が検出された。中部において試料1cm³あたり1000個以上寄生虫卵が検出され、下部においても500個以上であった。地山からは何も検出されなかった。中部と下部では鞭虫類卵が多い。寄生虫卵のかなりの汚染

学名	分類群 和名	(1/10cc中) 部位	5AJG-WF83大土坑			5AJG-WF84 大土坑地山
			上部	中部	下部	
<i>Ascaris</i>	回虫類	卵殻	4	3	8	
<i>Trichuris</i>	鞭虫類	卵殻	8	102	45	
<i>Diphyllobothrium mansoni</i>	マンソン裂頭条虫	卵殻	2	7	9	
Total	計 (1cm ³ に算定)		14 (140)	112 (1120)	62 (620)	0 (0)

Tab. 4 寄生虫卵分析結果

およびなんらかの糞便の堆積物が、S E 8332に堆積しているとみなされる。

花粉分析 (Fig.11) 結果は図に示した。各試料とも樹木花粉より草木花粉が多い。上部ではイネ属型を含むイネ科が優占する。中部と下部ではヨモギ属やオナモミ属が多い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が主に優占する。

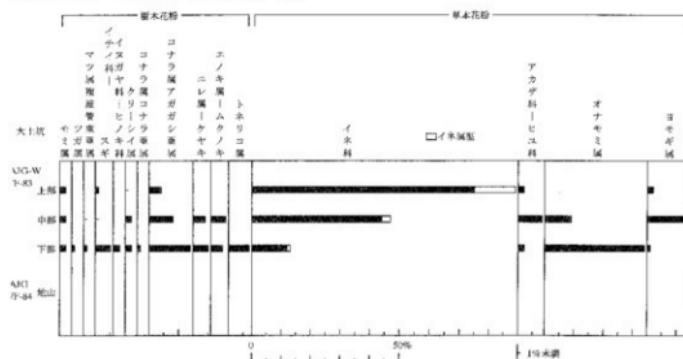


Fig.11 主要花粉組成図

種実同定 (Tab.5) 種実は数量が少ない。ウリ類・イネの食用となる栽培植物の種実はやや多い。他はイネ科・タデ属・ナデシコ科などの雑草類が検出された。

分類群	学名	和名	部位	SAJG-WF83大土坑			SAJG-WF84		
				上部	中部	下部			
<u>herb</u>									
	<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	穀	17	15				
	<i>Setaria</i>	エノコログサ属	穀			1			
	Gramineae A+B	イネ科A+B	穀	4	3				
	<i>Festuca villosa Nakai</i>	クワクサ	種子	1					
	<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	2	2				
	<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ属	果実			1			
	Polygonum A+B	タデ属A+B	果実	2	2				
	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1					
	<i>Amaranthus</i>	ヒヌ属	種子	1					
	Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	3	7	5			
	<i>Tordylium japonicum DC.</i>	ヤブジラミ	果実		5				
	<i>Perilla</i>	シソ属	果実		1				
	Solanaceae	ナス科	種子	1		1			
	<i>Cucumis melo L.</i>	ウリ類	種子	10	1	1			
			破片	4	3	1			
	<i>Eclipta prostrata L.</i>	タカサゴロウ	果実	8	2	4			
	Total	合計		54	41	14			0

Tab. 5 種実同定結果 (試料100cc中)

推定される植生と環境 (Fig.12) S E 8332の堆積物の分析結果では、鞭虫類を主とする寄生虫卵の出現密度がかなり高いため、多くの糞便の堆積が含まれているとみなされる。肝吸虫・横川吸虫が含まれていないため、寄生虫卵組成からヒトの糞便に起因するかどうか判断できない。花粉分析ではヒトの糞便に起因する食用植物の花粉は認められないといってよい。種実で

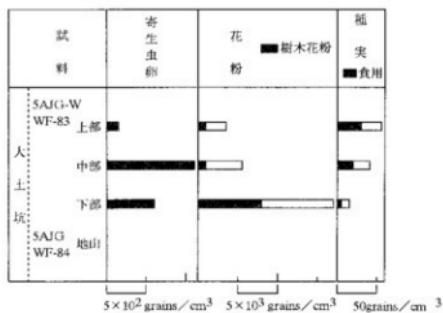


Fig.12 寄生虫・花粉・種実出現図

染域であったと考えられる。

人体寄生虫である回虫・鞭虫と飼育されたブタに寄生するブタ回虫・ブタ鞭虫の卵殻は、形態的に区別が困難である。回虫類と鞭虫類はヒトとブタにのみセットで感染するため、これらがブタ起因の寄生虫卵である可能性も考えねばならない。マンソン裂頭条虫はイヌ・ネコ・キツネなどに感染する寄生虫であり、ヒトは中間宿主となる。このためここではイヌに起源するとみなされる。よって、S E 8332の埋没段階にブタやイヌの糞を集めて投棄した可能性もあると考えられる。これらの仮定に立つならば、四分遺跡ではかなりの数のブタとイヌが家畜として飼われていた可能性があろう。ただし、現状では対比資料がなく仮定的ないし想定的な解釈を抜け出しえない。

周囲の植生であるが、中部と下部からはオナモミ属やヨモギ属が繁茂し、やや乾燥した状態であったと推定される。上部では、イネ属型を含むイネ科の花粉が多いため、水田が近接して広く分布するようになったとみなされる。森林植生としては、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が地域的な森林として分布していた。ただし、上位に向かってコナラ属アカガシ亜属は減少する。トネリコ属は湿地林を形成するため、トネリコなどの湿地林が近くにあったことが推定される。

〈参考文献〉

奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』 1992年

金丁清俊・谷口博一『新版 臨床検査講座 8 医動物学』医薬出版社 1987年

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard(1992). Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science 19.

金原正明「便所堆植物からさぐる古代人の食生活」『助成研究の報告4』味の素食の文化センター 1994年

金原正明「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店 1993年

は、ウリ類の種子が含まれるもの、イネは穎（穎殼）であり、雑草類も多い。また、層位的な変化において寄生虫卵・花粉・種実の出現傾向は一致しない。ヒトの糞便だとすれば、一度乾燥した分解的な環境下におかれ弱く小さな吸虫類の卵が分解した後、汚染的に再堆積した可能性を考えねばならない。この場合、近接して高密度の汚染源があったか人口密度が高く、その汚染域であったと考えられる。

C 第71-15次調査

(1994年3月)

本調査は個人住宅の新築にともなう事前調柟である。東西4m、南北20mの調査区を設定した。調査地は宮内西方に位置する。調査区の近辺では、かつて第27-6次調査、第66-2・3・4次調査において、中世環濠集落の環濠を検出し、環濠の規模を推定している。本調査区は第66-3次調査区と第66-4次調査区のほぼ中間に位置し、本調査でも中世環濠の検出が期待された。基本的な層序は、地表面から耕土・床上・暗灰褐色粘質土・淡灰色砂質土（地山）の順で、遺構を検出したのは暗灰褐色粘質土面である。

検出した遺構は溝1条と土坑4個である。

SD7293は幅約4.4m、深さ70cmの東西溝である。溝内から軒平瓦6641C形式・6275A形式と多量の羽釜類や14世紀主体の土師器皿・灯明皿が出土した。出土位置、出土遺物から考えて、第66-3・4次で検出した中世環濠と考えて間違いない。

4つの土坑のうち、北端の土坑からは14世紀代の瓦器が出土した。その他の3つの土坑は当初、建物の柱穴と思われたが、その東西に並行する柱穴ではなく、深さもそれぞれ異なることから現時点では建物の柱穴とは考えられない。

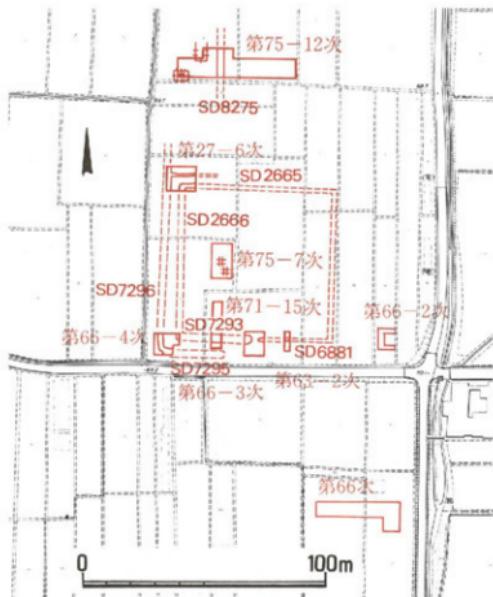


Fig.13 第71-15次、75-2・7次調査位置図 (1 : 2000)

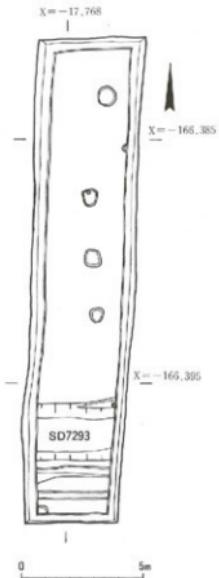


Fig.14 第71-15次調査遺構図 (1 : 200)

(1994年7月～8月)

本調査は、作業小屋建設に先立ち、樋原市綱手町で実施したものである。調査地は、醍醐池の西方で藤原宮西北部にある。しかし、周辺の調査では、後世の削平が著しく、宮に関する遺構はほとんど検出されていない。ただし、第27-6次調査、第63-2次調査、第66-2・3・4次調査では、14世紀頃の土器をともなう二重の環濠をめぐらした方形の区画の存在が判明している。今回の調査地は、この方形の区画内中央西寄りの位置にある。南北15m、東西8mの範囲に調査区を設け、調査面積は120m²である。

調査区の基本的な層序は、上から水田耕土・床土、黄褐色ないしは灰褐色砂質土の地山となる。

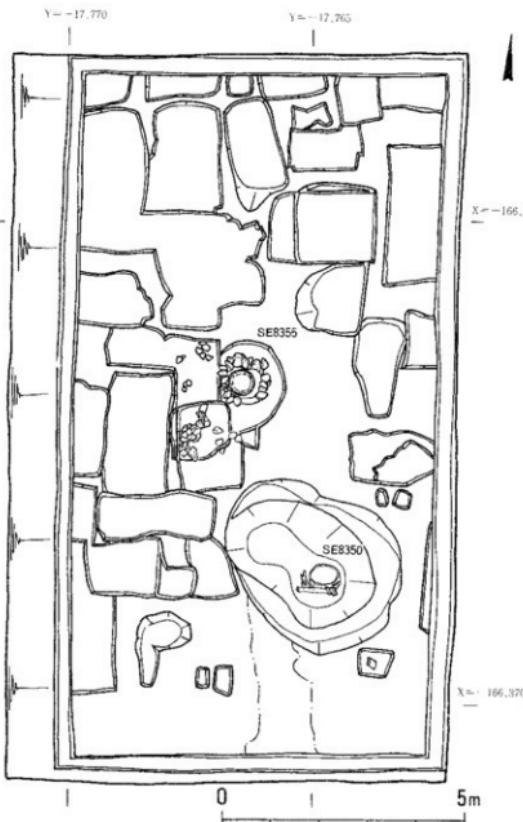


Fig.15 第75-7次調査遺構図 (1:100)

しかし、床上の直下から掘り込まれた多数の上坑による搅乱が著しく、遺構は灰褐色砂質土の上面で検出した。

検出した遺構には、井戸2基と多数の方形をなす土坑群がある。

井戸SE8350は、大形の円形掘形をもつ方形縦板組横桟どめの井戸である。掘形の大きさは、掘削時には直径3.2m、深さ2.7mほどであったとみられるが、井戸枠は抜き取る際に北西方向から穴を掘ったために、最終的には長径約4mに広がっている。井戸枠はほとんど抜き取られ、最下段の横桟の南半分と一部の縦板が残っていたにすぎない。縦板の幅は約20cmあるが、厚さは5mm程度のごく薄いものである。井戸底に、水溜に使われた大小の曲物3箇が遺存しており、このうち上段と中段の曲物の外面に墨書きが認められた。中段の

それは、「承安四年十月 □□□ 七日
〔貞か〕」と判読できる。抜取り穴から多数の瓦器と土師器が焼土とともに出土した。

井戸 S E 8355は、円形掘形をもつ円形石組井戸である。掘形の大きさは、直径 2 m、深さ 2.4 m ほどであるが、湧水はあまり認められない。石組の内法の直径は約 0.8 m あり、人頭大から拳大の川原石を積む。底に曲物を 3 箇利用した水溜があることを確認したが、石組が崩れる可能性があったため最下段までは掘り下げなかった。少量ではあるが 13世紀頃の土師器などが出土した。

これ以外に、調査区の全域で多数検出した方形ないしは長方形を呈する土坑群は、遺物が乏しくその所属時期を決定できない。しかし、上層観察によれば大半は床上直下から掘り込まれており、比較的新しい時代の遺構と推定される。

井戸 S E 8350の抜取りからは、多数の瓦器・小皿、土師器小皿・羽釜と、鉄釘 3 本が焼土・壁土とともに投げ捨てられた状態で出土した。土器はいずれも 12世紀後半の特徴をもつものであり、井戸底の水溜として利用されていた曲物に書かれた「承安四年」(1174) の墨書銘とも矛盾しない。縦板として用いられた板が曲物の素材と推定される厚さ 5 mm 内外の薄いものであることから、この井戸の存続年数もあまり長いものとは考えにくく、今後、この時期の土器編年の実年代を考える上で格好の材料となろう。

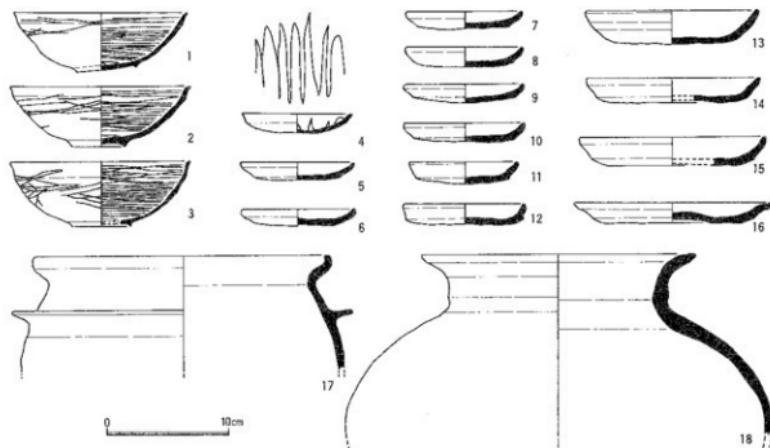


Fig.16 S E 8350抜取穴出土土器 (1～4瓦器 5～17土器 18陶器)

E 第75-12次調査

(1993年10月～11月)

本調査は奈良県橿原市醍醐町43-3・5・6・7番地において予定されている宅地造成（盛土・整地）、ならびに個人住宅建設に伴う事前調査である。調査面積は、調査区を東西50m、南北8mで設定し、北側で部分的に拡張したので、合計436m²であった。1994年10月11日から耕土・床土掘削を開始し、同年11月15日に埋め戻しを完了、調査を終了した。

本調査区は藤原宮西方官衙地区の北寄りにあたり、東には内裏跡に作られた醍醐池が望める。また本調査区の南では宅地造成や個人住宅の建設に伴って、発掘調査が実施されてきた。それによって、鎌倉時代に存在した二重の環濠を巡らす土豪の居館と推定される遺構がみつかった。環濠内部の建物は後世の削平によって明かでなかったが、第75-7次調査(本書p.18・19所収)で石組井戸がみつかり、環濠内部に生活空間があることが判明した。さらに井戸底の出土物には「承安四年（1174）十月」の墨書きがあり、環濠居館に関わる遺構および遺物の年代の上限が、従来考えられていたより若干古くなかった。しかし、一連の調査では、藤原宮期の遺構がほとんど確認されていない。これについてはこの付近で後世に大規模な地下げがあり、古代の遺構の多くがすでに削平されてしまったと推定されている。したがって、本調査区でも平安時代末から鎌倉時代（12世紀後葉～14世紀）の遺構や遺物が主としてみつかるものと予想された。

遺構

基本層序は上から耕土（厚さ20cm）、床土（厚さ10cm）、地山の黄褐色土層（厚さ20cm）、暗褐色土層（厚さ15cm）である。さらに後述する井戸S E 8272の調査によれば、以下数枚の上層と粘土層を経て、地表下1.2mで砂層に達する。この砂層の下は礫層であろう。すべての遺構は黄褐色土層上面で検出した。検出された遺構は古墳時代から室町時代頃までのもので、なかでも平安時代末期～鎌倉時代初期のものが予想通り主体であった(Fig.17)。以下、所属時代ごとに遺構を説明する。

古墳時代の遺構 調査区の東端で検出した斜行溝S D 8271である。その方位の振れから所属時期を推定した。

藤原宮期の遺構 掘立柱南北溝S A 8270である。後述する平安時代末期～鎌倉時代初期の建物遺構と比べて、柱掘形が方形（一边30cm）であることから所属時期を推定した。柱間寸法は2～2.1m（7尺）で、6間分を検出した。ただし、その方位は北で東に振れる。

平安時代末期～鎌倉時代の遺構 掘立柱建物2棟、南北溝1条、井戸1基、土坑数基を検出した。

S B 8273は桁行4間、梁行3間に復元できる東西棟で、柱間寸法は1.4～1.6mである。柱掘形は直径30cmの円形である。この中央に石組井戸S E 8272が位置するので、これは井戸を覆う建物、すなわち井戸屋形である。

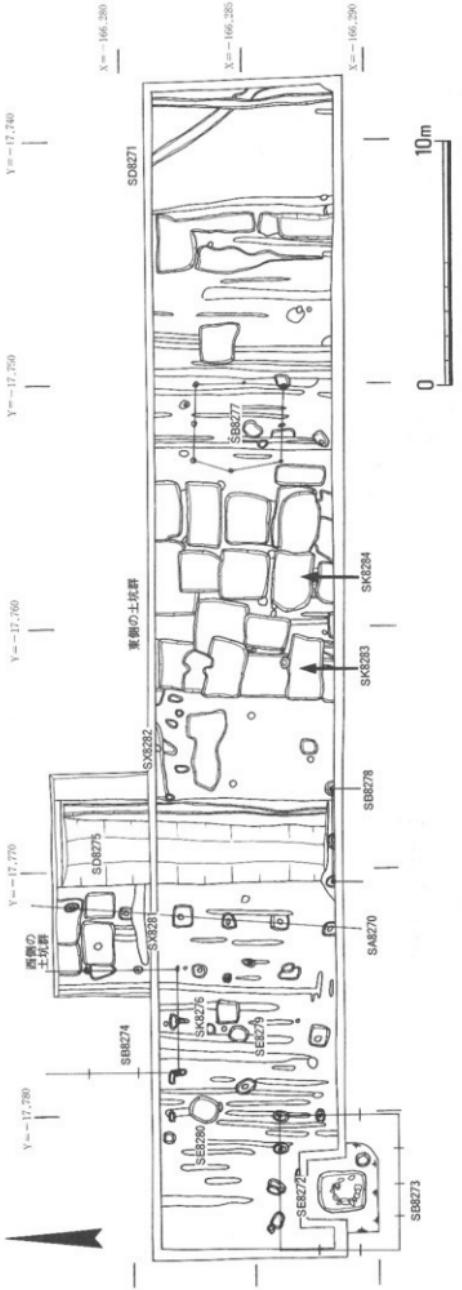


Fig. 17 第75-12次調査地図 (1 : 200)



Fig.18 井戸原形 S B 8273 (北から)



Fig.19 石組井戸 S E 8272 (北から)



Fig.20 東面環濠 S D 8275 (北から)

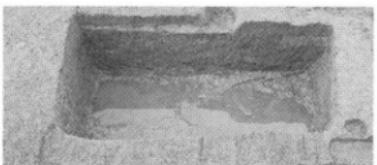


Fig.21 大型土坑 S K 8283 (南から)

S E 8272は下端に曲物を三段重ねで置き、その上の大半を人頭大から一抱えもある石を積み上げて構築した、深さ2mの井戸である。掘形は石組部分が東西1.5m、南北2mの長方形で、曲物部分が円形である。曲物下端は砂層に達しており、現在でもこんこんと水が湧き出す。石組の埋土からは瓦器羽釜や土師器小皿、カメの甲羅がなど出土した。

S B 8274は桁行3間以上（柱間寸法1.6～2m）、梁行2間（柱間寸法2.1m）の南北棟である。柱掘形は円形で、直径15cmと小さい。

S D 8275はS B 8273・8274の東側にある南北方向の素掘り溝である。その縦断面形は逆台形で、上幅が2.5m、底幅が0.9～1.0m、深さが1.1mである。埋土からは瓦器羽釜・小皿、土師器片口・小皿などが多量に出土した。埋土に純粹の砂層を含まないので、これは頻繁な流水を伴う水路の類ではなく、環濠の一部とみられる。

S K 8276はS B 8274の南側に掘られた平面形が長方形の土坑である（Fig.22）。その底面に完形の瓦器碗7点と瓦器小皿・土師器小皿各1点が一括して埋められていた。

室町時代以後の遺構 挖立柱建物2棟、井戸2基、土坑多数を検出した。

S B 8278は南北棟の北妻で、梁行2間、柱間寸法は1.2～2.0mである。S D 8275が埋没してから建てられている。

S B 8277は東西、南北ともに2間（柱間寸法1.5m）の建物で、柱掘形は直径15cmの円形である。これはS B 8273・8274やS D 8275から一定の距離があるので、当該期に所属するものと推定した。

S E 8279・8280は、それぞれ直径1.2m、0.7mで、深さ1m以上の素掘りの井戸である。埋土からは瓦器片などが出土した。

S D 8275の東西にあるS K 8283・8284などの東側の大型土坑群は、幅9mの範囲に南北に分布し、3～4列からなる帯状をなす。各土坑開口部の平面形は、長辺2.5m前後、短辺1.5m前後、深さは0.8～1.0mで、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である（Fig.21）。土坑の埋土は埋め戻したような堆積をし、土坑同士は相互に切り合う。埋土からは瓦器片や中国産磁器、宋銭などが出土したが、底面から完形品が出土することはなかった。これに対して、西側の大型土坑群は平面形が東側のものに比べて小さく、浅い。以上のはか、不整形土坑S X 8281・8282や単独の柱穴、耕作溝多数などを検出した。埋土からは瓦器片や木炭片が出土した。

遺物

土器は藤原宮期のものが数点で、12世紀中頃～14世紀の瓦器と土師器が大多数を占める。なかでもS K 8276底部に12世紀中頃の瓦器碗・小皿と土師器小皿が一括して埋納されていた（Fig.22）。うち瓦器碗3点が入子状に重なっていた。4点の瓦器碗の見込と2点の底部外面に「×」印を焼成後に針書きしている。なおS E 8272掘形・埋土の瓦器は13世紀末～14世紀で、S D 8275埋土の瓦器は12～14世紀のものである。さらに中国産（宋代か）青磁碗の破片がS K 8284などの大型土坑群とS D 8275の埋土、中国産白磁皿の破片がS D 8275から出土した。

瓦はS E 8279の埋土から藤原宮式軒平瓦6643Cが出土したほか、數片の丸瓦と平瓦がある。銅銭は宋銭で、「熙寧元寶」（1068年初鋤）がS K 8284から1点、「元符通寶」（1098年初鋤）が他の大型土坑から1点出土した。

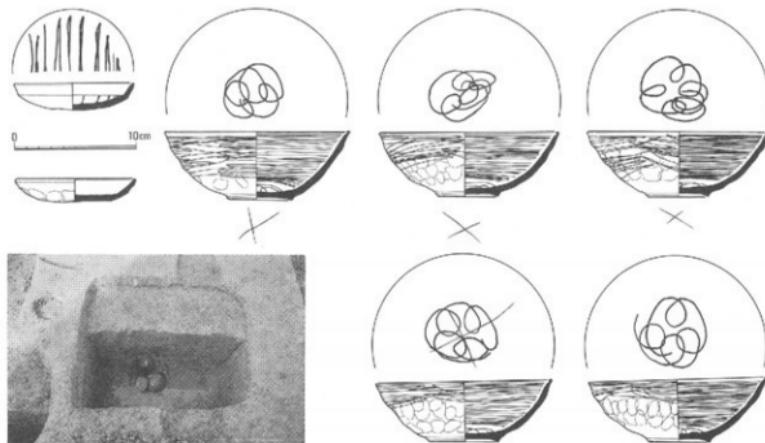


Fig.22 土坑S K8276出土瓦器と出土状況（左下写真）

まとめ

藤原宮期の遺構はなぜ希薄か 藤原宮西方官衙地区は東方官衙地区に比べて、遺構密度が低い。とくに西方官衙地区の北部では、藤原宮期の遺構がほとんどみつかっておらず、本調査でも然りである。これについては從来から後世の「地下げ説」が指摘されていた。後世の地下げが相當深く、藤原宮期の遺構が大部分削平されたという可能性である。確かに平安時代末期の環濠に関わる遺構も、すでに生活面が失われており、また S A 8270 と S B 8273 の柱穴の深さは 15~20cm と、平面形の大きさに比べて浅すぎるし、さらにいわゆる耕作溝も他の調査地のものと比べて浅すぎる。

S E 8279 から出土した藤原宮式軒平瓦などは、かつて本調査区に藤原宮期の生活面がまがりなりにも存在したことを示そう。しかし、その数量たるや、S E 8272 と S D 8275 という掘形の深い遺構からのものを含めても、微々たるものである。したがって、藤原宮期のこの付近に建物があまり建てられないまま、平城遷都を迎えたという可能性も考えられよう。今後、藤原宮・京の地形的環境を踏まえた、当時の都市計画と実際の土地利用の現状についての考察が必要である。

平安時代末期（12世紀中頃）につくられたもうひとつの環濠 S D 8275 はその構造と周辺の遺構からみて、一重の環濠の一部と推定される。つまり S B 8273・8274、S E 8272 は、東を S D 8275 に囲まれた内部施設の可能性が高い。つぎにその年代の問題である。環濠などの施設は、S K 8276 山上の瓦器の年代から 12世紀中頃に設置され、S E 8272 と S D 8275 出土の瓦器の年代から 14世紀まで存続したとみられる。これらの瓦器の年代が本調査区のすぐ南で発見された二重の環濠や石組井戸山上の瓦器の年代と共にみて、S D 8275 と南の二重の環濠は、同時に存在した可能性が高い。S D 8275 と S K 8284 などから山上の青・白磁と宋銭は、本来環濠の内部施設で使われたものだろう。

室町時代土坑群の性格は S K 8283・8284 を含む東西の大型土坑群の年代は、S D 8275 の西側にそれらと同様の土坑群があることから、環濠居館廃絶後である。また土坑の埋土の遺物には、江戸時代の染め付けなどが含まれていないことから、所属時期は室町時代と推定する。これらの性格については、集落墓の可能性を指摘しておきたい。それは土坑の形状が直方体を呈し、相互に埋め戻してから切り合い関係があり、土坑群が特定の範囲に分布しているなどの点が、いわゆる中世の粘土探掘土坑と異なるからである。類似した遺構は、推定山田道第 5 次調査（『概報』24 では、粘土探掘土坑と推定）などでもみつかっている。人骨、棺桶、さらに副葬品といえるものが、今後付近の類似した遺構から発見されるのを待って、土坑の性格に結論を下したい。

2 東二坊大路・宮東面・東方官衙地区の調査（第75-13次）

(1994年11月～12月)

本調査は、市道の拡幅に伴う事前調査として樋原市高殿町391-1、392-1、402-1、374-1において実施した。調査地は道路両側の法面であり、これを東西190mあまりにわたって発掘した。発掘面積は384m²である。

当該地は、藤原宮東方官衙および宮東辺外周部の左京四条三坊の東北坪にあたり、これに関連する遺構が期待できるところである。

遺構

検出した遺構には藤原京東二坊大路の東西両側溝、藤原宮東面外濠、東面大垣、東面内濠、先行条坊跡などがある。以下、主要な遺構について述べる。

S D 170は、藤原宮東面外濠である。溝幅は検出面で5.7m、濠底で3m、深さは1.3mを測る。濠内の堆積は暗灰色土、灰色粘土、灰色砂上、暗灰色粘土に分かれる。灰色粘土層は0.5mあまりと厚く、なかには相当数の木簡を含む多量の棒状木片、木屑などが堆積していた。木製品の他には、ごく少量の土器片と瓦片が出土したのみである。この灰色砂上、灰色粘土上からは1cmあたり2,000個を超す寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫など）を検出した。この寄生虫卵の出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強い。なお、この鑑定結果については、後述する。

S A 175は、藤原宮の東面大垣である。S D 170の心から西20mの位置にある。柱掘形と抜き取り穴の一部を2箇検出した。掘形の規模は東西が約2m。南北は不詳である。

S D 2300は、藤原宮の東面内濠である。S A 175の西12.5mにある。溝幅は検出面で3.2m～2.6m。溝の東の肩はえぐられ大きく広がる。検出面からの深さは0.9mである。濠内からは偏行唐草文軒瓦（6643C、6646D、6647A・D）や軒丸瓦（6279B、6278F）、および木簡1点と削り屑2点などが出土した。

S D 2281は、第27次調査で東二坊大路西側溝とされ、第32次調査では藤原京廃絶以後の溝とされた南北溝である。a（東）、b（西）の堆積があり、aからbと流れが移動している。aは幅1.2m、深さ0.4m、東の肩に護岸用の玉石がある。bは幅1～2m、深さ0.3mである。溝底にはa、bともに砂が堆積する。遺物としては、土器片が少量出土した。

S D 3031はS D 2281の西6mの位置にある南北溝である。第32次調査の成果から、東二坊大路西側溝とされた。幅3～3.2m、深さ0.6mである。溝内には砂が堆積し、土器が少量出土した。S D 3031の位置は外濠S D 170の東40.35mにある。

S D 3035は、S D 3031の西約6mにある南北溝である。幅1.3～1.6m、深さ0.4mである。溝内には炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。第32次調査では、溝内に堆積した土器が「飛鳥

III」を主体とすることから他の遺構より遡る遺構とされた。

S D 8310は、S D 2281の東10.5mにある南北溝である。幅1.5m、深さ0.3m。溝内には炭化物を含む灰色砂が堆積し、焼けコゲのある木屑や土器（須恵器・土師器）片が出土した。その位置と溝の状況からみて、東二坊大路東側溝の可能性が強い。

S B 8311は、左京四条三坊西北坪で検出した掘立柱の柱穴で、南北棟建物の南北いずれかの妻にあたると思われるが、東西塀の可能性もある。柱間寸法は1.6mである。

S A 8312は、左京四条三坊西北坪で検出した東西方向の掘立柱の柱穴である。柱間寸法は不等であり、塀と想定したが、建物の可能性もある。

S A 8313は、藤原宮内濠の西側で検出した3間分の東西塀である。柱間寸法は2.1m等間である。第29次調査では、これに並行して5間の東西塀 S A 2810を検出しており、あるいは一体となって建物となる可能性がある。その場合は桁行5間、梁行2間の東西棟となるが、なお詳しい検討が必要である。

S D 2844は、宮内にある先行条坊の東二坊坊間路 S F 2115の西側溝である。溝の幅は0.98m、深さは0.14mである。上面が削平をうけて浅く、遺物は出土しなかった。

S D 2845は、東二坊坊間路 S F 2115の東側溝であり、溝幅0.97m、深さ0.35mである。S D 2844と同様に、顯著な遺物はなかった。

以上の東西両側溝の検出により、S F 2115の路面幅は約6.5mと確定した。

遺 物

遺物には上器、瓦埠および木製品がある。土器は藤原宮期の須恵器、土師器と下層の弥生式土器および土師器などがあるが、量的には少ない。

瓦埠は内濠 S D 2300に集中しており、軒瓦はすべてここから見つかった。軒丸瓦には6279B、6278Fの2型式2点があり、軒平瓦には6643C、6646D、6647A、6647Bの3型式2種計7点がある。小面積の調査に関わらず、完形品の出土が目立った。

木製品には大量の棒状品と木簡、曲物などがある。棒状品は長さ17・18cmから22・23cm、幅0.5~0.6cmほどのものが目立つ。このなかには、やや細い「箸」状品も含まれている。棒状品が堆積した土層からは1㎠あたり2,000個を超す寄生虫卵（糞虫卵、鞭虫卵、肝吸虫など）を検出しており、その出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強く、これらの棒状品は糞便とともにうず木である。これは糞へらともいい、いわばトイレの「落とし紙」である。

木簡は外濠 S D 170と内濠 S D 2300から見つかった。このうち大多数は外濠から見つかっているが、現在整理中であり、ここでは主要な釋文を掲げるのにとどめる。

縣主里〔〕直若万呂

031 115×21×6

付札である。内濠出土。



Fig. 23 第75-13次調査遺構図 (1 : 200)

御取鮑口石 039 (197) × 29 × 5

・頓首天下達・……宇下急

・急可處在故日中之……□被賜莫

011 (125+65) × 27 × 4

この2点は外濠S D 170の木簡である。前者は付札である。

外濠の木簡は半分ほどに割り裂いたものが多く、木簡としての機能を終えた後に半分に割って籌木としたのであろう。

木製品としてはほかに、曲物の底板などが数点出土した程度である。このように、大量の木製品は棒状品が主であり、相当数伴う寄生虫卵のありかたと考えあわせると、外濠には糞便とトイレ用品を一括して投棄した可能性が高い。

まとめ

本調査の成果のひとつは、東二坊大路東西両側溝の検出である。東二坊大路の東側溝に南北溝S D 8310をあてることは、溝の位置と水が流れた痕跡を示す溝内の砂の堆積、および松明の一部とみられる焼けコゲのある木屑の出土などによって、ほぼ明らかであろう。問題は、対となる西側溝の比定である。

東二坊大路西側溝については、第27次調査の発掘段階で南北溝S D 2281がそれにあたるとみた。しかし、その後の第32次調査では、この溝に平安初期の土器が含まれることが明らかになり、この溝を西側溝にあてるに疑問が生じた。

S D 2281の西6mと12mの位置には、これに平行する2条の南北溝がある。西6mにあるのがS D 3031、同12mにあるのがS D 3035である。このうち、S D 3031は溝内に堆積した遺物の年代から側溝として矛盾がないのに対し、S D 3035は溝の土器が「飛鳥III」であることから、前者を西側溝、後者を宮造営前にあてたのである。

しかし、S D 3035に関してはその後の検討によって「飛鳥IV」的な土器を含むことが判明し、S D 3031と一連の溝である可能性がてきた。したがって、東二坊大路西側溝としては、S D 3031とともにS D 3035も候補となりうる。

いま、S D 2281とそれに平行する3条の溝（心心距離）との間隔を示すと、

a) S D 8310～S D 2281 = 10.5m

b) S D 8310～S D 3031 = 16.6m

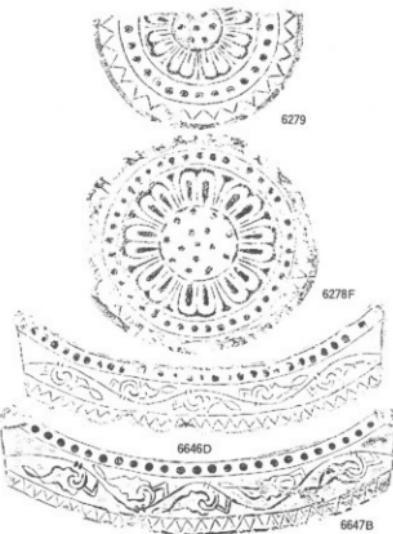


Fig.24 S D 2300出土軒瓦 (1:4)



Fig.25 宮東面遺構概略図 (1:2000)

c) S D 8310~S D 3035=22.6m

となる。このうち、c) の22.6mは平城京での大路推定値の7丈(21m)に近いが、従来、他で検出した藤原京大路の路面幅とやや開きがある。他方、b) の16.6mはこれまでの成果とあまり隔たらないので、ここでは S D 8310と S D 3031を東二坊大路の東西両側溝にあて、S D 3035に関しては今後の課題としておきたい。

調査成果の二は、藤原宮の東西規模について、新たな知見を得たことである。これまで、藤原宮の東西大垣間の距離については、926.6m程度に復元していた。しかし、調査の過程

で宮の東辺部を調査した第27次・32次調査の測量成果に誤りがあり、その値がかなり大きいことが判明したために、改めて、計算を行った。

第75-13次調査

第66-11次調査

第34次調査

東面大垣心

西面大垣心

西南隅大垣心

X = -166,406.40

X = -166,434.32

X = -167,025.664

Y = -16,957.650

Y = -17,884.72

Y = -17,879.397

第34次調査で検出した宮西南隅の心と第66-11次調査で検出した宮西面大垣の心から、西南大垣の振れを求めるとき、 $0^{\circ}30'57''$ 北で西に振れをもつ。藤原宮の大垣が正方形と仮定して、東西の振れを求め、今回調査の東面大垣心と、第66-11次調査の西面大垣心の距離を座標上で求めると、927m 28cmとなる。これは従来の値より68cmほど大きい数字である。

藤原宮外濠における寄生虫卵・植物遺体分析

試料 試料は外濠内採取の以下の記載の4点である。

外濠 5 A J B R R 26・27 灰砂土 A

灰砂土 B

5 A J L R Q 26・27 灰粘土 A

灰粘土 B

寄生虫卵分析 分析は、試料 1 cm³にフッ化水素酸処理を施しプレパラートを作製して行った。

1 cm³あたりの出現数は計数比から算定した。結果は表 (Tab. 6) と図 (Fig. 26) に示した。

寄生虫卵は回虫、肝吸虫、横川吸虫、日本海裂頭条虫、有・無鉤条虫、マンソン裂頭条虫が

検出された。4試料中3試料において試料1cm³あたりの出現密度が2,000をこえる。鞭虫卵と肝吸虫卵は各試料とも多く、回虫卵と横川吸虫卵は試料によって異なる。寄生虫卵組成から人に起因する寄生虫卵とみなされる。寄生虫卵の出現密度からみて、外濠の堆積物に多くの糞便が含まれているとみなされる。

学名	分類群 和名	部位	(1/10cc中)		5AJB RR26・27		5AJL RQ26・27	
			灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B		
<i>Ascaris lumbricoides</i>	回虫	卵殻	52	14	46	83		
<i>Trichuris trichiura</i>	鞭虫	卵殻	115	41	103	104		
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫	卵殻	81	9	58	58		
<i>Metagonimus yokogawai</i>	横川吸虫	卵殻	4		6	39		
<i>Diphyllobothrium nihonkainense</i>	日本海裂頭条虫	卵殻		2	2	2		
<i>Taenia solium-saginata</i>	有・無鉤条虫	卵殻				1		
<i>Diphyllobothrium mansoni</i>	マンゾン裂頭条虫	卵殻		1				
Total	計		253	66	216	286		
	(1cm ³ に算定)		(2530)	(660)	(2160)	(2860)		

Tab. 6 藤原宮外濠における寄生虫卵分析結果

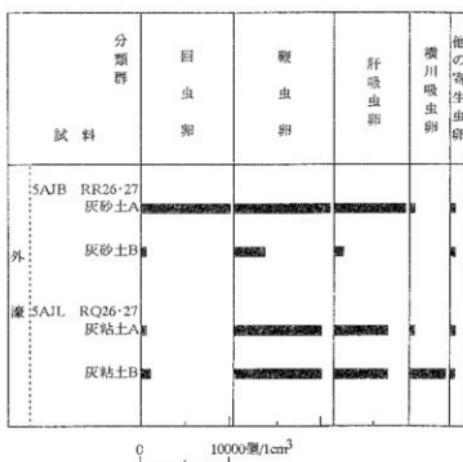


Fig. 26 藤原宮外濠における寄生虫卵組成

花粉分析 分析は、試料に水酸化カリウム処理、フッ化水素処理、アセトリシス処理の各処理を施し行った。花粉出現量(定量)については、その計数比から1試料1cm³の出現数を算定した。結果は表(Tab. 7)と図(Fig. 27)に示した。

各試料ともほぼ同じ傾向を示し、樹木花粉より草本花粉が多い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ属・スギ・マツ属複雑管束型の順に多い。草本花粉ではイネ科・アザケ科ヒュウ科・

学名	分類群 和名	SAJL		RR26-27	SAJL RQ26-27	
		灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B	
ArboREAL pollen	木本花粉					
<i>Podocarpus</i>	マキ属		1			
<i>Abies</i>	モミ属	2	2	2	1	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	3	6	2	1	
<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亞属	12	26	8	9	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	16	48	27	21	
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	1	4	1		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科一ヌガヤ科ヒノキ科	5	5	1	3	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1			
<i>Betula</i>	カバノキ属		2			
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	1		1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属アサダ	2	3	1	1	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリーシイ属	12	27	7	6	
<i>Fagus</i>	ブナ属	2		1		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	4	6	2	4	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	43	79	37	24	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属ケヤキ	5	4	6		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属ムクノキ	6	2	4	1	
<i>Acer</i>	カエデ属	2				
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属		1			
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属一ガマズミ属			2		
Nonarboreal pollen	草本花粉					
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属一ミクリ属	3		13	5	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		2			
Gramineae	イネ科	50	152	44	55	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	3	6	6	4	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	12	3	9	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	7	1	12	9	
<i>Rumex</i>	ギンギシ属	4		1	1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	8	6	5	2	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザデ科ヒユ科	106	16	31	33	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	7	3	4	3	
Ranunculus	キンポウゲ属	23	4	8	4	
Cruciferae	アブラナ科	11	24	9	7	
Umbelliferae	セリ科	5	2	1	4	
Solanaceae	ナス科	1	2	1	1	
<i>Plantago</i>	オオバコ属	4	1	6	3	
Valerianaceae	オミナエシ科			1		
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキヅル	3	1			
Lactucoideae	タンボボ亜科		2		1	
Asteroidae	キク亜科	2	3	2	2	
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ	2	1	1	2	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	37	30	42	26	
Fern spore	シダ植物胞子					
Monocolate type spore	単条溝胞子	1	38	5	10	
Trilete type spore	三條溝胞子	2	10	2	8	
ArboREAL pollen	木本花粉	116	218	101	72	
Nonarboreal pollen	草本花粉	280	268	190	171	
Total pollen	花粉總數	396	486	291	243	
Unknown pollen	未同定花粉	6	4	5	2	
Fern spore	シダ植物胞子	3	48	7	18	

Tab. 7 藤原宮外濠における花粉分析結果

ヨモギ属が優占する。ガマ属一ミクリ属・ミズアオイ属の水湿地植物が出現する。アブラナ科は3%前後の出現率を示す。

種実同定 それぞれ100ccを0.25mmの篩で水洗選別し、分類を肉眼および実体顕微鏡下で行った。各試料とも傾向は類似し、樹木の種実より草本の種実がきわめて多い。ヒユ属・ナデシコ科・キンポウゲ属などが多い。水湿地植物のコナギも検出されている。食用となる植物の種実としては、ウリ類種子が多く、他にイネ類・ヤマモモ核・キイチゴ属核・サンショウ種子・マタタビ種子・ナスが出現している。

学名	分類群	和名	部位	SAJB RR26・27		SAJL RQ26・27	
				灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B
arbor	樹木						
<i>Myrica rubra Sieb. et Zucc.</i>	ヤマモモ	核				1	
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	3	2	12	11	
<i>Zanthoxylum piperitum DC.</i>	サンショウ	種子				2	
<i>Actinidia polygama Planch. ex Maxim.</i>	マタタビ	種子	1	1	2		
herb	草本						
<i>Chara</i>	シャジクモ属	卵胞子				1	
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	穎	4			14	
<i>Setaria</i>	エノコログサ属	穎		2		1	
Gramineae A·B	イネ科A·B	穎	2	4	10	2	
<i>Anemone keisak Hassk.</i>	イボクサ	種子	8			4	
<i>Monochoria Korsakowii Regel et Maack</i>	ミズアオイ	種子	1				
<i>Monochoria vaginalis Presl</i>	コナギ	種子	7	19	18	24	
	var. <i>plantaginea Solms Laub.</i>						
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実		1		6	
<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ属	果実		5	2	6	
<i>Fimbristylis dichotoma Vahl</i>	テンツキ	果実				1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実		1		2	
<i>Polygonum Thunbergii Sieb. et Zucc.</i>	ミゾバ	果実	1	5	7	7	
<i>Polygonum A·B</i>	タデ属A·B	果実	21	16	37	40	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	果実	3	5	6	8	
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子		6	2	6	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	181	383	85	134	
<i>Portulaca oleracea L.</i>	スペリヒユ	種子	2	4	9	8	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	35	46	27	22	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	果実	63	41	8	32	
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	8	7	29	19	
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	16	7	18		
<i>Perilla</i>	シソ属	果実				6	
<i>Solanum melongena L.</i>	ナス	種子	5	1	4	2	
Solanaceae	ナス科	種子	2	5	18	23	
<i>Cucumis melo L.</i>	ウリ類	種子	32	3	28	44	
		破片	8	2	11	12	
<i>Eclipta prostrata L.</i>	タカサゴロウ	果実	8	6		10	
Total	合計		411	572	334	447	

Tab. 8 薩摩半島における種実同定結果（試料100cc中）

考察 外濠堆積物の分析の結果、4試料中3試料が2000個をこえる寄生虫卵の出現密度を示し、糞便が多量に含まれる堆積物とみなされる。花粉分析では、周囲から供給された花粉が多いよう、アブラナ科が少し出現するほかは、食用植物の花粉はあまり出現していない。種実では4試料中3試料から1割から2割程度果実や種子の食べられる植物種が含まれている。以上、外濠は人の糞便が多量に混ざりつつ、周囲の植生からも花粉や種子が供給されて堆積したと考えられる。

なお、周囲の植生であるが、ヒュ属（アカザ科—ヒュ科）・ヨモギ属・イネ科などのやや乾燥した人里に好んで生育する草本が多く、排水のよい乾燥地であったと推定される。外濠には、

ガマ属・ミクリ属やコナギの水湿地植物やタデの仲間が繁茂しており、水湿地状の状態であった。なお、周辺地域にはコナラ属アカガシ亜属を主にスギ・マツ属複維管束亜属などの樹木が多くあった。

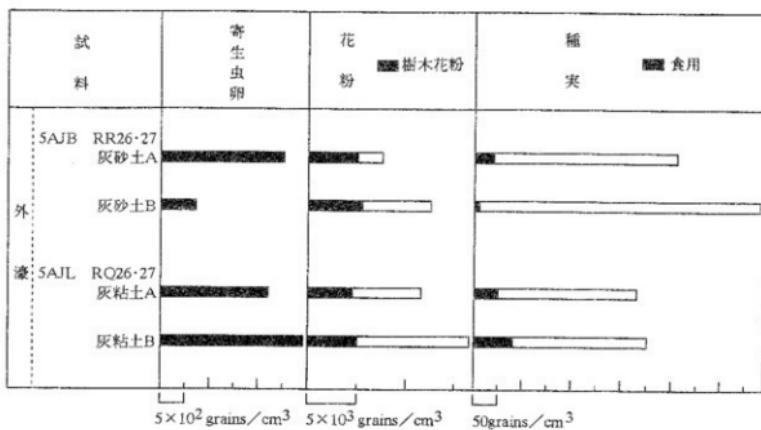


Fig. 27 藤原宮外濠における寄生虫・花粉・種実出現図

〔参考文献〕

金原正明「花粉分析による古環境復原」『新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法』角川書店 1993年

奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』1992年

Peter J. Warnock and J. Reinhard(1992). Methods for Extraxing Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science

金原正明「便所堆植物からさぐる古代人の食生活」『助成研究の報告』味の素食の文化センター 1994年

(金原正明・金原正子・中村亮仁)

3 宮西面外濠の調査（第75－1次）

（1994年4月）

本調査は道路築造に伴う事前調査として、福原市四分町で行ったものである。調査地は藤原宮西面外濠の位置にあたる。東西25m、南北4mの調査区を設けて調査を実施した。層序は上から順に、褐色粘質土（耕作土）、緑灰色微砂（床土）、黄色粘質土、茶褐色土、暗褐色粘質土（弥生時代包含層）、青灰色粘質土（地山）である。

西面外濠SD260は、暗褐色粘質土の上面から切り込む。本調査区における濠幅は東西約13mである。最上層は青灰色微砂層で、この土層の下から外濠の堆積層暗灰色粘質土を耕作土とする10世紀代の水田を検出した。水田は外濠の東寄りに2枚あった。水田SX8314は東西約10m、南北長は調査区外のため不明である。南の水田SX8315との間は、下幅35cm・高さ15cmの畦畔で区画する。なお、西に偏した位置に水口を切っており、南側から北側の水田に水を送っていたと考えられる。水田の西側には下幅70cm・高さ12cmの畦畔がある。この西に幅1.7m・深さ0.5mの南北溝SD8316がある。溝の埋土は、暗青灰色微砂や青灰色細砂である。なお、水田SX8314には畦畔を切ってSD8316から水を取り入れた痕跡が残っていた。

さらに下げて、暗灰色砂質土に達したが藤原宮期の堆積層にいたることは出来なかった。

今回の調査において、西面外濠は10世紀代には水田化されていたことが明らかとなり、中世におけるこの地域の土地利用を考える上で貴重な資料を提供することとなった。

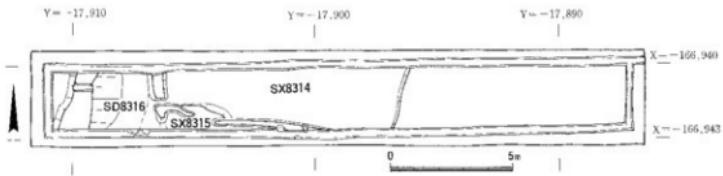


Fig.28 第75-1次調査遺構図（1:200）

4 宮内その他の調査

A 第75-5次調査

(1994年6月～7月)

本調査は水道管の付け替えに伴う事前調査として、権原市高殿町で行ったものである。調査地は藤原京左京六条三坊西北坪から宮西方官衙地区にかけて、幅70cm、総長約900mにおよぶ。深さは一律に地表下1.4mである。西面大垣周辺の諸施設、東西両朝集殿の検出が期待されたが、調査区の幅が狭く、かつ旧管理設時の掘形の再掘削を原則としたことによって、藤原宮期の遺構と確定できるものは検出できなかった。

B 第75-9次調査

(1994年9月)

本調査は個人住宅改築に伴う事前調査である。調査地は藤原宮内の東方ほぼ中央部に位置する。これまでにも、調査地のある高殿の集落内で小規模な調査がおこなわれているが、藤原宮に関連する遺構はなく、主として中世の遺構が検出されているのみである。本調査でも藤原宮に関わる遺構は検出できなかったが、中世の遺構を検出した。検出した遺構は池状遺構の一部である。基本層序は現代の地表面から近代の整地土、褐色土、14～15世紀の土師器を含む暗青灰褐色土である。

池状遺構SX8240は掘形を掘り、その内側に入頭大の石を並べ、裏込土で石を固定する。部分的には階段状に二段に石が据えられている。まわりの石の上端から底までは約30cmと浅く、池であるかどうか疑問がある。調査区内では、石はほぼ四半円状に並んでおり、全体は直径3m程度の円形と想像される。

池状遺構内からは14～15世紀の瓦器が出土した。

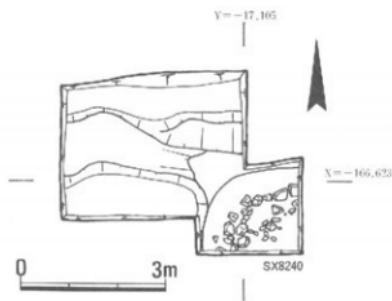


Fig.29 第75-9次調査遺構図(1:100)



Fig.30 池状遺構SX8240

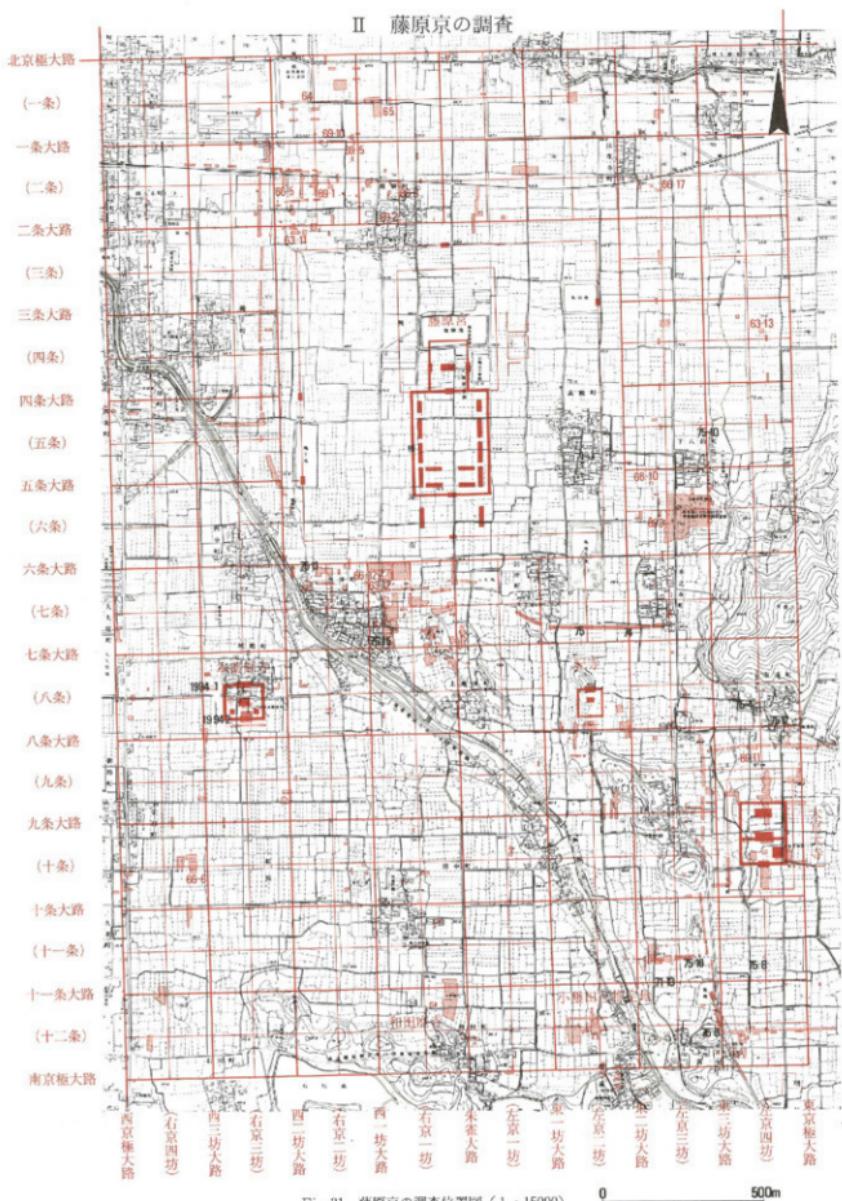


Fig.31 藤原京の調査位置図 (1 : 15000)

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報員
藤原宮 71-13	6 AM II - J	434m ²	94. 1.10 ~ 94. 4. 7	高市郡明日香村雷字櫛 葉繩手 (左京十一条二坊)	奈良県	道路建設 (雷丘北方)	西口 寿生	52~57
74	5 AWG - H・P	2368m ²	93.12. 1 ~ 94. 3.24	樅原市木之本町54-2 他 (左京七条二・三坊)	樅原市	市道飛騨～ 木之本線建設	鳥田 敏男	38~44
75	5 AWH - A 5 AWG - P 5 AJH - F	2200m ²	94. 4. 4 ~ 94. 8. 8	樅原市木之本町326他 (左京七条二・三坊)	樅原市	市道飛騨～ 木之本線建設	上原 真人	45~50
75-3	5 AMH - D・E・F 5 AMJ - A	500m ²	94. 6.14 ~ 94. 7.13	明日香村雷東浦 (左京十二条三坊)	奈良県	道路拡幅 (雷丘東方)	大駒 潔	58~60
75-4	5 BNG - E	16m ²	94. 6.16 ~ 94. 6.22	樅原市南浦888 (左京八条四坊)	西井輝男	住宅建設	深澤 芳樹	51
75-8	5 AMC - Q・R 5 AMH - B・C	68.7m ²	94. 8. 1 ~ 94. 8.10	明日香村奥山 (左京十一条四・五坊)	明日香村	下水道整坑	伊藤敬太郎	62
75-10	5 AJC - B	50m ²	94.10. 3 ~ 94.10.11	樅原市下八駒町141 (左京五条二坊)	山尾吉史	住宅建築	鳥田 敏男	61
75-11	5 AJM - C・D	528m ²	94.10. 3 ~ 94.11. 1	樅原市四分町 256-3・12・13 (右京七条二坊)	奈良県	バイパス建設	金子 裕之	63~65
75-15	5 AWH -	300m ²	94.12.12 ~ 95. 2. 1	樅原市飛驒町94-1 (右京七条一坊)	樅原市	住宅建設	荒木 浩司	未収録
75-16	5 AMH - J	710m ²	95. 1. 9 ~ 95. 4. 8	明日香村雷上地内 (左京十一条二坊)	奈良県	県道新設 (雷丘北方)	川越 俊一	未収録
75-17	5 BNG	10m ²	95. 2.13 ~ 95. 2.15	樅原市南浦49 (左京八条四坊)	田中博史	住宅建築	藤田 直児	未収録
本葉師寺 1993-3次	6 BMY - D	307m ²	94. 2.10 ~ 94. 4.15	樅原市城殿町 282・283・284 (右京八条二坊)	西田佐幸	計画調査	花谷 浩	66~73
本葉師寺 1994-1次	5 BMY - L・K	170m ²	94. 9.21 ~ 94.10. 6	樅原市城殿町 231-1・232-1 (右京八条三坊)	太田憲佑	住宅新築	鳥田 敏男	74
本葉師寺 1994-2次	5 BMY - N	558m ²	95. 2. 3 ~	樅原市城殿町 282・283・284 (右京八条三坊)	西田佐幸	計画調査	花谷 浩	未収録

Tab. 9 藤原京の調査一覧

1 左京七条二・三坊の調査（第74次）

(1993年12月～1994年3月)

本調査は市道飛騨木之本線の敷設工事に伴う事前調査である。工事予定地は木之本町の集落から西へ向かって、飛騨町へ繋がる。今回の調査では工事予定地のうち木之本町から西へ東西210m分を調査した。調査区は現農道、水路の関係で3区に分け、東から東区、中区、西区とした。調査面積は約2160m²である。調査地は左京七条三坊西南坪および七条二坊東南坪にまたがり、東二坊大路の検出が期待された。その結果、検出した遺構は、東二坊大路とその両側溝、掘立柱建物9棟、掘立柱塀4条、井戸1基、楕状遺構1基、溝11条である。

遺構

東二坊大路 東二坊大路S F 250の東西両側溝を検出した。東西両側溝の心々距離は約12mで、東側溝S D 249は幅1.85m、深さ45cm、西側溝S D 251は幅2.25m深さ35cmである。両側溝とも溝内には黄灰色の砂が充満し、溝内では常に水が流れていると考えられる。この両側溝間の中央でも、両側溝に並行する南北溝S D 252を検出した。この溝は幅1.50m深さ0.3mで、埋土が疊れを混じえた暗褐灰色の粘土で、両側溝とは状況が異なる。しかし、溝の位置が両側溝間の丁度中央に位置することから、条坊に関わる遺構である可能性がある。

東側溝からは飛鳥V期の土器が、西側溝からは飛鳥IV～V期の土器が出土した。

左京七条三坊西南坪の遺構 この坪で注目されるのは、二重の区画施設を有することである。すなわち東二坊大路東側溝から約12m東に、1mを越える大規模な掘形を持った南北塀S A 245があり、さらにS A 245から24m東にも大規模な掘形を持った南北塀S A 230がある。S A 245・S A 230とともに柱間寸法は2.4m(8尺)等間である。S A 230では柱掘形の他にはぼ柱掘形に匹敵する抜取穴と小穴(柱痕跡か?)を検出し、小穴は堀形の北辺に位置しており、柱は堀形の北辺に立っていたものと思われる。

東西棟S B 220は、S A 230の東側に位置する東西に並ぶ9個の大規模な柱穴である。桁行8間、柱間寸法2.4m(8尺)等間の東西棟の南側柱列と考えられる。柱穴の抜き取り穴からは

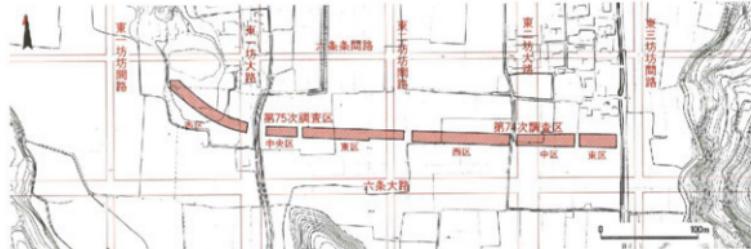


Fig.32 第74・75次調査位溝図 (1 : 5000)

飛鳥IVもしくはVの土器が出土した。

S B211は東口の東端で検出した南北棟である。桁行5間、梁行2間、柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m（6尺）等間である。

S B219は東区の南端で検出した建物で、南北棟の北妻と推定される。柱間寸法は1.5m（5尺）等間である。

S B225は東区西端で検出した南北棟である。方位が北でやや東に振れる。桁行4間、梁行3間、桁行柱間寸法1.8m（6尺）等間、梁行柱間寸法は1.1m等間で全長3.3m（11尺）となる。

S B240は中区東寄りで検出した南北棟である。桁行3間、梁行1間の身舎の東西に庇をもつ。桁行柱間寸法は1.8m（6尺）等間、身舎梁行2.4m（8尺）、庇の出1.8m（6尺）である。一部柱筋が描わぬが、現状では以上のような復原が妥当であろう。

S B241はS A245の東に近接して建つ南北棟で、方位が北でやや西に振れる。桁行3間、梁行2間、柱間寸法は桁行中央間1.8m（6尺）、端間1.5m（5尺）、梁行1.8m（6尺）等間である。

東区の東ではT字形に流れる溝S D213・214・216と、その交点で樹状遺構S X215を検出した。T字形の溝のうち、S D213とS D214は、当初幅1m、深さ約60cmのL字形の溝で発掘区東端で広がりをみせている。この溝はある時期に中程まで埋められ、この時に溝の交点に樹状遺構S X215がつくられ、南へ抜ける細い溝S D216が掘られる。

樹状遺構S X215は内法1.4mの方形、深さ0.2mで、底に5枚の板を敷き並べ、底板に溝をきって側板を立てている。この遺構は、溝から水を引き込んで水を溜める施設であったと想像される。S X215の北側とS D216の取付き部分では、S D216が浅い土坑状に広がって比較的多くの遺物を含んでおり、水が溢れた痕跡であろう。なお、溝および樹状遺構内からは飛鳥Vを主体とした土器が出土した。

S X235はS A230の西に接して位置する根石状の遺構である。拳大の石を根石状に据えた掘形5個がL字形に並ぶ。建物の一部である可能性があるが、現状では確定できない。なお、この一休の地山は礫を大量に含んでおり、地山に礫を多く含む所ではこのような仕事をしなかったとも解釈できる。

左京七条二坊東南坪 S B270は、西区東寄りに建ち、方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる南北棟である。桁行4間以上、梁行2間で北から2間目に間仕切の柱が立つ。柱間寸法は桁行が北から2.1m、2.4m、2.1m、2.1m、梁行が1.65m等間である。

S B280は、西区ほぼ中央に建ち、方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる南北棟である。桁行3間以上、梁行2間、柱間寸法は桁行1.8m等間、梁行1.65m等間である。

S B285はS B280の南に位置し、西妻をS B280の東側柱と揃える。方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる東西棟で、平面はやや歪である。桁行3間、梁行2間、桁行柱間寸

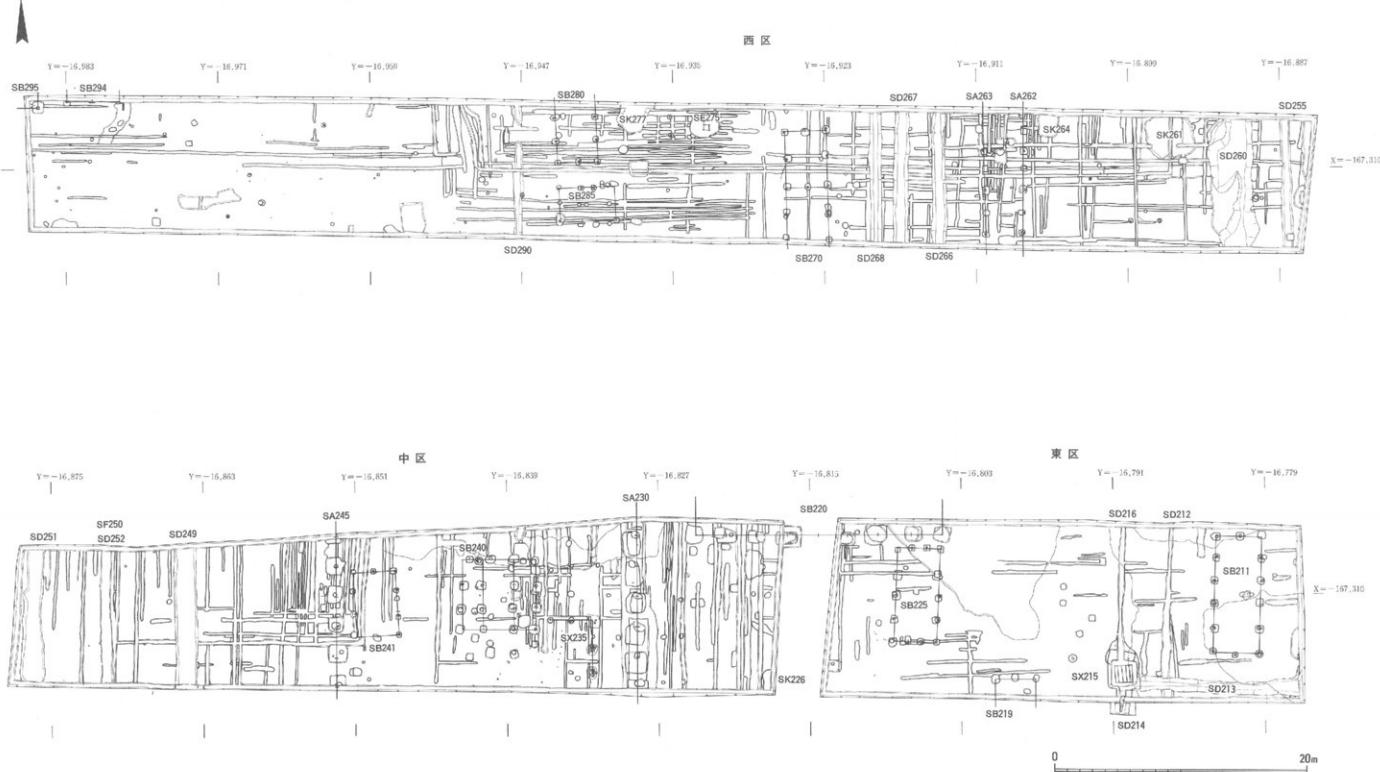


Fig.33 第74次調査遺構図 (1 : 300)

法は西から1.35m、1m、1.3m、梁行柱間寸法は1.4m等間である。

S A 262は西区東寄りに建つ南北堀で、方位が国上方眼方位に対して北で若干東に振れる。7間分を検出し、柱間寸法は1.4m～1.8mと不揃いである。

S A 263はS A 262のすぐ西に建つ南北堀で、方位が国上方眼方位に対して北で若干西に振れる。7間分を検出し、柱間寸法は1.4m～1.8mと不揃いである。

S D 260は幅2～3m、深さ0.7mの大規模な南北溝で、部分的に蛇行している。溝内からは飛鳥V期の土器が出土した。

藤原宮期のものと推定される南北溝はS D 260の他にもS D 266・267・268・290の4条を検出した。いずれの溝とも幅1m内外で、深さは30cm～40cm程度である。S D 267からは飛鳥Vの土器が出土した。

S E 275は西区ほぼ中央に位置する井戸である。東西2.3m、南北2mの楕円形の堀形を掘り、中に横板蒸籠組の井戸枠を据えている。井戸枠は内法幅約45cmで、長さ55～60cm、幅25～30cm、厚さ約2cmの板の内法位置に上下から板幅分の幅の切れ込みを入れ、最下段を南北方向に立て、順次東西・南北方向に段々に板を組上げている。井戸枠内からは飛鳥Vの土器が出土している。

遺物

土器は飛鳥IV期～V期の土師器・須恵器が出土し、瓦は東二坊大路西側溝から断片が少量出土したのみで、全体的に遺物の出土量が少ない。

まとめ

条坊 今回の調査では、予想通り東二坊大路を検出した。その両側溝の心々距離は12mである。S D 249を東側溝、S D 255を西側溝とすれば両側溝間の距離は約22m、S D 260を西側溝とすれば両側溝間の距離は約26mとなる。また、中区と西区間の未発掘区に西側溝がある可能性も否定できない。しかし、溝の形状および溝内の埋土の状況から判断して、S D 249とS D 251は一連の遺構と考え、S D 249を東側溝、S D 251を西側溝と推定する。このときの道路および側溝心のおよその国上方眼座標は以下の通りである。

東二坊大路東側溝	X = -167,310.0	Y = -16,864.5
東二坊大路道路心	X = -167,310.0	Y = -16,870.5
東二坊大路西側溝	X = -167,310.0	Y = -16,876.5

ここで、注目されるのは大路中央にある南北溝S D 252である。S D 252は前述のように条坊の丁度中央に位置し、埋土からして溝として機能した痕跡がない。条坊計画のために一時的に掘られた溝、または道路面の水抜きの機能を果たした溝等の可能性が考えられるが、今後発掘成果を収集した上で結論を出したい。

次に東二坊々間路との関係をみると、第75次調査では東二坊々間路西側溝S D 302と東側溝

に並行すると推定されている南北塀 S A 301を検出している。東側溝を検出してないために道路心を確定し得ないが、1大尺を35.6cm～35.7cm程度とすると、東二坊大路心から西へ375大尺の位置がS D 302とS A 301の間におさまる。したがって、S D 302を東一坊々間路西側溝として妥当である。

左京七条三坊西南坪 左京七条三坊西南坪は大規模な塀によって二重に区画されている。外側の区画施設 S A 245は東二坊大路東側溝心から約12m（40尺）東に位置し、内側の区画施設 S A 230はS A 245からさらに約24m（80尺）東に位置する。S A 245とS B 220との間隔は約4.8m（16尺）である。S A 230の柱位置が柱掘形の北端に寄っていることから、S A 245とS B 220は柱筋を揃えていたと推定される。さらにS A 245とS A 230も柱筋を揃えており、二重の区画施設とその内部の大規模な建物S B 220は、ほぼ8尺（2.4m）の方眼上に計画された可能性がある。

以上のS B 220・S A 230・S A 245およびS X 215が伴出土器より藤原宮期の一連の遺構と推定される。その他の小規模な建物のうち方位が振れているS B 211・225は上記の遺構とは時期を異にすると考えられる。また、S B 240・241が藤原宮期に属するかどうかも決め難い。

いずれにせよ、この坪内は二重に大規模な塀で区画されて、その内部に大規模な建物が計画的に配置されていた可能性が高い。また、樹状の特殊な施設をもっており、当坪内の施設が相当に格の高いものであったことを窺わせている。今後この近辺の調査成果が期待される。



Fig.34 左京七条三坊西南坪遺構模式図

左京七条二坊東南坪 左京七条二坊東南坪は同三坊西南坪に比べ遺構が希薄である。2条の南北塀 S A 262・S A 263があるが、条坊から大きく内側に位置する点、方位が振れる点から、藤原宮期の条坊と関係した区画施設とは考え難い。また、建物が数棟建つが、いずれも小規模な建物のみで、坪内の様相としては大規模な造営が行われた痕跡はない。なお、この坪で注目すべきは6条の南北溝で、その位置関係を下図(Fig.35)に示した。伴出遺物はいずれも宮期直前から宮期に属しており、坪内になぜこのような溝が掘られたかを今後検討する必要がある。

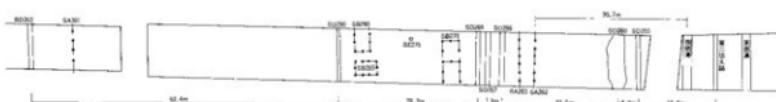


Fig.35 左京七条二坊東南坪遺構模式図

2 左京七条一・二坊の調査（第75次）

（1994年4月～8月）

本調査は市道飛騨木之本線建設に先立つ事前調査で、第74次調査区の西延長にある。調査地は福原市木之本町326ほか、および明日香村小山223ほかに所在し、藤原京左京七条二坊東南坪の西端と西南坪および左京七条一坊東南坪に該当する。調査面積は約2200m²である。農道や現水路との関係で、東区・中央区・西区の3地区に分けて調査を実施した。

遺構

検出した遺構には、古墳時代～藤原宮期の流路、古墳～飛鳥時代の掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、井戸1基とそれによりつく溝2条、藤原宮期の東二坊々間路、掘立柱建物3棟、井戸3基、中世の店舗跡などがある。なお、西区（左京七条一坊東南坪）は飛鳥川右岸に点在する雷丘・小山・宝泉寺山などに連なる残丘の一つである。調査の結果、古墳～飛鳥時代には現状よりも高く急傾斜をなし、裾に広がる平坦地には掘立柱建物などが建っていたが、藤原宮期に大規模な切土・盛土を行い、残丘を広げてやや高い平坦地を造成したことが判明した。その整地上は6世紀中頃の須恵器片を含む黄褐色土層や埴輪片を含む有機土層が斜面に沿って縞状に堆積し、かつての残丘上には古墳があった可能性が高い。

旧流路 東区西端（左京七条二坊西南坪）で南東から北西に向かって流れる旧河川を検出した。本調査区では2条に分かれしており、西流路SD313は幅8m以上、深さ1m以上である。暗灰粘土、有機質を含む暗灰粗砂、灰色粗砂が次第に堆積した状況が看取できるが、遺物をほとんど含まない。東流路SD310は古墳時代末期から藤原宮期に至るまで存続し、古墳時代末期～飛鳥時代のSD310Aは幅3～5m、深さ0.6mで、両岸を杭で護岸している。堆積した暗灰砂中から、飛鳥Iを含むそれ以前の土器類（須恵器杯口身・蓋片、上師器杯C1・鉢B・高杯H・壺Bなど）のほか机天板（護岸の堰板に転用）、木鉢、横斧の膝柄などが出土した。藤原宮期には下層流路を覆うように暗灰粘土が幅8mにわたって広がる（SD310B）。上面には多数の杭を打ち込んでいるが、規則性を看取できない。暗灰粘土中からは藤原宮期の上器片・瓦・馬の顎骨などが出土した。SD310Bの中央から東北に向けて、杭と堰板で護岸した溝SD312がとりつく。SD312は幅0.5mで砂が堆積しているが、堰板で護岸した部分だけは底がえぐれて暗灰色粘土が堆積していた。埋土から瓦片などが小量出土した。

古墳～飛鳥時代の遺構 中央区で桁行2間（3.4m）、梁行2間（3.0m）の掘立柱建物SB320、井戸SE315とその東西にとりつく溝SD314・317とを検出した。SB320の主軸は、北で約45°西に振れている。SE315は径2.3m、深さ85cmで、井戸枠の痕跡はない。西にとりつくSD317の水口の両側には花崗岩玉石を立てる。SD317は西へ延び、約20mで北へ曲折して南北溝SD319に連なる。SD319は底に卡石を敷き、両側にも石を立てた石組溝で、幅20cmである。

なお、S D 317の西端付近にも玉石が散乱しており、石組溝を改作した可能性もある。S E 315・S D 317から飛鳥 I～IIの上器（須恵器杯H・甕片、土師器杯C I・鉢B・高杯H・甕Bなど）が出土している。

西区下層では、桁行4間（全長6.6m、柱間寸法1.65m等間）、架行2間（全長4.2m、妻柱を欠く）の掘立柱建物S B 360と掘立柱塀S A 361とを検出した。S A 361は5間で9m、柱間寸法は不揃いである。S B 360・S A 361とも主軸は北で約45°西に振れている。周囲には方位を等しくする溝がいくつかあるが、建物とは直接結びつかない。S B 360の柱掘形を覆う焼土塊から6世紀中頃（T K 85）の須恵器高杯片が出土している。

藤原宮期の遺構 東区で東二坊々間路S F 300の西側溝S D 302を検出した。S D 302は深さ70～80cm、幅0.9～1.0mで南でやや狭まる傾向がある。長さ9.3m分を検出し、さらに南北に延びる。溝底には黄灰砂が堆積し、短期間は水が流れたようだ。その上の暗灰粘土層は流れがよどんだことを思わせる。溝内からは少量の瓦・埴・土器片・木片が出土した。東側溝は存在しなかつたが、推定位置近くに掘立柱塀S A 301が存在する。S A 301は柱間寸法2.0～2.1mで5間分を検出した。S D 302とS A 301とは心々で東西約8.5mを測る。

S A 301の東、藤原京左京七条二坊東南坪内には、井戸S E 304がある。S E 304は直径1.5m、深さ1.15mで、井戸枠の痕跡はない。埋土から少量の土器片が出土した。

S D 302の西、左京七条二坊西南坪内においては、上述したS D 310B・S D 312以外に、東区で井戸S E 305・309、中央区で掘立柱建物S B 325を検出した。S E 305は直径2.5m、深さ1.7mで、井戸枠の痕跡はない。埋土から完形平瓦を含む瓦片、飛鳥Vの上器（土師器鍋・甕Bなど）、角材・木製縄（杓子）・瓢箪などが出土した。S E 309は直径2.0m、深さ1.7mで、井戸枠の痕跡はない。埋土から飛鳥Vの上器（土師器鍋A・甕B・盤Aなど）、瓦片、箆・斎串などが出土した。S B 325は梁行2間（3.9m）の南北棟の北妻部分で、桁行1間（柱間寸法2.4m）分を検出した。妻柱および2本日の側柱は、玉石を礎盤にしていた。

東一坊大路は中央区と西区の間を通るが、農道・水路の関係で調査できなかった。その東の左京七条一坊東南坪内（西区）には、掘立柱建物2棟（S B 350・351）がある。これらはかつて急傾斜だった残丘を切り崩し造成した東南向きの緩斜面上に建っていた。一辺1m以上の大型柱掘形をもつ掘立柱建物S B 350は、梁行3間（6.0m、柱間寸法2.1・1.8・2.1）、桁行5間（12m）以上（柱間寸法2.4m等間）の南北棟で、いくつかの柱掘形は柱筋方向に長い長方形を呈する。S B 351はS B 350廃絶後の東西棟建物で、梁行3間（6m）、桁行3間（柱間寸法1.8m等間）以上である。柱掘形は一辺40～60cmと小規模である。

中世の遺構 中央区西端で検出したS B 321は、柱間2.1mの縦柱建物の東南部にあたるが全体規模不詳。柱穴内やこれを切った耕作溝から黒色土器が出土しているので、平安時代にさかのぼると思われる。

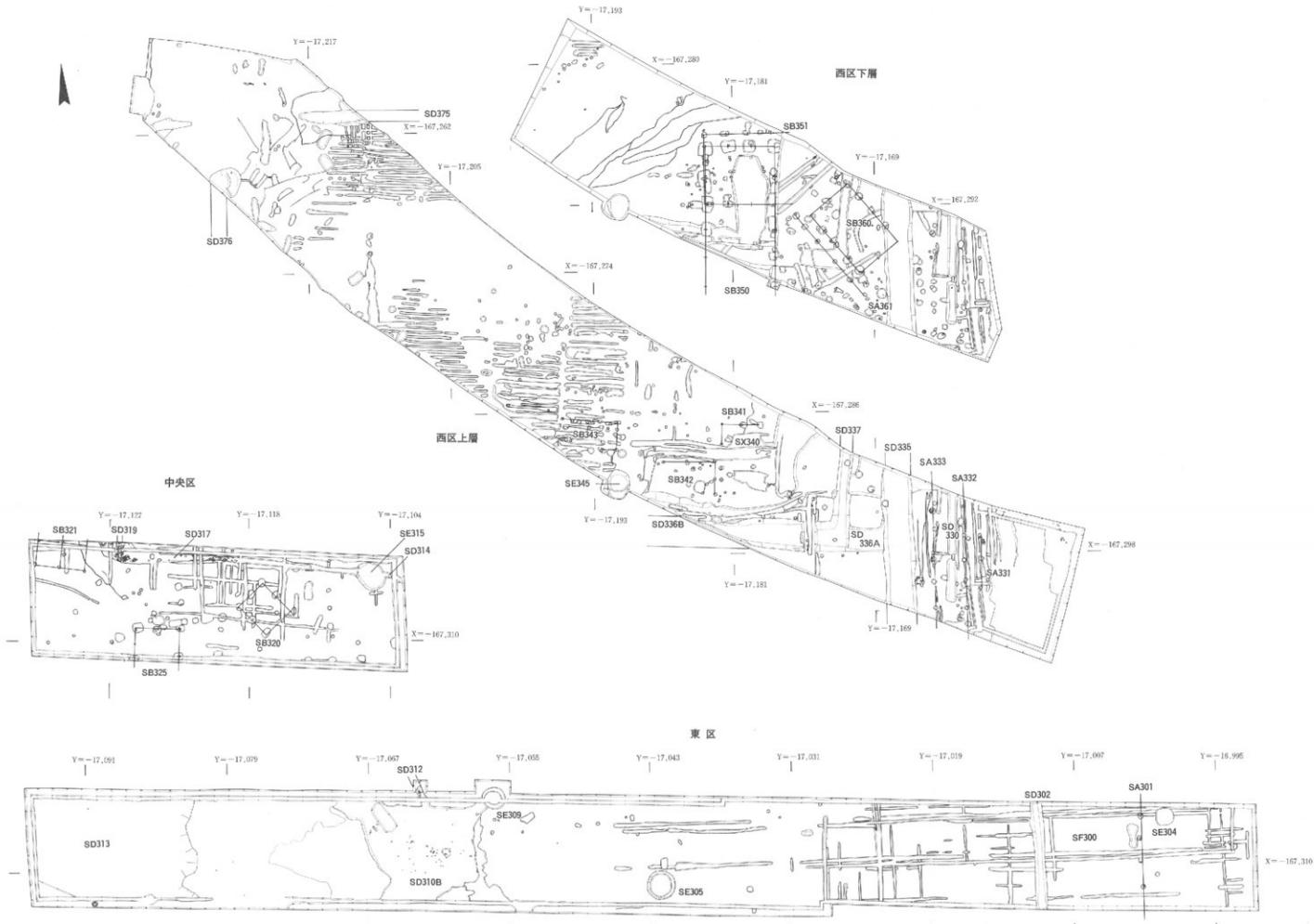


Fig. 36 第75次調査構造図 (1 : 300)

西区では四周に濠がめぐる12世紀末～13世紀の居館跡を検出した。居館は藤原宮期の造成面を再度小規模に整地して設営しており、関連する遺構として、濠の外側に溝1条、柵列3条、内側に井戸1基、掘立柱建物3棟以上、土器窯などがある。なお、中世の整地土からは、中世土器以外に8世紀後半代の土器（須恵器杯蓋、土師器甕・高杯・杯Bなど）もまとまって出土している。

四周の濠はすべて白色粘土層を含む同じ上で埋め戻しており、一連の濠であることは明白である。東濠S D 335（幅2.5～3.0m、深さ0.9m）は、当初、調査区の南北に延びていた（S D 335 A）が、後に南半部を埋め戻し、新たに掘削した南濠S D 336 Aと接続する（S D 335 B）。南濠S D 336 Aは幅2.0m、深さ0.3mとS D 335 Bより一段浅く、後にS D 335 Bの西側に掘削した新たな東濠S D 337（幅1.2m、深さ0.3m）と接続させた時に、幅2.6m、深さ0.6mと若干拡張している（S D 336 B）。これに対し、西濠S D 376（幅2.3m、深さ1.3m）と北濠S D 375（幅1.0m、深さ0.3m）の位置は調査区内では変更がない。東濠と南濠のみを掘り直したと仮定すれば、当初、東西57.5m（濠心々）、南北42.5m以上の区画を形成していた周濠のうち、まず南濠の位置を北にずらし、次に東濠を西に約5mずらして、最終的には東西52.5m、南北36.4mの区画に規模を縮小したことになる。各濠内から12世紀末～13世紀中葉（川越編年III-A～C）瓦器碗をはじめとする中世土器片が出土したが、S D 335 A下層が川越編年III-Aを主体とするほかは、その間に顕著な時期差は認めがたい。なお、最終的な周濠区画は、畑の段差や農道などの現在の地物によく対応する。

東濠S D 335の外側には、東3mを隔てて南北溝S D 330（幅0.9m、深さ0.7m）がある。埋土が濠と同じで、13世紀中葉（川越編年III-Bの末期形態）の瓦器碗・皿、土師器皿が多数出土しており、居館跡にともなうことは明らかである。S D 330は調査区北端から約5mでいったん途切れ、さらに4m延びて終わる。途切れる位置は南濠S D 336の南肩の東延長とほぼ一致する。したがって、最終的な周濠区画に対応する時期の溝と判断する。S D 330の両側に柵列S A 331・332・333がある。S A 332・333は6間以上でさらに南北に延びており、東濠S D 335 A、すなわち、当初の周濠区画に対応すると思われる。

周濠内の井戸S E 345は区画内のやや東寄り、南濠S D 336に接して掘削されており、直径1.85m、深さ1.6m。少量の土器片が出土したのみで、井戸枠などは残っていないかった。区画内の中央部は後世の削平が著しく、居館の中柵施設はまったく不明。南東部で小さなピットを多数検出したが、建物にまとまるものは少なく、わずかに東西棟3棟分の一部が指摘できるにすぎない（S B 341・342・343）。S B 341付近の南東斜面には13世紀前葉（川越編年III-B）の瓦器碗・皿・土釜などが大量に廃棄されていた（S X 340）。

遺 物

遺構にともなう土器類に関しては上記のとおり。顕著な遺物としてS E 305から出土した木

製匙がある (Fig.37)。全長41.9cm、身幅7.9cm、身高4.3cmで、柄の基端にバルメットを彫刻する。屈曲したバルメットの端を容器の口縁にひっかけて、容器内に落ち込まないように工夫している。柄の基端に同じ機能の装飾をほどこした削物の匙や杓子は弥生時代に多いが、7世紀後半の例はめずらしい。

まとめ

宮に近接するにもかかわらず、左京七条二坊西南坪では、中央部の溜まり状によどんだ流路とそれにとりつく溝、東部の井戸2基、西部の掘立柱建物1棟のほかに藤原宮期の顯著な遺構は存在しない。坪の中央部は古くからの流路のために低湿地状を呈し、居住に適さなかった可能性もあるが、東部に井戸以外の遺構がないことは隣接する七条二坊東南坪や七条三坊など第74次調査区の様相と大きく異なる。また、第74次調査区では瓦片がほとんど出土していないのに、西南坪では井戸の埋上から完形平瓦が出土したのをはじめ、瓦片が比較的多数出土しているのがめだつ。調査地の南、左京八条二坊は紀寺の寺域にある。あるいは、紀寺付属の苑院などが一部北に延びていた可能性も考慮できるだろう。

左京七条一坊東南坪では、藤原宮期に飛鳥川右岸に点在する残丘のひとつを切り崩して整地し、造成地に大規模な掘立柱建物を建てている。検出した梁行3間、桁行5間以上の南北棟S B 350を東南坪の脇殿と解するならば、正殿は調査地の北、現在の春日神社南の高まり付近

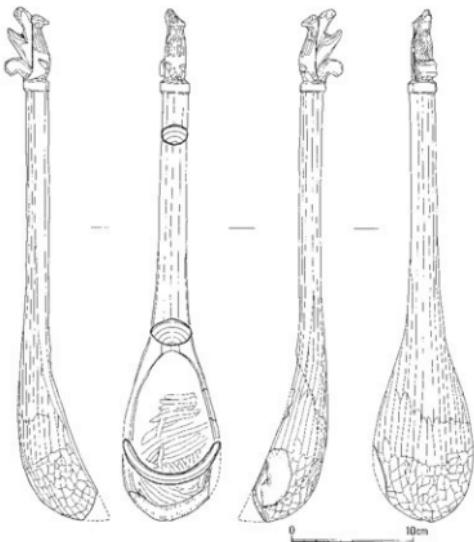


Fig.37 S E305出土製匙 (1 : 4)

に想定できるかもしれない。東南坪の造成地は、中世に居館として再利用される。その整地上には8世紀後半の土器類が比較的まとまって出土しており、中世居館に先立って奈良時代にもこの造成地を再利用した可能性もある。中世居館の本体は削平されて残っていないが、方形にめぐる周濠からかなり大規模な施設が想定できる。

3 左京八条四坊（日向寺）の調査（第75-4次）

(1994年6月)

本調査は住宅建て替えに伴う事前調査として、樞原市南浦町で行ったものである。調査地は天香久山の南裾部で、左京八条四坊西南坪にあたる。東西6.5m、南北2.5mの調査区を設定した。層序は上から順に、現代盛土、灰色粘土、灰色粘土混黄褐色砂質土（整地土）、黄色砂質土（整地土）、黄褐色砂質土（整地土）である。黄色砂質土上面で遺構検出を行ったが、藤原京あるいは日向寺に関連する遺構はなかった。地表下1.2mで湧水が激しくなり、それ以上の掘り下げはできなかった。各整地土からは土器や瓦が出土しており、奈良時代や平安時代にかなり大規模な整地を行っていることは確かである。周辺地域の調査の進展が期待される。

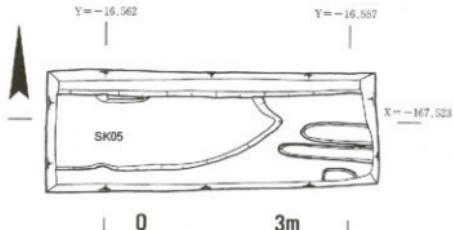


Fig. 38 第75-4次調査遺構図 (1 : 100)



Fig. 39 第75-4次調査位置図 (1 : 2000)

4 左京十二条三坊（雷丘北方遺跡第4次）の調査（第71-13次）

（1994年1月～4月）

本調査は、高市郡明日香村雷の北に計画された県道飛鳥権原神宮前停車場線新設工事に伴う事前調査で、1991年に発見された雷丘北方遺跡の第4次目の調査である。従前の調査によって、雷丘北方遺跡は飛鳥川右岸で雷丘から小山に至る小丘陵との間の平坦地上に位置し、中心部に東西5間、南北4間の四面庇付東西棟建物（正殿）とその東西の2棟づつの細長い南北棟建物（脇殿）からなる建物群を配し、それらの東、西、南を掘立柱塀と溝とで区画する構造とされている。第3次調査では南の掘立柱塀の中央には大規模な門状施設が無いことを明らかにしたが、あわせて東西脇殿の南妻柱列に柱筋を揃えた位置に同規模の東西棟建物（南殿）が存在することを確認し、中心部は正殿を開む長大な掘立柱建物による長方形区画となることが判明した。遺跡は7世紀後半から8世紀後半まで存続するが、建物群が形成されたA期と、正殿を建て替え、南殿を廃棄し周囲を礫敷に替えたB期とに大別され、さらにA期は溝S D 2730の造替などを根拠に1～3の小期に細分される。正殿が藤原京左京十二条三坊西南・西北坪の南北中軸線上にあり、東西脇殿は西北坪に入っていることから、遺跡は2町分を占めていたと考えられ、建物配置と占地の規模などから皇族を含む上級貴族の邸宅・宮殿あるいは京内に置かれた官衙である可能性が高いと想定されている。

今回の調査は、遺跡の東への広がりを把握することと、第3次調査で確認された東西棟建物の全容を明らかにすることを目的とした。調査は前者について東限の掘立柱塀S A 2845以東に延びる東西溝S D 2730の東延長部および東限の南北溝の検出をめざして、南北10m、東西7～8mの調査区（1区）を設定して実施した。後者については当初、南殿想定地全域の調査を計画したが、諸般の事情で調査期間が限定され東西17間の建物全ての検出が難しい情勢となって、やむなく東9間分について南北12m、東西22mの調査区（2区）と西4間分について南北10m、東西10mの調査区（3区）を設定して実施したものである。以下、東の1区と南殿に関わる2・3区とにわけてその概要を報告する。

遺構

1区 調査地の層序は、上から耕土、床上、茶灰色砂質土で、北半にはその下に黄色粘土と炭化物を含む灰褐色粘土が厚く堆積し、地山の青灰色細砂・青灰色微砂に至る。南半では茶灰色砂質土の下は灰褐色粘土・細粒混じりの灰色細砂で、その下は青灰色細砂以下の自然堆積層となっている。後述するように北半の炭化物を含む灰褐色粘土層は下層溝を埋め立てた整地土である。

検出した遺構には東西溝S D 2730のほかに下層溝、土坑、井戸、石敷などがあるが、東限の南北溝は検出されなかった。整地土下で検出される前4者がA期に属し、茶灰色砂質土の下で検出される石敷等はB期に属する。

東西溝 S D 2730は幅約2.5m、深さ0.4mで埋土は暗灰色粘土混り灰色砂土である。溝は東限の南北塚 S A 2845以西では幅狭くなつて南殿 S B 2850の南の溝につながり、そこでは石組溝への代替が確認されるが、今回の1区では北に寄せて掘り直した素掘溝 S D 2730Bが確認されるだけである。溝底の南北端には掘り直し以前の杭を4本確認しており、しがらみで護岸した素掘溝と思われる。埋土からは少量の7世紀後半代の土器と砥石が出土した。溝は長さ6m分を検出したが、調査区の東外方へお伸びており、東限の南北溝は検出されなかつた。したがつて遺跡は東区画塚 S A 2845の東10.5m以上まで広がつてゐることになる。

下層溝 S D 3240は石敷 S X 3256などの下で検出した。溝全体は東で北へ傾く方位をもち、南から約4mが深さ0.5mと深いが、以北は深さ0.3mで調査区北外方に広がつてゐる。溝底には流水の形跡が無く、北下がりの層をなす暗灰粘土・黄色粘土・灰褐粘土の間に炭化物層が薄く堆積することから、全体が埋め立て整地土層である可能性がある。ただその場合でも、後述の土坑はその堆積層の中程から掘り込まれており、一度に埋め立てたものではない。炭化物層など下層から7世紀末の土器と墨痕のある削り屑、凸面布目平瓦片などが少量出土し、上層には長さ2.5cmの円棒に小孔をあけた土錐状の土製品が、最上層には「鳩女」の墨書をもつ奈良時代の須恵器蓋がある。

土坑 S K 3245は下層溝 S D 3240の堆積層中程から掘り込まれた直径0.5m、深さ0.3mの小規模な土坑で、表に「恵思和上三」、裏に「祥□□」と書いた荷札木簡と少量の土器が出土した。

井戸 S E 3250は石敷 S X 3255直下の整地土下面から掘り込む。直径1.6~1.8m、深さ0.7mの規模で、埋土の暗灰褐色砂土は中凹みに堆積し棒板などは検出されなかつた。埋土からは7世紀末の土器や銅片が出土し、土師器甕片には「寺(?)」の墨書がある。北岸は大官大寺式軒平瓦などを含む瓦礫群 S X 3247で覆われ、南岸は先の土坑 S K 3245の一部を壊している。

石敷 S X 3255は幅0.6mで東西方向に細長く延びる。第3次調査東区の石敷 S X 2851の東延長部にあたり、調査区中央までの長さ2.5m分を検出しただけで東半では検出されなかつた。

石敷区画 S X 3256は東と西と南の辺が直線をなし、北は石敷 S X 3255の南に連なつて、東西幅1.2m、南北幅1.5mの長方形区画を形成する。この規模は第3次調査区の石敷区画 S X 2849の内部と類似しており、用材の一部と直上に縄目叩きの平瓦が、直下の整地土に飛鳥V期の土器が含まれる点でも S X 2849と同様で一連の施設と思われるが、石敷 S X 3255とともに用途は明らかでない。



Fig.40 第71-13次調査1区遺構図 (1:200)

2・3区 基本層序は1区と変わらないが、灰褐色土の下には全域に奈良時代後半までの土器を含むB期の礫敷が広がる。その下は、2区では南半部に黄色粘土、暗茶色粘土、灰褐色砂の整地土があり、暗青灰色細砂の地山に至る。暗青灰色砂は自然河川状の堆積層で古墳時代前半の土器を含む。3区では黄色粘土の整地は顕著でなく、茶褐色粘質土が地山の上にのっている。

検出した主な遺構は既出の建物SB2850と東西溝SD2730であり、新たに検出した遺構はそれに関わる石敷SX3261、暗渠SX3275などのほか、2区の北側の浅く不整形な土坑数基と柱穴を壊す方形土坑等があるに過ぎない。

SB2850は、第3次調査で東妻柱列と中央部南側の6間分の柱穴を確認し、第2次調査で検出していた柱根3本を北側柱列の一部とみて東西17間、南北2間の身舎に南庇のつく建物を想定した。今回は建物東半の2区で、第3次調査区で検出した柱穴に加えて新たに、北側柱9本、南側柱・南庇柱各4本を検出し、西半の3区では南側柱、南庇柱各3本のほか、西妻柱列を想定通りB期の南北石組溝の下で検出した。これによって建物は第3次調査の想定通り、桁行17間（約40m）、梁行2間（4.7m）であり、後に2.35mの出をもつ南庇がつくことが確定した。なお、第2次調査の3本の柱根については、柱間が不揃いで、柱筋も異なっていたためにA期の建物とみなさなかったが、再検出の結果、それは柱が著しく傾いていることによるもので、柱の基底部では柱筋、柱間ともに揃っていることが判明した。

身舎の柱掘形は平面1.2×1.4mの長方形を呈し、柱筋方向に長い傾向がある。深さ1.2mで直径25cmの柱根が遺存するものがある。なお、身舎東南隅の柱穴に残る柱は直径15cmと細く、深さも40cmしかない。これはこの柱位置が北に寄っていることと、これとは別に柱痕跡が認められることから、床束等の別の用途の柱と考えられる。庇の柱掘形は一辺1.0m、深さ0.7mで、柱は直径15cm程と細い。柱掘形は黄色粘土の整地土上面から掘り込まれるが、この黄色粘土は東西石組溝SD2730Bの裏込めとなっており、庇がA-2期になってつけ加えられたことは確実である。

また、第3次調査ではこの建物はB期には取り壊されて礫敷となることが確認されており、礫敷を除去した検出面には建物の旧床面の状況が残されている可能性が高いと期待された。精査の結果、柱根や柱痕跡を貫くよう幅30cm弱の浅い灰色粘質土の帶SX3263が確認され、南側柱列の東端間では同じ幅に川原石を並べた石敷SX3261とその抜き取り痕跡SX3262が検出された。これらはちょうど柱筋を貫いて存在することから、柱間をつな

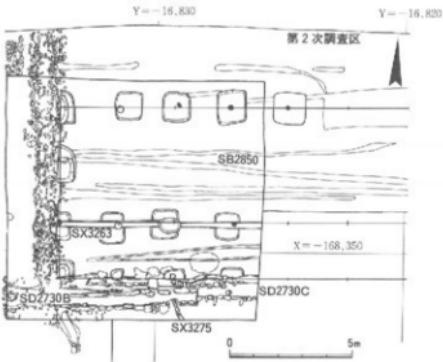


Fig. 41 第71-13次調査3区遺構図 (1 : 200)

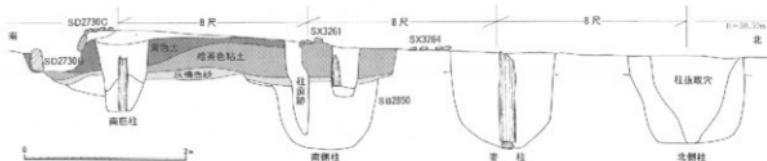


Fig. 42 S B 2850・S D 2730・整地土の土層模式図 (1 : 60)

ぐ壁をうける地覆とその痕跡と考えられ、建物内部は石敷あるいは土間であった可能性が高い。

なお、調査の過程で北側柱列については明瞭に柱掘形が検出されたが、南側柱と庇柱については極めて困難であり、既に露出している柱根や明瞭な柱抜取穴にひかれて、埋土の乱れた部分を最大限評価して柱掘形とした。しかし、柱穴を断ち割って精查した結果、南側柱列の掘形については検出面下約50cmの黄色粘土、暗茶色粘土、灰褐色砂の下から掘り込んでおり、本来整地上上面では検出されるはずのないことが判明した (Fig.42)。この検出面の違いは、建物建設時に南半については一段低い状況であったのか、あるいは、建設後にその高さまでの土を除去したかのどちらかであり、建てた柱をそのままに先の3層の整地土を施したこと示している。いずれであるかを明確に示す手がかりはないが、整地土の最下層灰褐色砂は建物の東半部に限定的にみられるにも関わらず、水平で均一な厚さをもち、土質も洪水に際しての堆積砂をおもわせること、さらに検出面の高さが整地土のみられる範囲すなわち建物の棟通りの北約1mより南については、緩やかな傾斜で約15cm高くなっている、その起伏は建物廃絶後の疊敷段階にも引き継がれていることに注目すると、建築後のある時期に南半が洪水等で流失し、それを補いさらに再度の流失を防ぐために、南半を土手状に高く盛り上げた結果であると推定するのが妥当であろう。その場合、流失はA-2期以前のこととなる。

S D 2730にはA、B、Cの造替がある。造営当初のAは幅約1mの素掘溝であるが、大半を

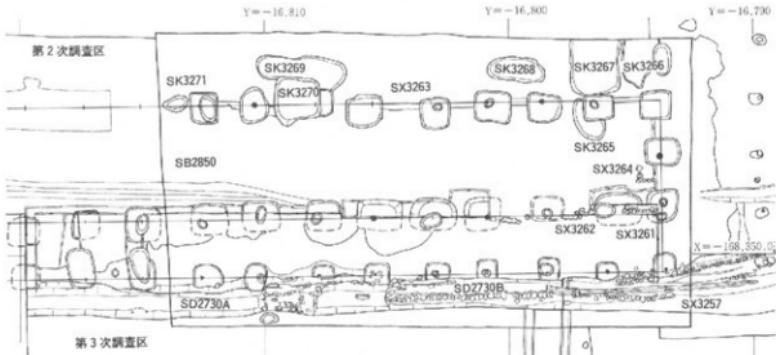


Fig. 43 第71-13次調査2区造構図 (1 : 200)

Bに壊されていて独白の堆積層は極めて薄い。第3次調査の所見では東脇殿S B 2830までは南妻柱の南1mに北岸をもつ幅3mの溝であるが、東脇殿の西南隅から北岸が南に寄るように幅を減じ、S B 2850の前面では南側柱から約2.5m離れて北岸があるとされる。前述のようにA-1期の建物S B 2850には庇が付かないから、建物前面に空闊地ができることになるがその理由はわからない。

S D 2730Bは素掘りのAを東脇殿の西南隅からS B 2850の前面について黄色粘土で埋め立て、それを裏込めとして南北側石を並べて石組溝とした段階で、幅0.4m、深さ0.3~0.4mで底石はない。側石は東半では0.5m大の川原石を2~3段に積み上げるが、西半では比較的大型の石1石を立て並べる傾向があり、一部平面方形の石が南北両岸に向かい合った箇所がある。建物S B 2850の南庇の柱掘形との重複関係からは、南庇と共に存する。S D 2730Bの南岸には建物西端から2間日の柱の前に暗渠S X 3275が敷設される。暗渠は行基式の丸瓦を重ねた構造で、東南から西北に向かい溝Bに流れ込む。溝Bの埋上からは円面鏡のほか須恵器平瓶、鉢、十師器杯、鉢や墨痕のある木片などが出土し、須恵器鉢には全面に黒漆が塗布されている。

S D 2730Cは石組溝Bを埋め、小型石1石だけを並べた小規模な雨落溝とした段階で、溝は幅0.3m、深さ0.2mで、北岸には建物寄りのやや高い位置にいま一列の石列が設けられた形跡がある。それらの石列が庇柱筋に一致していることから、この時期はまだなお建物が存続していると考えられる。西半部では、石組溝Bが西に向かって下降していたのにあわせて、西に厚く盛り土を行ってから石を並べて、溝S D 2730Cはほとんど傾斜をもたない。

建物S B 2850の東南部にある角材を埋めた溝状土坑S X 3257は礫敷きの下で検出され、石組溝Bの南側石を壊している。この関係からは角材の埋置がA-3期かB期かは判然としない。しかし、角材は溝幅0.3mで復原される溝Cの南側石に重なる位置にあるから溝Cとの併存はあり得ず、角材はB期の造成とともに埋められたことになる。角材は長さ7.5mで一端の長さ2.2m分が円形に加工され、残された釘穴の間隔が4.7mであることから、柱間8尺の建物の桁材であり、上に被せた幅25cm、厚さ5cmの板材とともに、B期には取り壊されている建物S B 2850の用材とみられる。

2区の北に散在する土坑S K 3266~3269は不整形で浅く、埋土の暗灰色粘土には7世紀後半代の土器片と腐朽した木片が含まれている。いずれも建物S B 2850の北側でおさまることから建物造成時の整地の一部と考えられる。また柱穴を壊す方形土坑S K 3270は一辺1.7m、深さ0.7mの規模で、中に大量の礫が詰められている。機能や時期は明らかでない。

まとめ

南殿と遺構の変遷 今回の調査の結果、遺跡の中心区画の南殿S B 2850は、第3次調査の想定通りの規模でA期に存在し、1~3小期の変遷をへてB期には廃絶することが確認された。A-1期の掘立柱建物S B 2850は東西17間、南北2間の東西棟建物で、南庇はなく、柱間は桁行梁

行とも 8 尺等間であり、南側柱列が東西脇殿の南妻柱と揃い、東西妻柱は東西脇殿の側柱からそれぞれ約 6.3m 離れた中央に位置している。その後の変遷をたどると、A-2 期の直前には洪水等にみまわれ、それを契機として、南半に整地がなされ、素掘溝 S D 2730 A を石組溝 S D 2730 B とし、建物に南庇をつけ加え、石組溝 S D 2730 B を小さな石組溝 S D 2730 C に作り替えるが、この建物に関しては改造は認められない。さらに B 期にいたって、他の建物は存続するのに対して、この建物は廃絶され広く全城が礫敷きとなる。

また、側柱列で検出した壁地覆の痕跡から、A-2 期以後の建物内部および B 期の礫敷面には、建物棟通りに平行して南が高い起伏が存在することが判明した。起伏のある床面は通常の建物利用にとっては不都合であろうが、黄色整地土の状況から推定した通り、ある時期に建物の南半が洪水等で流失し、それを補いさらに再度の流失を防ぐために、南半を土手状に高く盛り上げたとすれば、形成された理由は理解される。

建物の造営と改修の年代については、石組溝 B の埋土に飛鳥 IV ~ V の上器があり、A-2 期の廃絶が飛鳥 V = 藤原宮期の 1 時点のことと知れ、礫敷中に奈良時代後半の上器が含まれることから、B 期はその時期まで存続したことが確認される。したがって、A-1 期は 7 世紀後半代に始まり、B 期の改修がなされるのは奈良時代に入ってからと推定されよう。

なお、遺跡の性格については建物配置から上級貴族の邸宅、宮殿あるいは京内官衙と推測され、今回の調査を含めた出土土器に大型の供膳具が目立ち、黒漆塗の須恵器鉢があつて上級の貴族階層の什器とみられることと矛盾しない。しかし、伴出する文字資料は今回の荷札木簡の人名「恵思和上」をはじめとして仏教的色彩が濃く、土器類も寺院での什器とみることも可能である。であれば出土遺物の内容は直接に遺跡の性格を示さないことになる。丘類についてもこの遺跡の建物に葺かれたものではなく、何度かの改造に際して近在から持ち込まれたものと推測されており、今回の調査で出土した遺物の多くが 1 区の下層溝や 2・3 区の石組溝 S D 2730 B などの埋め立て整地に伴うことを重視すれば、上器にも瓦や木簡と同様に近在の遺跡から持ち込まれたものが含まれている可能性があり、なお慎重な検討が必要であるとおもわれる。

東外郭塀以東の状況 調査区内では、東限塀 S A 2845 に平行した南北溝は確認されず、長方形区画に南接する東西大溝 S D 2730 はなお東に延びていて、遺跡の東限の様相は来年度以降の調査に待たねばならない。また、東西溝と同時にそれ以後に形成された下層溝とその埋め立て整地上は、第 3 次調査区では整地土の違いとして認識されており、今回の調査区の北、東へものびている。出土遺物からは 7 世紀後半から末の時期に限定され、A 期のこの地域は沼のような凹みであったと考えられる。下層溝の広がりと性格を含めて詳細の解明は来年度の調査に委ねたい。

5 左京十二条三坊（雷丘東方遺跡）の調査（第75-3次）

（1994年6月～7月）

本調査は、県道樅原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事にともない、明日香村雷において実施したものである。県道の拡幅部分の雷交差点以北については、1993年度に第71-9・10・14次調査を実施しており、7世紀前半から平安時代初めにかけての遺構を検出し、そのうち、奈良時代中頃から平安時代初めにかけての遺構は、小治田宮に関係するものと推定されるに至った（『概報24』）。その結果、建物の規模や配置を最終的に確認するために、現在の道路部分も調査する必要が生じた。そこで、拡幅部分の工事の終了を待って、前回調査できなかった旧道路部分と、「雷池」の東に新設される広場予定地の調査を実施することとなった。しかし、旧道路の西にある倉庫等への車両進入路を確保する必要上、調査区の設定にはいくつかの制約があり、結局、南区・中区・北区にわけて調査することとなった。調査面積は約500m²である。

南区 現道路下には、NTTの電話線、都市ガス管及び県営水道の水道管がほぼ並行して埋設されており、遺構面はこれらの掘形によって寸断されている。また、戦前にこの道路が建設された時の削平も著しい。南区の南半は、路床の直下、及び畠の床土直下が花崗岩の風化した岩盤となるが、北半では岩盤が急激に落ち込み、斜面を整地した黄褐色砂質土と粘質土からなる

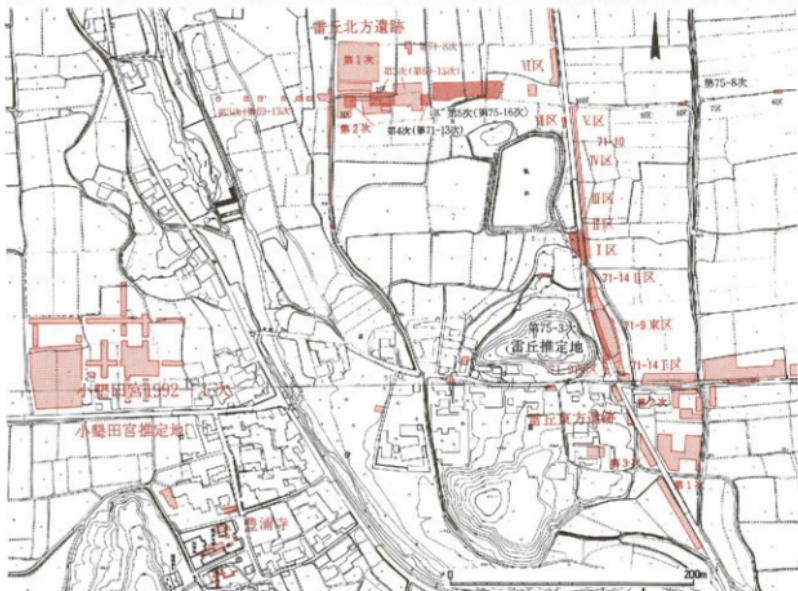


Fig.44 第75-3次調査位置図 (1:4000)

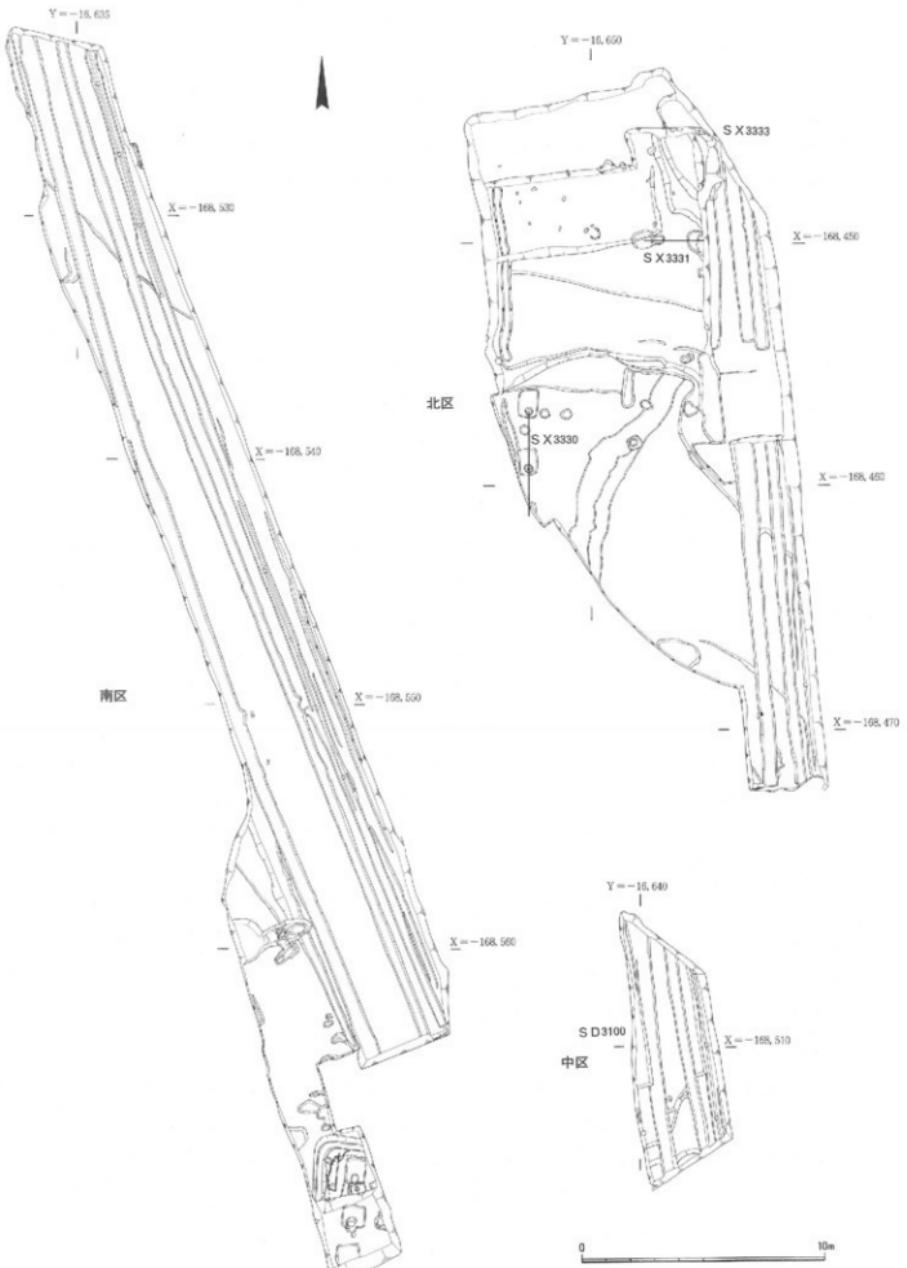


Fig. 45 第75-3次調査構造図 (1 : 200)

整地土層上面で遺構を検出した。

検出した遺構には、礎石建物 S B 3030などがある。調査区の東壁断面で、前回調査で検出した礎石建物 S B 3030の南西隅の礎石抜取り穴 1カ所を検出した。礎石の掘え付け掘形の大きさは、南北1.4m、深さ0.3mあり、礎石抜取り穴には瓦片を含む。これで S B 3030の規模は 3 × 3 間の縦柱建物であることが確定した。南区の北方では、地山の花崗岩岩盤が急激に落ち込み、黄褐色砂質土と粘質土からなる整地土が厚く堆積するがほとんど遺物を含まない。なお、これ以外に、調査区の南西部で戦前に操業していた炭焼き窯 1基を検出した。

中区 中区では、電話線・ガス管・水道管による破壊をのがれた範囲ではほぼ全面にわたって遺物包含層を検出した。この包含層を掘り下げるに南西から北東方向にひろがる溝状土坑となり、前回、71-14次調査区で検出した下層大溝 S D 3100の西延長部分にあたることを確認した。幅約 6 m、深さ約 0.8 m あり、土層の堆積状況や遺物の出土状態は前回と同様であり、7世紀初めから前半の上師器・須恵器が出土した。

北区 道路部分と、その西の広場予定地を調査した。広場予定地は、かつて雷丘の北麓に沿ってめぐる 3段ほどの棚田として利用されていたが、その後、土砂・廃棄物の仮置き場として長い間使用されていた。旧道路下では、ここも電話線などによってほとんど破壊され、雷丘の北麓の旧地形を一部で確認したにとどまる。また、前回の71-10次調査で検出した土堤状のたかまり S X 3130や、その南側にある大溝 S D 3131の西延長部には、電話線の大型マンホールが設けられて徹底的に破壊されており、その延長部分はもちろん、その有無すら検討できなかった。調査区内で検出した遺構は希薄であるが、掘立柱建物の一部をなすと考えられる柱掘形 3箇からなる S X 3330と、掘立柱東西塀の一部と思われる柱掘形 2箇からなる S X 3331、丘陵の北東部を限るとみられる大溝 S X 3333の西岸を検出した。遺構は、この辺りの地山を形成する砂礫まじりの黄褐色粘質土上面で検出した。

S X 3330の柱掘形の大きさは、南北1.2m、東西0.8m、深さ0.3mであり、直径0.2m程の柱痕跡が残る。柱間寸法は、2.3mほどであるが、柱掘形はかなり削平されている。柱掘形から 7世紀後半（飛鳥IV段階）の土器が出土した。

S X 3331の柱掘形の大きさは 1 m 前後、深さは 1.1 m ほどある。柱掘形から 7世紀後半（飛鳥IV段階）の土器が出土した。

S X 3333は、その西岸の一部を検出しただけであるが、地山をなす青灰色の砂礫層を深さ 2 m 近く掘り下げた大規模な遺構である。埋土中に黄色粘土の塊が大量に含まれていることから、埋め戻されたものと推定される。7世紀前半から後半（飛鳥 I ~ IV段階）の上器と瓦片が少量出土した。規模や性格は不明であるが、雷丘の北に舌状に張り出した台地北端に沿って掘られた大規模な溝になる可能性が高い。

6 左京その他の調査

A 左京五条三坊の調査（第75-10次）

(1994年10月)

本調査は個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は推定左京五条三坊の東南坪と東北坪にまたがり、五条々間路の検出を主目的とし、南北15m、東西3mの調査区を設定した。しかし、五条々間路は検出できず、検出した遺構は藤原宮期に先行する斜行溝1条、藤原宮期の柱穴2個および溝状の落込み、中世の小穴群である。基本層序は地表面から耕作上、床土、黄灰色粘土で、遺構はすべて黄灰色粘土の地山面で検出した。

藤原宮期以前の遺構 SD8260は調査区内でくの字に折れ曲がる斜行溝である。溝は南から北へ流れ、溝底のレベル差は調査区の南北で25cmである。溝内の遺物は少なく布留II式の土器が出土しており、4世紀末期の溝と推定する。

藤原宮期の遺構 SB8250は南北3.6mを隔ててある2個の柱穴である。柱掘形は約1mの方形で、現存する深さは40cmである。発掘当初は、2個の柱穴の南北延長線上には柱穴が無いことから、身舎梁行企長が3.6mの東西棟と考え、北側の柱穴の西延長を拡張し柱穴の存在を求めた。しかし、柱穴の存在は確認出来なかった。現状では梁行1間(3.6m)、桁行不明の建物と考えておく。

発掘区西南にあるSX8245は、溝状の落込みである。北端は溝状に途切れているが、未発掘区でどのような広がりをもつかは不明である。発掘区内で確認できる落込みの底は遺構面から約25cm下がり、底面には扁平な拳大の石が散見される。何等かの用途として人為的に置かれた可能性もある。埋上からは飛鳥V期の土師器・須恵器が出土しており、この施設は藤原宮期の施設である。また、埋土内からはスサ人の壁土が出土した。

なお、五条々間路は予定位で確認できなかったが、SB8250の残存状況からして、例え調査区内に五条々間路があったとしても、後世に削平された可能性が高い。

中世の遺構 瓦器を伴出す小穴を17個検出したが、どのような建物にまとまるかは不明である。

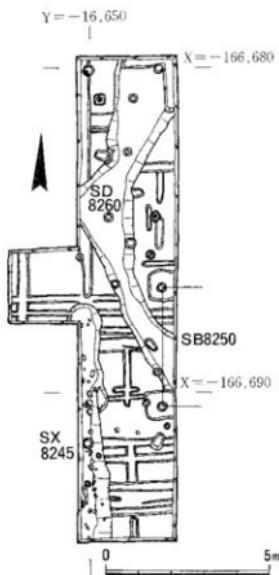


Fig.46 第75-10次調査遺構図 (1 : 150)

B 左京十一条四・五坊の調査（第75-8次調査）

(1994年8月)

本調査は、下水道工事に伴う事前調査として明日香村奥山で行ったものである。調査地は奥山の集落西端から、県道橿原神宮東口停車場飛鳥線に至る東西道路上で、藤原京左京十一条四・五坊にあたる。調査は、竖坑の範囲を対象とし、東側から1区～10区とした。このうち1・3・5・7・9・10区で東西2m、南北2m、2・4・6・8区で、東西6m、南北2.4mの発掘区を設定した。2区が中ツ道（東四坊大路）、9区が東三坊大路の想定位置にあたる。1区については、湧水が激しく発掘区の西側に隣接する小河川への影響を考え若干掘削のち調査を断念した。なお遺構図は、条坊に関わる2・9区のみ示している。

2区では、現路面下1.1mにある灰色砂層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、古墳時代前期の土坑SK3336、7世紀代の南北小溝SD3337（幅30cm深さ20cmほど）、時期不明の土坑群SX3335である。中ツ道に関わる遺構は確認できなかった。

4区では、現路面下1mにある明茶褐色土層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、弥生時代中期の土坑1基、古墳時代中期の土坑1基、平安時代前期の土坑2基である。

6区では、現路面下1.3mより、発掘区の全面で旧河川の堆積土上ある黄灰色粘質土、灰色極粗砂等が認められた。この堆積土は、現路面下1.8mまで続いており、川底は確認できなかった。旧河川に含まれる遺物は、古墳時代から藤原宮期までの須恵器、土師器である。

9区では、現路面下1mにある黄褐色粘土層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、7世紀代の南北斜行溝SD3344（深さ30cm幅30cmほど）、時期不明の南北小溝1条である。東三坊大路に関わる遺構は確認できなかった。

3・5・7・8・10区については、それぞれ現路面下1m前後で遺構検出を行ったが、時期不明の小溝や土坑を検出したのみである。



Fig.47 第75-8次調査位置図(1:3000)

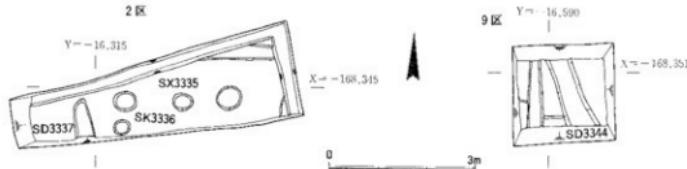


Fig.48 第75-8次調査2区遺構図(1:100)

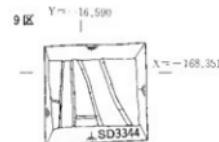


Fig.49 第75-8次調査9区遺構図(1:100)

7 右京七条二坊の調査（第75—11次）

(1994年10月～11月)

本調査は、樅原市四分町256-3・12・13において、県道の建設に伴う事前調査として実施した。調査面積は約528m²である。

当該地は弥生時代の四分遺跡の南端附近にあたり、7世紀後半の藤原京期には藤原京の六条大路と西二坊大路の路面敷、および右京七条二坊西北坪の一部にあたる。さらに周辺の調査では、中世（12～13世紀）の遺構も見つかっており、これに関連する遺構も期待できるところである。

遺構

調査区の層位は、表土直下に飛鳥川堤防の盛土が厚く堆積し、以下、中世以降の堆積層、中世と藤原京期の遺構がある暗褐色粘土層、さらに弥生後期の包含層である暗茶褐色粘土層（厚さ50～60cm）、基層の茶褐色粘土なし緑色砂岩層に移行する。

遺構は暗褐色粘土層、および暗茶褐色粘土層の上下2層にわたり検出した。上層遺構には掘立柱建物3棟、掘立柱塀3条、井戸1基、溝1条、上坑があり、下層遺構には土坑10基、中世以降の耕作に関わる東西および南北溝が多数ある。

以下、主要な遺構について述べる。

S B 8290は、桁行4間以上の東西棟建物である。梁行規模は不詳である。桁行の柱間寸法は東の端間が1.7m、他は2.4m（8尺）である。

S B 8291は、S B 8290に重複する南北棟建物である。北の妻側柱のみを検出。柱間寸法は1.3mと1.6mである。

S B 8292は、S B 8290・8291に重複する建物である。東北隅柱のみを検出した。桁行、梁行ともに規模は不詳である。

S B 8296は調査区の北端で検出した中世の建物である。桁行・梁行ともに1間分を検出した。柱穴の掘形は直径・深さとともに20cm程度と小さく浅い。柱間寸法は1.7mである。

S A 8293は、掘立柱東西塀で3間分を検出した。柱間寸法は2m前後である。この塀の北は六条大路南側溝の推定位置にあたり、右京七条二坊西北坪を区画する施設の可能性がある。

S E 8297は、中世の井戸である。掘形の直径は2.5m、検出面からの深さは2.0mである。抜き取りが、井戸底にまでおよぶ。一部に玉石が残っており、もとは石組の井戸だった可能性がある。井戸の抜き取りからは、曲物や槌杖^{ハシタケ}の跡の可能性がある木球、12世紀代の瓦器碗などが出士した。

S D 8298は、発掘区の東端で検出した南北溝である。一部を確認したのにとどまり、溝の規模は不明である。溝内の堆積層から瓦器碗が出土した。隣接調査地で検出している中世の溝と

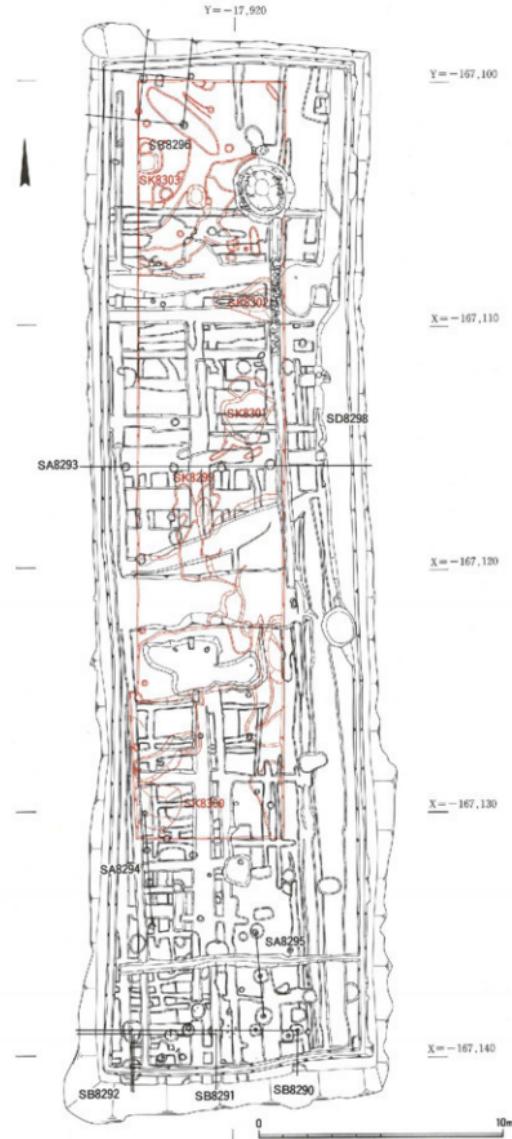


Fig.50 第75-11次調査造構図 (1 : 200)

一連であろう。

S K 8300は、下層で検出した弥生時代後期の土坑である。直径約2mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.5mである。

S K 8299は、下層で検出した弥生後期の土坑である。最大辺長約2mの不整形土坑で、検出面からの深さは0.3mである。

遺物

遺物の大半を占めるのは、下層の土坑から出土した弥生後期の土器である。これは破片のみで、完形になるものはない。上層遺構に伴う遺物には、中世の井戸抜き取り穴からの出土品がある。これには、瓦器楕、瓦器小皿、土師器皿、羽釜および曲物、木球および板状品がある。瓦器の年代は12世紀代である。木球は広葉樹の幹を削り成形したもので、やや扁平であるが総枝^{トツヂ}の枝であろう。大きさは7cm×6.5cm、厚さ4cm。曲物は直径25cm、高さ15cmで、端部をかば（桜の樹皮）で綴じ合わせる。藤原京期の土器は、少量である。

まとめ

検出した遺構は中世、藤原京期、弥生時代の3時期がある。このうち藤原京期では、右京七条二坊西北坪を区画する施設である可能性が強い東西塙S A 8293と、建物3棟を検出した。調査区が道路敷地という制約もあって、他に関連する遺構は見いだせなかった。

建物は3時期の重複があり、S B 8292→S B 8290→S B 8291と変遷している。

調査の最大のねらいであった六条大路南側溝は、検出できなかった。大路南側溝の推定位置である調査区の北半部には、藤原京期の包含層といえるものではなく、この時期の遺構面と中世の遺構面は同一である。この状態からみて、六条大路南側溝は中世に削平を受け、遺存しなかった可能性が強い。

弥生時代の主要な遺構は土坑群であり、四分遺跡の南端を画する施設などは検出できなかった。また、弥生後期の遺物包含層も調査区全体に広がることからみて、四分遺跡の範囲は従来の推定を超え、調査区のさらに南側にまで広がる可能性がでてきた。この点は、将来の調査に委ねなければならない。

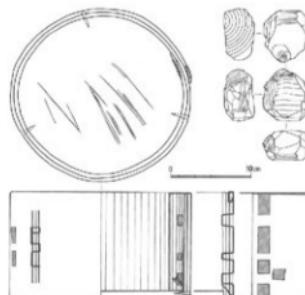


Fig.51 S E8297山十木製品 (1:6)

8 本薬師寺の調査

A 本薬師寺1993-3次調査

(1994年2月～4月)

権原市城殿町にある本薬師寺跡には、現在も金堂と東西二つの塔の土壇そして多数の礎石が残っている。本薬師寺跡では、これまで8回の発掘調査を実施し、金堂・中門・南面回廊などについて成果をあげてきた。今回は前年度の中門・南面回廊の調査に続く計画調査で、東塔の基壇規模と周囲の状況を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査は1994年2月10日に開始し、4月15日に終了した。調査面積は276m²である。

基本層序

調査地の現況は水田である。調査区の層位は上から順に、水田耕作土（厚さ約20cm）と水田床土（厚さ約15cm）、灰褐色土や暗黄灰褐色砂質土などの遺物包含層、凝灰岩の細片を含む暗褐色砂質土、粘土混り暗灰色砂質土、暗灰色砂質土である。本薬師寺に関係する遺構は、遺物包含層の下、伽藍造営時の整地である暗褐色砂質土層の上面で検出した。

遺構

東塔跡には現状で、南北13m、東西16m、高さ約1mの土壇が残る。土壇上には合利孔をもつ

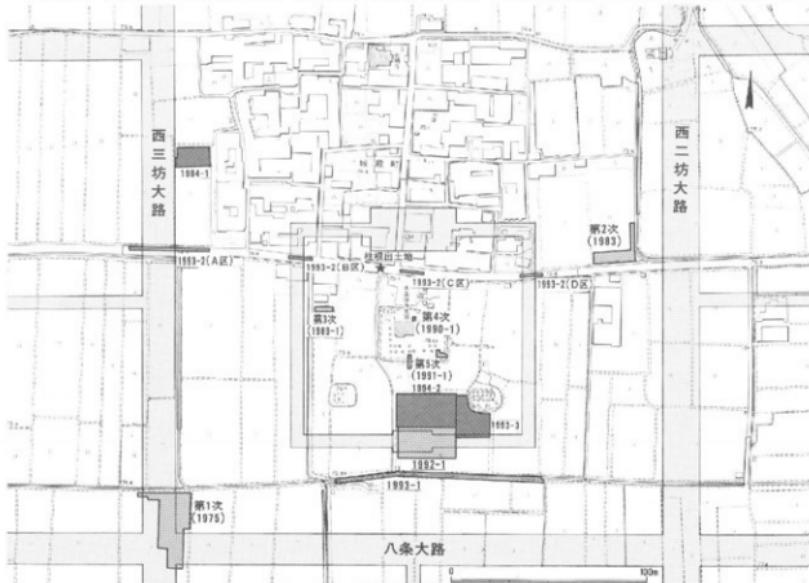


Fig.52 本薬師寺1993-3、1994-1・2次調査位置図 (1 : 2500)

た心礎（東西2.1m、南北1.7m）のほか、四天柱礎石4個と側柱礎石11個がほぼ元の位置を保って残っている。側柱礎石は本来あった12個のうち1個が失われ、残る11個のなかにも大きく欠損した礎石がある。裳階の礎石は全くみあたらないため、この塔に裳階があったかどうかが議論された。今回の調査区は東塔跡土壇に及ばなかったので、裳階の有無について判断できる遺構を検出することはできなかったが、東塔の基壇規模および基壇周囲の施設について新たな知見をうることができた。

東塔基壇に關わる遺構 東塔西南隅の基壇地覆石抜き取り穴と階段地覆石抜き取り穴がある。

基壇地覆石抜き取り穴は、幅約70cmの溝状を呈している。地覆石据え付け掘形は確認していない。階段は南面階段と西面階段が調査区内に入っているが、これも石階はおろか地覆石まで完全に抜き取られ、その本来の位置を確定することはできなかった。

これら抜き取り穴および調査区内各所からは凝灰岩の切石断片が多数出土している。さらに、金堂の基壇化粧および階段には凝灰岩切石が使用されたことが既に判明しているので、東塔の基壇化粧も凝灰岩切石を用いたとみてよいだろう。

地覆石の位置を確定することはできなかったが、後述する基壇周囲の化粧との関係から、基壇規模は一応、一辺14.2m、周囲の石敷きからの基壇高は1.45mと推定される。

調査区が基壇本体によんでいないので基壇築成については十分な調査ができなかったが、調査区の東辺で基盤層が大きく落ち込む部分があった。

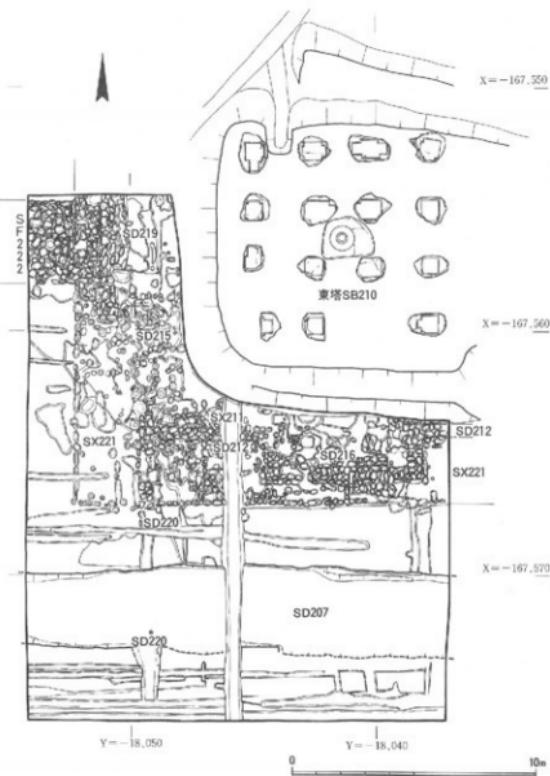


Fig.53 本葉寺1993-3次調査遺構図 (1:200)

これが基壇の掘り込み地業と関連する可能性はある。

東塔基壇周囲の遺構 玉石敷き S X 221は東塔の基壇周囲にある、人頭大ほどの川原石を用いた卡石敷きである。後世の搅乱でかなりの敷石が抜き取られていたが、その構造と規模をほぼ確認した。周囲に卡石列をめぐらせた正方形の施設で、わずかに依存する卡石列とその抜き取り穴から復元すると、一辺約21.8mの正方形となる。基壇に接するところに幅の狭い縁取り（犬走り）があり、さらに石組雨落溝がめぐる。そして雨落溝と縁石との間には玉石を敷き詰めてある。

犬走り S X 211は、玉石2石分、約60cm幅である。基壇西南隅に、ごく部分的に残るだけだった。

犬走りに沿って玉石組の雨落溝（S D 212・215・216・219）がめぐる。溝底に卡石を二列並べ、両側にやや平たい玉石を立て並べる。幅約60cm、深さ約10cm。階段部分（S D 216・219）は幅5.8m（心々）で、1.65m外側にはりだす。西階段周囲の雨落溝 S D 219は、西側石にほかの部分より大きな石を使用する。後述する参道が接続することと関連するのであろう。南西隅では西面雨落溝 S D 215がそのまま南に延びる。この南北溝 S D 220は、石敷き S X 221の範囲の長さ約2.5m分は石組溝だが、石敷きの外側では素掘り溝である。ただし、石敷きの南に接して西側石が2石あるので、石敷きからはずれた1m弱の部分だけは石組だった可能性があるが、底石はなかったようだ。雨落溝からは瓦のほか、金銅製垂木先金具、銅釘、土師器、須恵器などが出土した。出土土器には9世紀後半のものがある。

参道 S F 222は、東塔の西面階段の正面にある幅3.4mの石敷き参道である。玉石敷き S X 221より大ぶりの玉石を敷き、北と南には玉石列をならべて縁石とする。敷石の隙間に砂利を詰める。東塔と西塔をつなぐ参道と推定され、長さ約2m分を確認した。参道の東端には玉石敷き S X 221西辺の玉石列が南北に通っている。

南面回廊に関係する遺構 南面回廊北雨落溝の底石抜き取り溝 S D 142を確認した。

そのほかの遺構 S D 207は東塔と南面回廊の中間にある東西溝である。幅3.5m、深さ0.4m。南北溝 S D 220と重複し、それより新しい。多量の瓦が堆積し、ほかに須恵器、土師器、凝灰岩切石破片などが出土した。東塔廃絶時の瓦を捨て込んだのであろう。

遺物

出土遺物は、瓦類、土器、金属器、凝灰岩切石断片などがある。

瓦類 丸・平瓦、軒瓦、面戸瓦、熨斗瓦、隅切り瓦などがある。

軒瓦（Fig.54）は、軒丸瓦174点、軒平瓦99点、総計273点出土した（Tab.10）。大半は7世紀の創建時のもの。普通サイズのセット（6276Aa--6641H）と小型の裳階用のセット（6276E--6641K）がある。出土量からみてこの二組が東塔の創建軒瓦であろう。補修に用いられた軒瓦には、奈良時代前半の平城薬師寺創建軒平瓦6641Gを初めとして、奈良時代後半から平安時代

はじめ頃までの軒瓦がある。いずれも平城薬師寺または平城宮と同範である。この状況は中門の調査とかわるところがない。

丸瓦と平瓦は、ごく少量の格子叩きの行基丸瓦と同じ叩き板を使った粘土板桶巻き作りの平瓦を除く大半が、繩叩きの玉縁丸瓦と粘土板桶巻き作りの平瓦である。繩叩きは通常の繩巻き叩き板のほかに、繩を三つ編みにして叩き板に巻き付けた特殊な繩叩きがあり、これが多数を占める。繩叩き目が一条ごとに向きをかえる「ハ」字形の繩叩き目になるのが特徴である。平瓦は凹面に、丸瓦は凸面にていねいなナデ調整を加える。

道具瓦は熨斗瓦と面戸瓦が出土した。ともに切り熨斗瓦と切り面戸瓦である。熨斗瓦は凹面にナデ調整を行わない。

土器 須恵器、土師器、白磁、青磁、転用硯、漆付着土器のほか弥生土器がある。

比較的まとまって土器が出土したのは、東西溝 S D 207と東塔周囲の雨落溝である。東西溝 S D 207からは土師器、須恵器、弥生土器などが出土した。遺構の年代を示す土器は土師器小皿 (Fig.55; 1~6) である。直径10.0~11.4cm、器高1.7~2.1cm。灯明皿に使用された痕跡を残す。10世紀代。東塔周囲の雨落溝からは、土師器、須恵器などがある。土師器小皿 (Fig.55; 7~11) はいずれも灯明皿と思われる。図

軒丸瓦	点数	軒平瓦	点数
6276A a	104	6641H	58
A b	2	6641K	14
A c	2	6647C b?	3
6276E	46	6647G	1
		6647I	2
計	154	計	78
薬師寺32	4	6641G	2
33	1	6663 I	4
33or34	5	6701A	2
36	10	6721D	1
		薬師寺239	1
計	20	計	10
		型式不明	11
合 計	174	合 計	99

Tab.10 出土軒瓦集計表

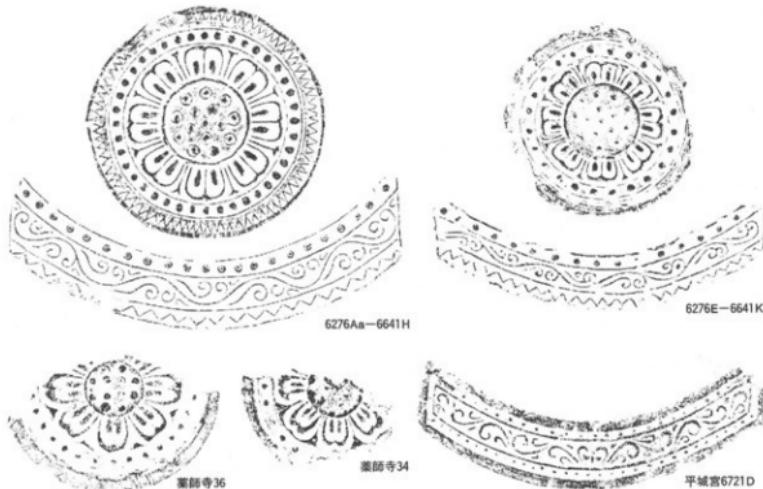


Fig.54 主な出土軒瓦 (1 : 4)

示したのは、SD 212 (8・11)、SD 215 (7)、SD 216 (9)、SD 219 (10) から出土した上器。SD 207 出土上器よりは若干古く、9世紀後半の年代が与えられる。

金属器ほか 金銅製垂木先金具、金銅製飾金具、銅釘、銅環、鉄釘などがある。金銅製垂木先金具 (Fig.56; 1) は長方形の金具で、対葉花紋を透かし彫りし、毛彫りの輪郭線を刻んだもの。一辺 12cm × 10.5cm (4寸 × 3.5寸) に復元できる。同形・同紋の垂木先金具が平城薬師寺からも出土している。飾金具 (Fig.56; 2) は直径 6cm (2寸) の扁平な半球形の本体に四角錐形の脚が 2 本つくもの。脚は先端を欠損する。釘隠してであろうか。ほかに風鐸の吊金具かと思われる銅環や銅釘がある。鉄釘は 15 本が出土した。最も依存状態の良いものは全長が 18.2 cm ある。

そのほか、土馬の断片、基壇化粧に使用された凝灰岩の切石断片、弥生時代のサヌカイト製石鐵や刺片がある。

まとめ

遺存状況は良くないが、東塔基壇周囲の状況がほぼ明らかになった。東塔の基壇外装には凝灰岩切石が使用された可能性が高く、基壇規模についてもおおむねの推定を行うことができた。基壇周囲の化粧は、卡石敷きの犬走り、玉石組の雨落溝、石敷き、という構造が判明した。

平城薬師寺の東塔の基壇外装と周囲の化粧については発掘調査成果がないが、調査された平城薬師寺西塔と比較すると、基本的な構成は全く一致する。

平城薬師寺では從来知られていなかった施設としては、二つの塔をつなぐ石敷きの参道がある。昨年度の中門の調査によって、中門と金堂を結ぶ推定幅 4.5m の石敷き参道の存在が推測

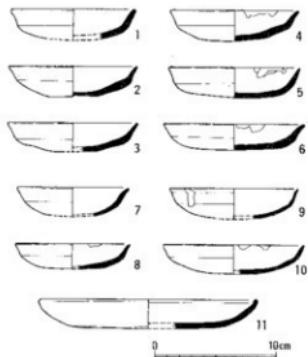


Fig.55 出土土器 (1 : 4) 1~6 : SD207
7~11 : SD212・215・216・219

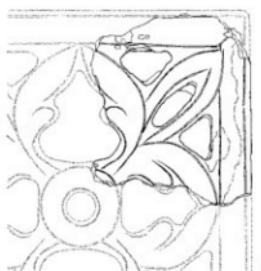
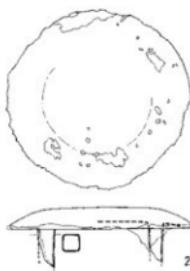


Fig.56 金銅製垂木先金具 (1)・飾金具 (2) (2 : 3)



	基壇辺長×高	犬走幅	雨落溝幅	階段部	石敷規模	参道
本薬師寺東塔	14.2 m × 1.45 m	約 60cm	約 60cm	5.8 m × 1.65 m	21.8 m四方	幅 3.4 m
平城薬師寺西塔	13.65 m × 1.4 m	約 60cm	50~60cm	5.0 m × 1.8 m	20.75 m四方	不明

Tab.11 本薬師寺東塔・平城薬師寺西塔基壇規模比較

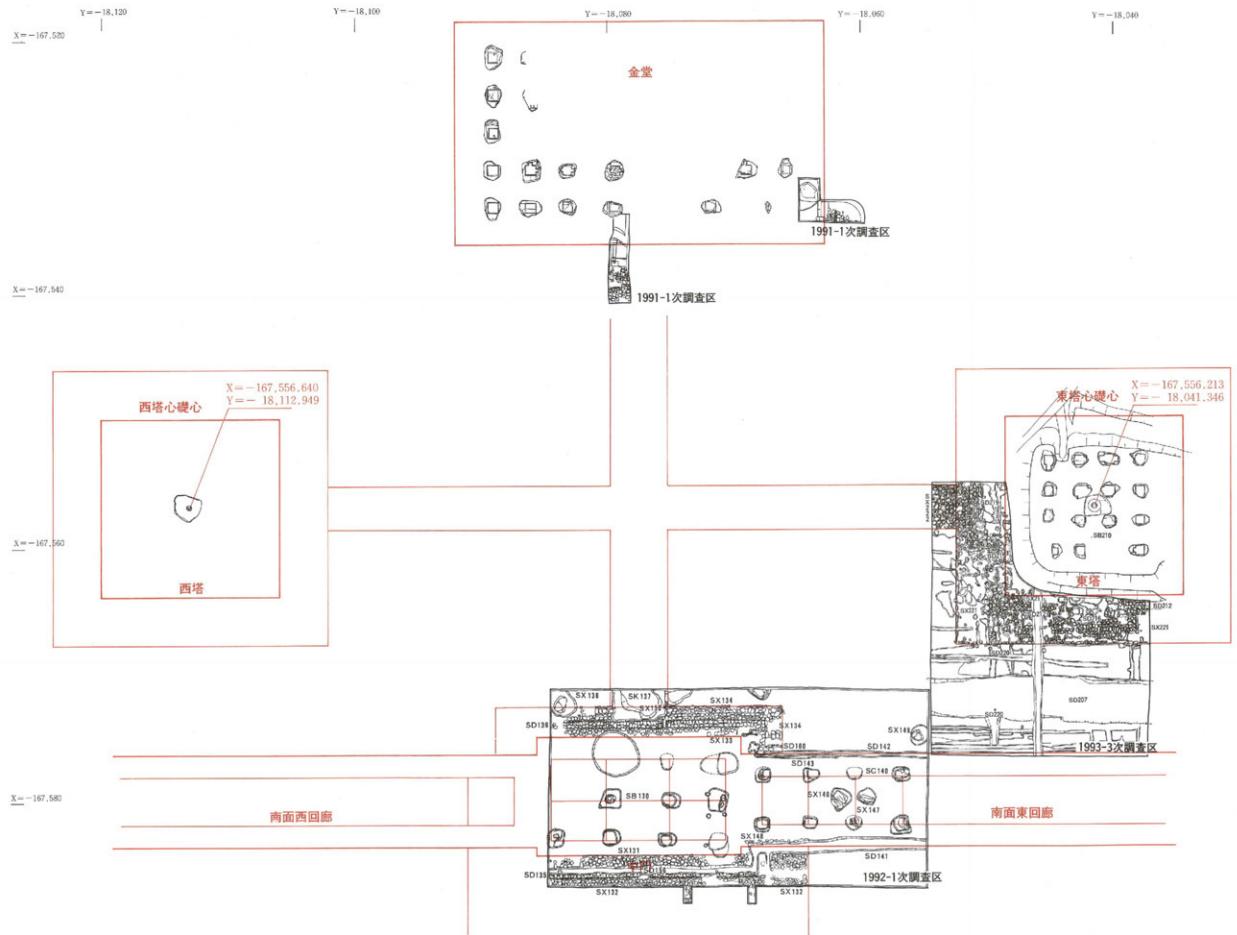


Fig.57 本薬師寺伽藍中軸部遺構図 (1 : 300)

されている。今回、幅3.4mの東西方向の参道を検出したことによって、中門、金堂、東西両塔でかこまれる境内地の中心に右敷きの参道が十字に設置されていた可能性が高くなった。

今回、発掘調査と平行して、金堂、東西両塔の礎石の実測調査を実施した（Fig.57）。東西両塔心礎の心々距離は71.606m、国の方眼に対する振れは $0^{\circ}21'27''$ 北で西偏する。また、心礎上面の標高は、東塔が76.790m、西塔が76.717mで、西塔が約7cm低い。東西両塔心礎心の中点を求めて、先述した方位の振れを伽藍中軸線に考えると、金堂の礎石配置はこれによく整合するが、中門の推定心は若干ずれる。今後の調査で検討すべき課題である。

出土遺物ではまず、本薬師寺創建期の瓦が大量に出土したことが注目される。軒瓦の出土量からみて、東塔の創建軒瓦は6276Aa-6641H、および6276E-6641K、の二組である。前者が本屋根用、後者は裳階用である。從来、東塔の基壇上には裳階の礎石がないことから、裳階の有無が議論されたが、今年度の1993-1次調査で中門南方から、使用された堂塔は不明ながら、裳階の礎石が出土したこと、また金堂周囲からも今回の東塔周囲からも裳階用と推定できる小型瓦が出土したことなどから、本薬師寺の金堂ならびに東塔には裳階が存在した可能性が高くなかった。さらに、創建軒瓦以外に、奈良時代から平安時代の瓦も出土し、それらはすべて平城薬師寺あるいは平城宮と同様であった。このような状況は昨年度の中門調査区での軒瓦の出土状況とほぼ軌を一にするものであり、創建の東塔が平城遷都後もこの地に存在し、平城薬師寺の管理下に管理・運営されたことを示すとみてよいだろう。また、東西溝S D 207出土土器からみて、東塔の廃絶時期は10世紀代と推定できよう。

また、今回の調査で塑像の断片がまったく発見されなかったことにも注意したい。『薬師寺縁起』によれば平城薬師寺の塔には塑像群があり、本薬師寺の塔にも同様の塑像群を想定する説があった。しかし、今回、塑像の破片はまったく出土しなかったので、本薬師寺の東塔初層には塑像群は安置されていなかった可能性が高くなかった。このことは、平城薬師寺の塔と同様に初層に大規模な塑像群を想定して広い空間を必要とするような建築構造を推定する必要のないことにつながる。現存する側柱礎石には基本的に地覆座が作り出してあったと考えられる。地覆座の作り出しをまったくもたない側柱礎石は1個だけであり、それ以外は破損品を含めて少なくとも片方には地覆座を設けている。なかには西北隅の側柱礎石のように地覆の幅に合わせて地覆座を作り直したものまである。したがって、側柱筋には地覆があり、壁が立ち上がっていたと考えたい。このことはまた、裳階が法隆寺塔のように付加的な構造であった可能性を示唆するものともいえよう。

今回の調査は東塔の裾まわりに限られた調査で、基壇部の調査を行っていない関係から階段規模の確定などは徹底的な調査を実施しなかった。しかし、本薬師寺東塔についてこれまでの研究に再検討を迫る重要な発見もあった。未解決の部分は多いが、周辺の調査を重ねるなかで調査の問題点や課題も整理していくことと思う。

B 本薬師寺1994-1次

(1994年9月～10月)

本調査は個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は本薬師寺の寺地推定地内の西北に位置する。本調査区の南では1975年の1次調査で、西三坊大路と八条大路の交差点と、西三坊大路東側溝の東側に並行して築地の雨落溝と推定される南北溝を検出している。1993年に行った本薬師寺1993-2次調査A区においても、西三坊大路東西側溝を確認している。本調査区の西端が西三坊大路の東側溝推定位置に位置することから、西三坊大路東側溝および本薬師寺の西限の区画施設の検出が期待された。検出した遺構は建物1棟、藤原宮期直前の東西溝、弥生時代の溝、流路で、西三坊大路東側溝および本薬師寺の西限の区画施設は確認できなかった。

藤原宮期以前の遺構 基本層序は地表面から耕作土、床土、明黄灰色土で、遺構はすべて明黄灰色土の地山面で検出した。

S D 255は調査区東南でわん曲する流路である。幅約2m、深さ約40cmで、遺物は全く伴出せず、自然流路と思われる。

S D 252は、発掘区西端の逆く字形の溝である。幅50cm～1m、深さは20cm～25cmである。東南辺の一部の溝幅が狭く、この部分が通路であった可能性がある。溝内からは弥生後期後半の上器が出土している。祭祀に関わる遺物は出土していないが、方形周溝墓の可能性が考えられる。また、斜行する溝S D 253・S D 254からも弥生後期後半の土器が出土している。

S D 251はほぼ国土方眼方位に沿う東西溝である。溝幅は1m～1.2mで、発掘区の中央部で途切れ、溝は西へ流れる。発掘区の西端での溝深さは、約30cmである。溝内からは飛鳥IV～Vの土器が出土しており、藤原宮期直前の遺構もしくは、本薬師寺造営頃の遺構と推定する。

藤原宮期の遺構 S B 250は東西1間、南北1間の建物である。柱間寸法は東西3.6m(12尺)、南北3.3m(11尺)と広い。建物内部には丁度建物の中央位置に2.4mの間隔を隔てて2個の柱穴が並ぶ。これら柱穴が他の建物の柱穴の可能性もあるが、S B 250の柱間寸法が大きであること、

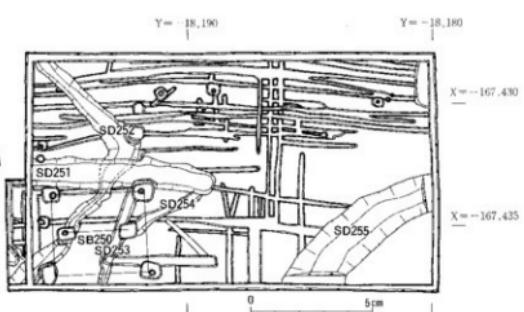


Fig. 58 本薬師寺1994-1次調査遺構図 (1:200)

その位置が建物の中央に位置することから、特殊な構造の建物と考えておく。

発掘区西端で溝肩を検出し、ほぼ西三坊大路東側溝の東肩に位置するが、ごく一部の検出でもあり、耕作溝である可能性も捨て切れず、積極的に西三坊大路東側溝と認定するには至らなかった。

III 飛鳥地域の調査

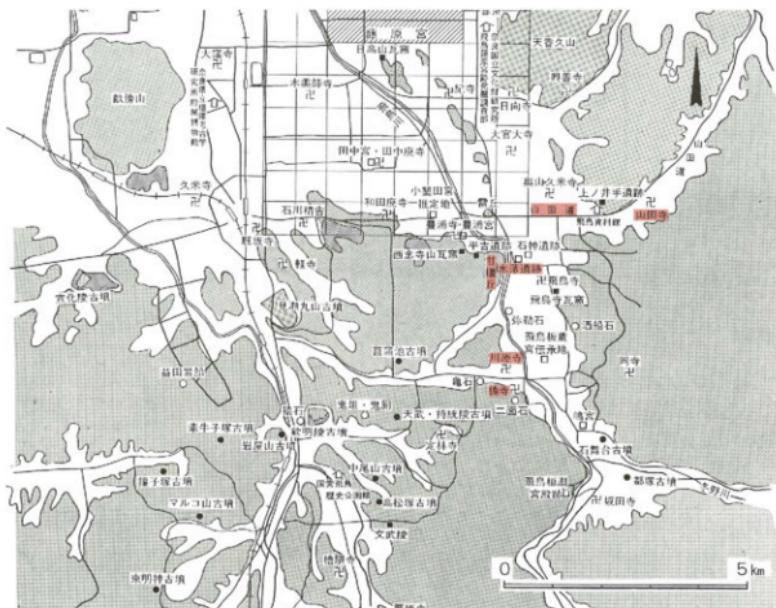


Fig.59 飛鳥地域の調査位置図

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
藤原宮 71-12	6 AMK - D	73m ²	94. 1.10～ 94. 1.12	高市郡明日香村農浦 (甘檼丘東麓)	国有地	登山道建設	金子 裕之	94
	5 AKG - L・M	360m ²	94. 5. 9～ 94. 6. 30	明日香村川原 (甘檼丘東麓)	国有地	駐車場建設	次山 淳	95～ 101
川原寺 1993-2次	5 BKH - A	83.5m ²	93.12. 7～ 94. 1.27	明日香村川原	関西電力等	電線等埋設	花谷 浩	102～ 106
川原寺 1993-3次	5 BKH - G	1m ²	94. 1.13～	明日香村川原876	河合義照	住宅増築	村田 和弘	107
橋寺 1993-1次	5 BTB - C	4.1m ²	94. 1.26～ 94. 2. 7	明日香村橋字北ノ門	関西電力等	電線等埋設	花谷 浩	108
山田寺 第9次	5 BYD - A・F	80m ²	94.11. 7～ 94.12. 7	桜井市山田994-1・ 1040・1245・1246	国有地	計画調査	黒崎 直	109～ 112
山田道 第7次	5 AMD - P	255m ²	94. 4.18～ 94. 5.24	明日香村雷・飛鳥	奈良県	ポケットパーク設置	伊藤 武	89～93
水落遺跡 第7次	5 AME - P・Q	600m ²	94. 8. 1～ 94.12.15	明日香村大字 飛鳥291-1	豊田純行	計画調査	西口 善生	77～88

Tab.12 飛鳥地域の調査一覧

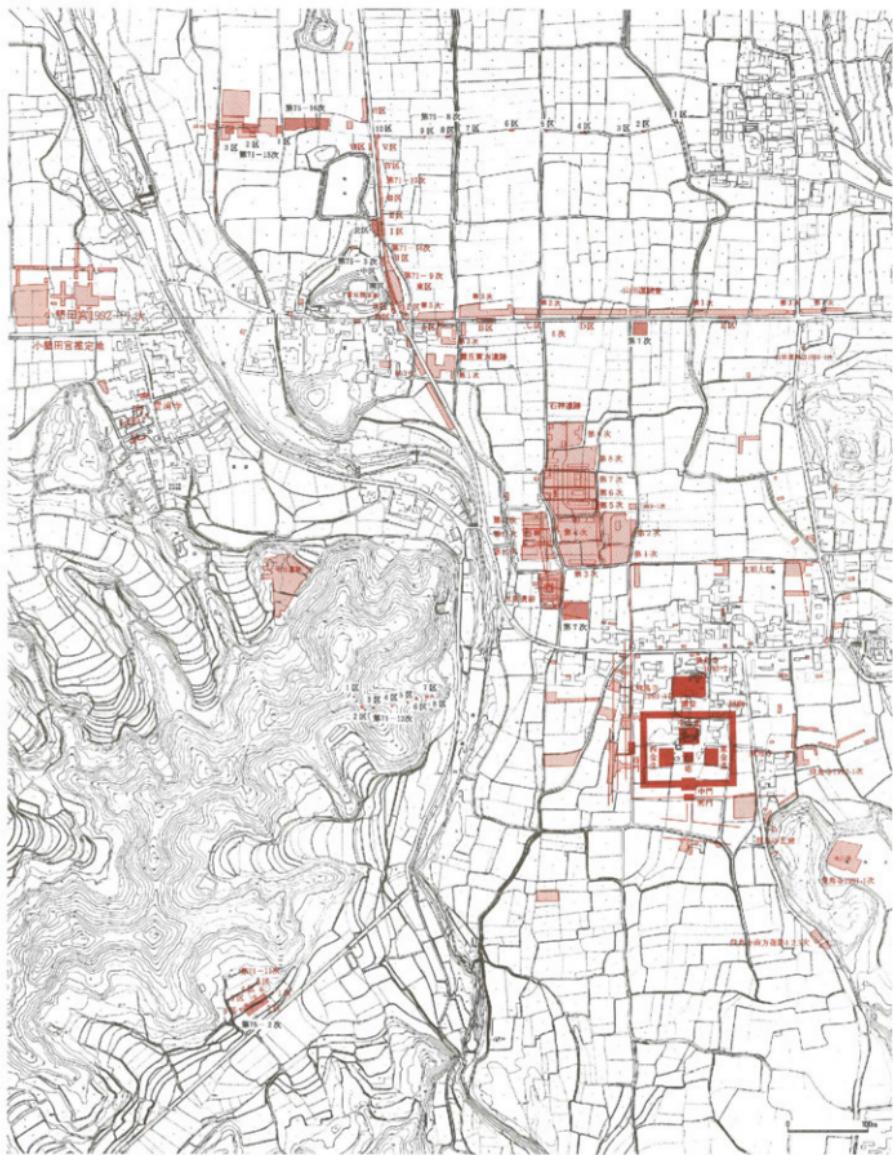


Fig. 60 飛鳥寺・石神遺跡周辺調査位置図 (1 : 6000)

1 水落遺跡第7次調査

(1994年8月～12月)

昭和47年に発見された水落遺跡は、特異な外観の基壇をもった大規模な礎石建物として昭和51年に国史跡に指定された。昭和56年からの史跡整備に伴う調査（第2～6次調査）によって、緩やかな斜面をなす正方形の基壇の中央に4間四方の総柱様建物があること、その柱は地下に埋設された礎石の上に立ち、礎石は縦横斜めに並べた列石によって固定されていること、建物中央地下に巨大な台石がありその上に漆塗木箱が据えられること、基壇内部には木樋暗渠が敷設され、水の一部は基壇上で利用した後に木箱に集められて西方へ排水され、余水は木箱を迂回して北方へ排水されること、また、建物からは木樋とは別に小銅管が北にのびることなどが明らかになった。さらに礎石建物の北と南には同様の基壇化粧をもった長大な掘立柱建物があり、すべてが一つの掘込地盤によって造成されていることも判明し、こうした外観、構造、機能の特異さは遺跡の性格を反映したものであって、遺跡は出土土器の年代観からも矛盾のない齊明天皇6年（西暦660年）に中大兄皇子がつくった漏刻の遺跡と考えられたのである。

これと並行して昭和56年から継続的に実施してきた石神遺跡の調査は、昨年度の第12次調査までに総面積約12000m²に達し、飛鳥寺西北方には長大な掘立柱建物と周囲の石敷・石組溝などで構成される大規模な遺構群が宮まれ、それらは寺域北限堀の北約11mの位置を並行する大規模な掘立柱塀を南限とする南北160m以上、東西140m以上の範囲に展開することが明らかになっている。遺跡は7世紀代を経てA、B、C、Dの4期に大別される幾多の造替を繰り返しているが、その最も整備されたA-3期（齐明朝）には、長大な掘立柱建物で囲んだ長方形区画が東西に2つ整然と並び、西の区画には南北の位置に正殿にあたる四面庇付建物が配置される。遺跡は先の大規模な掘立柱塀で水落遺跡と区分されるが、水落遺跡から延びた木樋暗渠は、このA-3期の建物の間を抜けて北方へ延び、建物周辺の右敷に覆われており、木樋の通過点周辺では遺跡南限の掘立柱塀がとぎれて通路となっていることから、少なくとも石神遺跡のA-3期には両遺跡は密接な関連をもって経営されていると考えられている。

いっぽう、齐明朝から持統朝に行われた饗宴の場として史料に散見する飛鳥寺西方についても石敷の広場と考えられており、その西北の一画を占める位置にある水落遺跡の建物群を際だたせているが、その調査は限定的であり、水落遺跡の調査についても史跡指定地の約1000m²について行ったにすぎず、とともに石神遺跡と対比する資料としては不十分にすぎる。

そこで、昨年度をもって飛鳥幼稚園敷地における調査が終了したのを期に、石神遺跡についての調査を一旦中断し、今年度からは水落遺跡の史跡指定地周辺から飛鳥寺西方の調査を進め、飛鳥寺西方における両遺跡の位置と性格を追究する手がかりを得ることになった。

調査地は史跡指定地の東南の南北に長い水田であり、約1900m²の敷地を3年度に分けて調査

する計画のもと、北端に南北20m、東西30mの調査区を設定した。これまでの調査成果によれば、水落遺跡の造構は礎石建物の時期（A期）とそれを埋め立てた後の時期（B期）に大別されるが、今次調査区内ではA期の遺跡全体におよぶ掘込地業の南端、掘立柱東西棟建物S B180の東に柱筋を揃えて建つ掘立柱建物（S B 240）、南限塀の可能性がある掘立柱東西塀（S A 295）、B期の東西溝（S D 260）が検出されると想定された。

層序

調査地の層序は基本的には、耕作土、床土、灰褐色土、褐色土、暗灰～黄褐色砂質土、灰褐色粗砂礫である。地山の弥生時代以前の河川に起源のある灰褐色粗砂礫の上には、古墳時代の自然流路の一部である暗灰～黄褐色砂質土が西に厚く堆積し、東半には東南から西北に向かって数条の灰褐色粗砂層が蛇行し砂礫層が露出している。平安時代の土器・瓦が含まれる褐色土は西北に厚く、東南に薄く堆積し、7世紀代およびそれ以前の造構はその下面で検出され、また、平安時代以降の造構はその上面あるいは灰褐色上面で検出される。いずれの造構面も東南に高く、西北に緩やかに下降しており、7世紀代の造構面は東西で約0.4m、南北で約0.1mの差がある。

遺構

検出された造構には、弥生時代の土坑、古墳時代の竪穴住居、7世紀代の掘立柱建物、石組溝、掘込地業、木樋暗渠、石敷、平安時代の井戸、土坑、小柱穴、素掘溝などがある。以下、7世紀代、平安時代、7世紀以前にわけて造構を概述する。

7世紀の遺構 7世紀代の造構には南北石組溝→掘込地業・建物→斜行石組溝の重複関係があり3小期に細分される。従来の時期区分に照らせば、礎石建物等と一連の造構である掘込地業・建物がA期に属し、それらで壊された南北石組溝がそれ以前であることに疑いはないものの、それより新しい重複関係にある斜行石組溝はB期に属す可能性が残る。しかし、後述するように斜行石組溝は掘込地業の東南隅をかすめて迂回する位置にあること、溝の上端の高さと西方の掘立柱建物S B180の床面の高さとの関係からすれば、重複関係はA期の造構の施工上の先后関係である可能性が高いと考えられる。なお、木樋暗渠と石敷については重複関係がみられず調査区内では決められない。以下ではA期以前、A期、不詳の順に記述し、石神遺跡、水落遺跡の時期区分との対応関係については後にふれることにする。

南北石組溝S D 3400は調査区の西端で東側石列を検出し、調査区を一部拡張して溝幅0.6m、深さ0.25mの規模であることを明らかにした。溝は、人頭大の玉石を1～2段積んで側石とし、底には灰色砂が堆積し、暗灰色粘質土で埋められる。東西素掘溝S D 3409、斜行石組溝S D 3410、土坑S K 3406等で壊され、側石も多くが抜き取られているが、斜行石組溝の北にも東側石抜取穴と溝堆積土が確認され、それらは掘込地業の南縁によって断ち切られている。溝の造営方位は北で東に約40°傾いている。なお、溝の東にある柱穴S X 3414と斜行石組溝底で検出

した柱穴 S X 3441は埋土と重複関係の上から、この溝とともに造営された A 期以前の遺構の一部と思われる。

掘込地業は A 期の遺構全てを包み込むもので、第 4 次調査で南端を確認している。今回その東延長線上で南端を確認するとともに、あらたに礎石建物中軸線から東 22.8m の位置で東端 S X 3430 を検出した。掘込地業は古墳時代の土器を含む自然河川状の砂質土、砂礫土を深さ 2.1m について掘り込み、底から砂礫土、砂質土、粘質土を細かな互層で積み上げている。第 4 次調査では掘込地業の南端は、深さ 1 m 付近で小さな段を設けた二段掘りであることが確認されたが、今回検出した東端は急傾斜で底に至っている。

掘込地業の東南隅部については斜行石組溝 S D 3410 が重なっていて検出できなかったが、南端の位置も礎石建物の中軸線から 22.8m 南の位置にあって、掘込地業が正方形であった可能性は高い。地業土の最上層は掘込地業外縁の外にのびて厚さ 20cm の整地土となっているが、整地土上面の高さは西方の掘立柱建物 S B 180 の床面とほぼ同じ高さにあって、後述の斜行石組溝はその整地土上面から側石の据え付け掘形を掘っている。

掘立柱建物 S B 3440 は調査区の西北隅で 4 個の柱穴を検出した。完掘した柱穴は東南隅の 1 個であるが、柱掘形は一辺 1.5m 、深さ 2 m で褐色粘質土と灰褐色砂質土の互層で埋められる。掘形底には方 60cm 、高さ 50cm の花崗岩切石を据え、黄色粘土で埋めた柱抜取穴が切石の中央上面に至っている。ところで 4 個の柱穴は東南隅の柱を最深として柱掘形の深さがそれぞれ異なり、一つの建物の柱穴とすることに若干の疑問が生じる。しかし西南の柱穴の底にも方形切石が据えられること、その上端が切石の確認されなかつた北の 2 個の柱穴底と近い深さにあること、柱掘形埋上がよく似ていることからすれば 4 個の柱穴は一つの建物の柱穴とみなしうる。したがって建物は総柱様の建物であり、柱間は掘形底の切石間で東西 1.9m 、南北方向は柱位置を確定できないが 2 m 弱に復原される。

これまでの調査成果では、東西 8 間の S B 180 の東には、柱筋を備えた東西棟建物 (S B 240) を想定してきたが、以上の調査所見からは一連の建物を想定することは難しい。すなわち、今回検出した柱穴の内南 2 本は S B 240 、 180 の南側柱筋に一致するものの、両建物の妻柱は北によった位置に建ち、今回検出した柱の内の北 2 本の柱筋とは合わないのであり、既に検出されている S B 240 の西妻柱筋と今回の東側柱筋との距離は約 7 m で、同じ柱間では割り切れない。建物の主要部分は未調査地にあり、規模構造に関する結論はその調査成果によらねばならないが、現状では 3 間 × 3 間あるいは 2 間 × 2 間の継柱建物が想定され、いずれの場合も從来の東西棟建物 S B 240 は成り立たず、既掘の柱穴 3 個は S B 180 の東庇とみるべきである。なお、東南隅の柱位置から復原される遺跡全体の企画を含めた検討については後述する。

斜行石組溝 S D 3410 は掘込地業東南隅をかすめる位置に、北で東へ 35°~45° 傾く方位に敷設された大型の石組溝である。東側石を平安時代の土坑 S K 3413 で、西南部の南北石組溝との交

点を土坑SK3406で破壊され、溝全体は側石内外ともに側石の中程の高さまで平安時代に削られている。土坑SK3406の底で検出した側石の抜取穴を含めて、長さ12.5m分を確認し、東北—西南方とも調査区外に延びる。溝は幅2.2m、深さ0.6mの掘形溝を掘り、0.5～1m大的花崗岩を使って側石とする。東西の側石で施工法がやや異なり、西側石が大型石1石を立てる傾向にあるのに対して、東側石は小ぶりの石を2段に積んだり、底が西側石よりも高い位置にあるため内傾した石が多い。また、東側石の裏込めには拳大の石を詰めた層もあって、東側石が積み替えられた可能性が想定された。しかし、掘形が一連であること、西側石でも大型石についてはその部分だけ深く掘り込んで据え、小型石の下面是高い位置にあることから、この違いは側石天端の高さを重視して用材の大きさに合わせて適宜底に土を入れたり、掘りくぼめたりした結果であると判断した。したがって溝は内法幅0.6m、深さ0.5mであり、検出した西南と東北とではほとんど高低差がない。また、北端の側石の天端高が建物SB180の床面（海拔100.93m）よりも約10cm高い高さにあることから、溝は開渠であると考えられる。

石敷SX3391は調査区の東方にわずかに残る。東端には東に面を揃えた人頭大の石を並べた石列SX3390があり、石敷中に約70cm離れてもう一列の石列がある。石列SX3390は北端から約11mでとぎれ、石敷SX3391も幅狭くなってしまう。しかし、調査区南方に残る石敷SX3394が石列SX3390の南延長線を越えては東に及ばないようであるから、北半の石敷SX3391と南の石敷SX3394は本来一体のもので、南北20m、東西7m以上にわたって敷かれ



Fig. 61 水落遺跡第7次調査構造配置図(1:300)

ていたものと考えられる。石列は北で西へ $1^{\circ}40'$ 余り傾く方位に並ぶが、この方位は飛鳥寺の中権伽藍や寺域西方の通称「入鹿首塚」の南で検出された南北石敷など西方一帯の石敷遺構の方位と類似する。

礫敷 S X 3392は拳大の石を乱雑に敷いたもので虫食い状に点々と残されるに過ぎないが、石列 S X 3391の東に石列上面とほぼ同じ高さで広がっていたとみられる。乱雑さと用材の大きさから地山の礫群と区別し難い状況であるが、一層だけで比較的面が揃うことから礫敷を考えた。南北20m以上、東西は石列の東4mまでが確認できる。

木樋暗渠 S D 3370は調査区の南端で総長31mを検出した。木樋は幅1.4m、深さ0.7mの掘形溝を東で南へ約 11° 傾く方位に掘って敷設される。西半は平安時代の東西素掘溝 S D 3409で抜き取られ、上坑 S K 3381にも壊されているが、その底に長楕円形の花崗岩玉石が1.5~3.3mの間隔で遺存する。石は木樋に直交する方向に長軸を向け、石の上面中央部がわずかにU字形にくぼんでいるものが多い。石の間隔から木樋はこの台石（枕石）3つで1本の長さの材を接合しながら敷設されたと考えられる。木樋の抜き取られていない東半では外法幅0.4m、深さ0.3mの規模の木樋が確認できるが、すべて粘土化しており構造は明らかでない。水落遺跡の中権部で検出した木樋は、一本をU字形にくり抜いて板状の蓋をかぶせる構造で、多くは釘による蓋の固定はしていない。今回も釘を検出していないことから上圧によるのであろう。木樋の直上には底に一段低い石敷面が残る土坑 S K 3382のほか、大小の平安時代の土器を含む土坑状のくぼみがある。土坑 S K 3382内の石敷は広く覆っていた石敷 S X 3394が木樋の腐朽によって陥没したもので、その他の土坑については石敷の抜き取り後に陥没したものとみられる。

平安時代の遺構 西北部の井戸、東端の小型甌を合わせ口にした土器棺墓、方形土坑と素掘溝のほかに、調査区全般に不整形土坑、小柱穴などがある。

土坑 S K 3418は調査区西北部の石組溝 S D 3410や建物 S B 3440柱穴を覆う範圍にひろがる不整形な土坑で、上半部の深さ20cm程は多量の石で埋まっている。底はほぼ平らであるが、一部は石組溝 S D 3410の側石半ばの高さまで及んでいる。上層からは石に混じって平安時代前半の土師器、綠釉・灰釉陶器や飛鳥寺の瓦等が出土した。

土坑 S K 3406は石組溝 S D 3400と3410の交点に位置する不整形な土坑で、南北2m、東西2m以上で深さ0.3mの規模をもつ。2本の石組溝を壊し、上層に中小の石を密に詰めているが、底で石組溝 S D 3410の側石抜き取りが検出された。土坑 S K 3413は石組溝 S D 3410の東側石を壊す不整形な土坑で、中に壊した側石を投棄している。いずれも土坑 S K 3418と同様、周辺の石の処理を目的としたものであろう。

調査区の南端沿いには不整形で浅い土坑 S K 3396~3399が連なり、埋土に平安時代前半の土師器皿、黒色土器碗、瓦片が含まれる。中央部の土坑 S K 3389・S K 3421も同様の時期で、S K 3396・S K 3389では底が石敷 S X 3394、S X 3391上面に至っており、石敷目地からも黒色土

器等が出土する。調査区東南部に点在する小土坑は黒灰色粘質土を埋土とするものと黄色粘土を混えたものがあるが、いずれも平安時代前半の土器が含まれ、大型の S K 3381、3379、3378には大小の石が投棄されている。

井戸 S E 3415は石群十坑 S K 3418の下で井戸枠の抜取穴を検出した。井戸は一辺2.2m、深さ2.6mの略方形の掘形を掘り、その底中央に直径42cm、高さ25cmの曲物を据え、それを包むように拳大の石を詰めて掘り鉢状の井戸底斜面をつくる。斜面の上端は大型の石を1～2段積んで平坦面とし、その上に井戸枠をくむ。井戸枠は四隅に柱を立てた内法約1mの横板組みであるが、地覆、柱、棒板、棧など木質部すべてが粘土化していて、組み合わせの詳細は確認できなかった。検出面から地覆までの深さは約1.8mで、上半1m分の棒板が抜き取られている。抜取穴埋土は黄色粘土を混えた暗褐色粘土で1m人の大型石が投棄されている。井戸枠内の埋土は底の曲物内部まで基本的に同じ暗灰色砂質土で、土師器、黒色土器など平安時代の土器が少量出土した。井戸は掘込地業の内側に位置するが、底は掘込地業底を約0.6m掘り抜き、自然流路の砂層に達している。

素掘溝 S D 3409は、木樋暗渠 S D 3370の西半部を抜き取る溝で、木樋掘形を完掘し灰緑褐色砂土で埋められている。東南端を土坑 S K 3381、S K 3380で壊されるが南に曲がる形跡がある。これと交差する南北素掘溝 S D 3420はより古くに掘られた溝で、幅1.4m、深さ0.5m。これも灰緑色砂土で埋められる。溝の方位は調査区水田の西畦とよく似た北で東へ約8°傾く方位にあって北流し、北端付近では石組溝 S D 3410の東側石を壊す土坑 S K 3413の延長部と思われる東西土坑 S K 3419に壊される。東西素掘溝 S D 3409と埋土が類似し、直線的な溝であることから、この溝も木樋の抜き取り溝の可能性はあるが明確な証左はない。むしろこの溝の掘削によって発見された木樋暗渠を抜き取るために S D 3409が掘られたと考えておきたい。

南北素掘溝 S D 3360は調査区東端にある幅0.8m、深さ0.4mの溝で、溝底は浅いU字形断面をなす。溝の西岸を壊す土坑 S K 3362の底には溝の西岸の傾斜に合った石があり、溝は部分的に護岸していたかもしれない。北端にある方形土坑 S K 3361の上層にそそぎ込むまでの長さ16.5m分を検出した。土坑 S K 3361は東西3.4m、南北3.5m以上の規模で壁は緩斜面をなし、埋土からは平安時代前半の土器が少量出土した。水溜めの機能を果たしたのであろう。

土器棺墓 S X 3363は直径40cm、深さ20cmの土坑内に、直径25cm人の土師器甕を南北に2個合わせ口にして倒置したものである。甕は平安時代前半のもので外面には煤が付着する。ただし、内容物から骨片等は検出されなかった。

以上のように、平安時代の遺構には互いに重複関係があるものの、出土遺物はほぼ9世紀後半から10世紀前半の近接した時期のものである。調査区全域に散在し、周辺の調査（水落跡第2次調査、石神遺跡第1・2・3次調査、飛鳥寺西方での調査）においても同様の時期の遺物を含む平坦な遺物包含層が確認されている。飛鳥寺の西北方の石神遺跡第1、2次調査では

小規模な建物や金銅製飾金具などを含む上坑が発見されており、生活の中心はそちらにあると思われるが、今次調査では井戸や土坑、小柱穴が発見されたものの建物にはまとめられない。なお、素掘溝や土坑群のようにA期の木樋、石敷を広範に壊すのはこの時期であり、7世紀後半～8世紀の遺構や遺物の少ないとともに注目すべきである。

7世紀以前の遺構 弥生時代の土坑と古墳時代の堅穴住居がある。

調査区東南隅にある土坑SK3365は直径0.7m、深さ0.2mで、弥生時代中期の壺を口頭部を東に傾けて埋置し、下に高杯片を詰める。壺は肩部に櫛描き直線文を施させた広口壺で、底部近くの体側部に焼成後的小孔があく。南接する土坑SK3366にも弥生中期の土器が含まれる。

堅穴住居SX3425は調査区中央南寄りにあり、一辺約5.1mの方形で、深さ10cmほどが遺存する。北壁の東隅近くにカマドの一部と思われる轆0.5m、長さ1.4mの楕円形の穴SX3426があり、焼土と焼けた骨片が出上した。柱穴は東北、東南、西南の3個を確認したが、西北の柱穴は平安時代の土坑で壊されている。堅穴住居の西南隅の土坑SK3427は平安時代の上坑SK3398の下で検出した一辺0.5mの方形上坑で、5世紀末の完好な壺、甕、高杯などが含まれる。位置と土器の内容から堅穴住居の貯蔵穴と考えられる。なお、調査区中央北辺部にも焼土の集まった箇所や5世紀末の上器の入った暗灰色砂質土があり、ほかにも堅穴住居が存在したとみられる。また調査区東半には6世紀代の土師器、須恵器の入った灰褐色砂土の自然流路が東南から西北へ蛇行し、この堅穴住居の検出面上層にも6世紀末の須恵器杯が含まれていて、この地域の5世紀代の遺構はそれらによって流失、削平されたものと考えられる。

遺物

調査区全域から、土器・土製品、金属製品、石製品、瓦類などが出上した。上器には弥生時代から平安時代までのものがあるが、比較的少量であり、時期の上では平安時代と古墳時代のものが目立つ。この点は北方の石神遺跡の遺物が多量で、その大半が7世紀後半から藤原宮期の土器類で占められることと極めて対照的である。また、水落遺跡の礎石建物周囲の基壇化粧貼石の埋土や塗塗木箱抜取穴埋土出土の土器類と同じ時期の土器は、石神遺跡の調査では多くないことから、それらは礎石建物と密接に関わる遺物と考えられているが、礎石建物に隣接した今回の調査でもほとんど出土せず、それらの特殊性が再確認される結果となった。土器にはほかに施釉陶器として平安時代の縁釉碗、皿、灰釉碗等があり、古墳時代の堅穴住居の貯蔵穴と思われるSK3427からは5世紀末頃の土師器壺、甕、高杯などが出土した。また、土製品には奈良時代の土馬1点などがある。

金属製品には鉄鎌、鉄釘、銅片などがあるが、鉄鎌が多い石神遺跡の金属製品の構成と異なっている。これも7世紀後半から藤原宮期の遺構や土器がないことと関わる特徴である。石製品はほとんど無く、軽石塊のほかは縄文～弥生時代の安山岩剥片である。瓦類は主に平安時代の土坑から出土した飛鳥寺軒丸瓦Ⅲ型式3点の他に、平安時代の平瓦細片がある。

まとめ

建物 S B 3440の復原と A 期の遺構の配置計画 水落遺跡の第 1 ~ 6 次調査までの調査概報やそれらをまとめた調査報告では、南の掘立柱建物 S B 180の東にそれと柱筋を揃えた東西棟建物 S B 240を想定してきた。しかし、今回検出した柱穴は、S B 180の南側柱筋の延長上に正しく位置するものの、柱間1.9mの縦柱建物と考えられ、東西 8 間の S B 180の東にある柱 3 本を西妻柱列とした S B 240は成り立たないことが判明した。したがって、それら 3 本の柱は S B 180 の東庇列であり、S B 180は東西に庇をもつ10間の建物に復原される。また、今回の成果では東南隅の柱穴は礎石建物の中心から東西、南北とも 22.8m の距離にあり、正しく対角線上に位置すること、さらにこれまで南縁だけが確認されていた掘込地業についても、新たに確認された東縁は礎石建物中心から南縁までの距離と等しい位置にあることが判明し、全体が正方形を呈する設計企画がなされていると考えられる。以下では建物 S B 3440の規模構造を遺跡全体の設計との関係で検討しておきたい。

遺跡の設計については、調査報告の中で第 6 次調査までの成果に基づく若干の検討が行われ、礎石に穿たれた円座によって精度の高い数値が得られる礎石建物 S B 200の柱間寸法 (2.737m) が、建物配置、石組基壇化粧などの設計の基準となっていると考えられている。すなわち、掘立柱建物 S B 280の桁行柱間は礎石建物のそれにぴったりと一致し、南側柱列が礎石建物中心から 6 柱間分離れた位置にあること。北側柱列については一部を検出しただけで不確定な要素もあるが、南の建物 S B 180南側柱列と等距離にある可能性が高いことが指摘され、また、S B 180の北側柱列は基壇化粧外斜面の上端に接して立てられ、S B 280の南側柱列とは対称の位置に無いが、これは基壇化粧底面が西北隅で北へのび、西折する位置から外斜面が立ち上がったとすると、S B 280の南側柱列もその箇所では外斜面上端に接する位置にあり統一的な設計がなされているとみているのである。しかし、報告では調査によって得られた資料が南北方向に限定されていることに加えて、南の S B 180の桁行柱間は礎石建物のそれと微妙にずれるうえに、柱抜取穴から復原される建物方位は北で西へ 1°20' 傾いていることから、東西方向を含めた全体の設計については検討を保留している。

ところが今回検出した S B 3440の南側柱列の柱穴底には方形石が据えられ、それから復原される柱位置は、抜取穴から復原される柱位置よりも厳密であるから、これを基に検討すると、S B 3440の南側柱列は礎石建物と同じ方位で計測した S B 180の南側柱列にぴったり一致し、南側柱列は礎石建物の中心から S B 280の北側柱列までと等距離の位置にあるうえに、S B 3440の東側柱列についても等距離にあることが判明した。なお、S B 180の建物方位を礎石建物と同じとした場合、S B 180の桁行柱間は礎石建物のそれより幾分広く復原されるが、それは S B 180の梁行柱間が広いこととともに S B 180が遺跡の南正面にあって他の建物とは異なる機能をもつことを示すと想定されよう。

ところで、柱間寸法2.737mはそれ自体が隋尺とされる0.274mの10尺に近い数値であり、9尺とすれば単位尺0.3041m、7.5尺とすれば単位尺0.3645mが得られる。(これを唐尺、高麗尺とし、いずれがより完数に近い数値を得るかの議論は、3者がそれぞれ10:9:7.5の関係にあり、寸や分の単位までを容認した場合いすれでも成り立ちうるからここでは問わない。) いま試みに、柱間を9尺(単位尺0.3041m)として図(Fig.62)に示した。結果、中心からS B 280南側柱列までが6単位54尺、S B 180南側柱・S B 280北側柱・S B 3440東側柱など外側の柱列では67尺(7単位+4尺)、掘込地業の南縁・東縁は75尺の位置にあり、礎石建物の基壇幅は8単位+2尺の74尺、基壇化粧溝底面幅(1.8m)は6尺、外斜面幅は5尺となる。

この数値に基づいて、今回検出した柱穴から復原される建物S B 3440の柱間約1.9mを換算すると、南北、東西とも6.5尺となるが、東端からS B 240西妻柱までは23尺であって6.5尺等間では割り付けられない。いっぽう、北の建物S B 280の桁行柱間を9尺等間とすると中心から6単位目で想定される東側柱列まで残り13尺となる。この残り13尺は今回検出した柱間6.5尺の2間分にあたり、同様に、南北方向についてもS B 280の架行柱間を13尺とし、その南に梁行13尺、桁行9尺等間の南北棟建物を想定すると、ちょうど外観が一辺134尺の正方形の区画が復原され、その四隅には2間四方の総柱建物を配置することができる。

この復原が妥当であるとすれば、西辺の南北棟と石組溝状をなす基壇化粧の貼石造構の西排水路との関係は、底石の中央に柱が建ち、排水路が床下をくぐる構造と考えられる。また、第1次調査の西拡張区の所見では、西側は深くまで後世の飛鳥川の氾濫でえぐられているとされるが、そこでは、氾濫原の中に3個の花崗岩を確認している。このうち西側の2個は明らかに氾濫の砂屑中にあるが、東側で確認した花崗岩は氾濫の底にあり、この位置が想定される南北棟建物の柱筋に正しくのことからすれば、この石はS B 3440のように柱穴の底に据えた石がからうじて元の位置を保っていたものとみることができ、遺跡の西側についても再調査によって痕跡が確認される可能性が残されているといえよう。

また、桁行柱筋が礎石建物とあわない東西10間のS B 180については、両庇の間8尺、中央間9.25尺等間とみ、隅の総柱建物との間を東は10尺、西は8尺に復原すれば、検出した柱抜取穴の位置と一致する。隅の総柱建物との間が東で広いのは通路と見ることもできる。

いずれにせよ、今回検出したS B 3440は区画の東南隅に位置し、上述の復原からすれば2間四方の総柱建物で南北棟建物の南に位置する角楼状の建物を考えることができる。掘込地業がこれらの建物の外側8尺の位置から内側について行われているから、区画全体で一つの建物を構成する様な完結性に富んだ配置をもつとの想定は蓋然性が高く、遺跡の外観は正方形で、その四隅に一段高い角楼が突き出し、中央部からは更に高い樓閣状の礎石建物が顔を出していたとみられよう。

時期区分について これまでの水落遺跡では礎石建物の時期をA期、その廃絶後の遺構をB期

とし、B期を重複関係からB-1期、B-2期に細分している。いっぽう、石神遺跡の遺構はA期（齐明朝）、B期（天武朝）、C期（藤原宮期）、D期（奈良時代）に大別され、A期はさらに、東区画の井戸S E 800から延びる暗渠の付け替えや建物の重複関係、造営方位を根拠に細分されるが、この大別と細分は各調査毎に微妙に異なり、調査地によってはA期以前の時期が確認されたり、A期を4小期に分けられる場合もあり、頻繁で複雑な造替を繰り返していると理解されている。石神遺跡の時期区分と水落遺跡のそれとの具体的な対応関係については、水落遺跡の中央を巡って北へ延びる木樋暗渠と石敷、建物の関係から、水落遺跡のA期が石神遺跡のA-3期（第12次調査のAd期）に対応すること、埋土の類似から水落遺跡B-2期が石神遺跡B期に相当するとされる。しかし、そもそも大垣で隔てられた石神遺跡と水落遺跡が常に同時に造替されるか否かも疑問のあるところで、個々の遺構を対応させることは難しい。ここでは、今回の遺構の理解に必要な部分に限って、遺構の方位を手がかりとした若干の検討によって現時点での理解を示し、将来の詳細な検討に備えたい。

A期の遺構の造営方位が北接する石神遺跡のA-3期の西の区画と一致することは、重複関係からした対応関係と矛盾しない。ところが、石神遺跡と水落遺跡を分ける大垣S A 600と石神遺跡の東の区画が北で東に40°程傾く方位をもつてて、西の区画はほぼ真北か西へ40°傾く方位をもっている。すなわち、同じA-3期の遺構といえども同じ方位ないのである。この東と西の区画の関係については、第7次調査では西の区画が東の区画よりも新しく造営された形跡のあることが報告されており、西の区画はA-3期の新しい段階につけ加えられたことが考えられ、方位の違いはその際に生じたとみることができる。であれば、西区画の建物方位と一致する水落遺跡A期の造営は、石神遺跡のA-3期の新しい段階とみられ、掘込地業で壊された南北石組溝S D 3400については石神遺跡のA-1期からA-3期の古い段階の遺構であることになる。南北石組溝の造営方位を検討すると、それは石神遺跡の南限の大垣S A 600の東半とその南の東西棟建物S B 530、東区画の南にある井戸S E 800を挟む2棟の掘立柱建物などA-1期にはじまる遺構と同じく、北で東へ約40°傾く方位であり、南北石組溝S D 3400は石神遺跡のA-1期に属し、大垣で隔てられた石神遺跡の南にはそれらとともに造営された遺構が存在すると考えておきたい。なお、水落遺跡の南限と考えた東西堀S A 295についても同様の方位に復原することができる。

西へ約1°20'傾く石列S X 3390の方位は石神遺跡では見あらないが、この方位は飛鳥寺寺域西大垣の方位に近く、その点からは飛鳥寺創建時以来の遺構である可能性をもつことになる。しかし、飛鳥寺西門前の南北石組溝S D 6685のように、7世紀後半の溝が寺域外郭線に規制されて西大垣と同じ方位につくられる例もあり、方位は造営時期の決定要素とはなり得ないことも明白である。それらは遺跡全体の変遷過程の中で理解すべきで、今回の石敷の方位は、飛鳥寺西に想定される石敷広場の一郭を占めるとする理解には意味があろう。

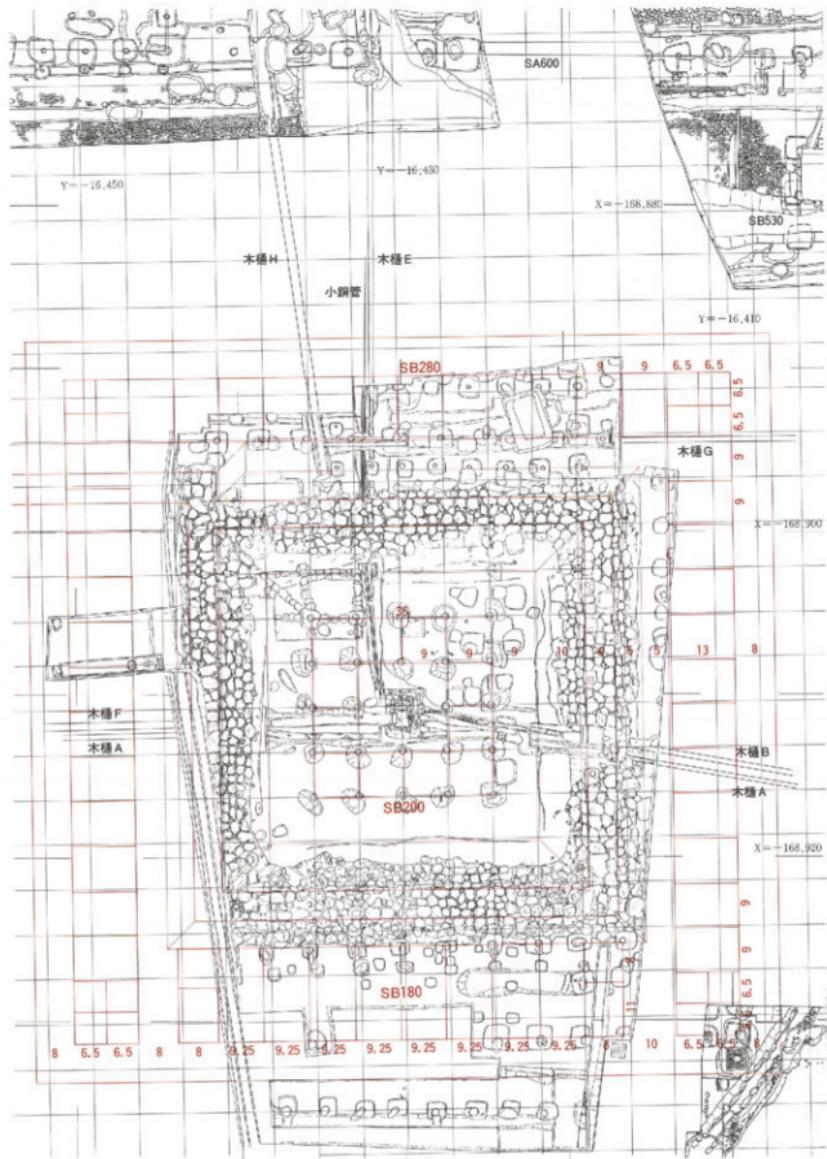


Fig.62 水落道跡遺構配置復原図 (1/300 細線は2.737m方眼、赤数字は1尺=0.3041mとした値)

水路網 斜行石組溝 S D 3410は前述のように掘込地業と重複関係にあるものの、その造営と一緒に造構と考えられる。石組溝は当時の石敷面などから復原される旧地表面の等高線の方向にそって東北にのびるが、石神遺跡第3次調査区では検出されず、第1次調査の S D 330はA-1期の溝で規模も異なることからこれにつながることはない。であれば斜行石組溝は礎石建物の中心部に延びる2本の木樋（木樋A・B）と掘立柱建物 S B 280の南側柱に沿う木樋Gの水源である可能性がある。いま、石組溝の底面の高さ（海拔100.60m）を東北に延長し、木樋A・B・Gの東延長線との交点でそれぞれの底の高さを比べると、いずれもほぼ同高にあり水位の上からはそれらの導水路として矛盾はない。また、3本の木樋の断面は幅、高さとともに25cm未溝であり、木樋の断面積の総和は石組溝が満水であれば石組溝の断面積より小さく、この石組溝一本で充分供給できる。ただし、その接続と供給時の調整にはなお特別の構造、装置が必要であると思われ、そこには池などの貯水施設の存在が想定されよう。

なお、いま一本新たに発見された木樋暗渠 S D 3370については、そのまま西へ延長すると掘込地業の西南隅の南をかすめる位置を通る。礎石建物の中心部へのびる2本の木樋の南約30mの位置を並走するが、この方向が地形的要因による一致である可能性もあり、時期、機能、他の木樋との関係などは、飛鳥地域全体におよぶ複雑な水路網の中で検討する必要がある。

遺跡の南限と飛鳥寺西方との関係 調査当初、本調査区内には第6次調査で検出した掘立柱塀 S A 295とそれを壊したB期の東西溝 S D 260が延びていると想定した。このS A 295は南を調査していないことから建物の北側柱である可能性があるものの、掘込地業南縁に近接する位置にあることから遺跡の南限と考えられた塀である。しかし、今回の調査では両者とも検出されず、遺跡東限の施設もみえない。したがって、塀 S A 295は正方形区画を取り囲むように配置された遺跡の南限塀とは考えられず、先述のように塀は南北石組溝とともに石神遺跡のA-1期に属する遺構である可能性がある。

今回の調査区を含めて、遺跡周辺のA期の遺構は、石神遺跡の南限の大垣に近接する東西棟建物 S B 530のほかは、調査区の東方約50mの大粒の石敷（石神遺跡南方の調査、『概報13』）をはじめ、飛鳥寺の西大垣の西約7mの南北石組大溝、その西の南北に延びる小石敷、大垣の西約55mの西側が一段低くなった南北方向の石列（飛鳥寺周辺B調査地、『概報11』）など、南北方向の石敷・石組溝ばかりが確認されている。すなわち、それらが北へ延びた場合、想定される水落遺跡の正方形区画の東端から飛鳥寺の西大垣までの間約78mの大半は石敷で構成され、水落遺跡は石敷の空間に突き出したように位置するのである。完結性に富んだ配置を特徴とする遺跡はそれ自体として区画されたものとも理解されるから、その外をさらに塀などの外郭施設で区画されたかどうかについては意見のわかれることもある。水落遺跡の外郭施設についての結論は、今後の調査の進展に委ねたい。

2 山田道第7次調査

(1994年4月～5月)

本調査は、県道権原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事の一環として、小公園「ポケットパーク」が設置されることとなり、その事前調査として行ったものである。今回の調査地は雷丘から東方に約300mの県道（推定山田道）に南接する水田で、山田道第1次調査IV区の南10mの位置にある。また当地は藤原宮東四坊大路（推定中ッ道）に東接し、所謂大藤原京を想定した場合には左京十二条五坊西南坪にあたる場所である。

県道拡幅工事に伴う調査は1988年度以来続けられている。山田道に関しては既に6次に及び、また昨年度からは雷丘東方でも調査が行われている。そのうち第1次調査では、今回の調査区以東で6世紀末～7世紀前半にかけての数期にわたる掘立柱建物群を検出しており、それらが山田道推定地に及ぶことから山田道の所在についての疑問が提起された（『概報20』）。しかし第2・3次調査では山田道とは断定できないものの、7世紀末～8世紀前半におよぶ東西溝 S D 2540とこれを北側溝とする道路 S F 2607を検出している。また出土遺物から奈良時代の小治田宮が周辺に存在していた可能性も指摘された（『概報21』）。第5次調査ではこの東西溝 S D 2540が雷丘裾部まで達している（S D 2800）ことが確認されている（『概報23』）。しかし第6次調査では今回同様に県道の南側を調査したが、東西溝 S D 2540に対応する道路 S F 2607の南側溝ほか、山田道に関連する遺構は確認されなかった（『概報24』）。雷丘東方で行われた藤原宮第71・9・14次調査では、小墾田宮との関連を指摘された7世紀前半の遺構や7世紀後半から奈良時代におよぶ建物群が山田道推定地を越えて確認されたことから、山田道が従来の想定位置にあったのか再度疑問視されるようになった（『概報24』）。

山田道第1～6次までの調査が南北幅が狭い東西方向の発掘区であったのに対して、今回は南北15.5m、東西16.5mの調査区を設定することができた。したがって S D 2540・2800に対応する道路 S F 2607の南側溝が調査区内を通ることが十分予想された。本調査では山田道関連遺構



Fig. 63 山田道第7次調査位置図 (1 : 5000)

の検出を主な目的とし、あわせて上記のような調査所見を踏まえ、おもに7世紀以降の当地における土地利用状況の把握につとめた。調査面積は255m²である。

遺構

基本層序は上から耕土・床上・明黄灰色粘質土・茶灰色粘質土・赤褐色土・褐色砂・炭混灰色粘質土・暗灰色粘土（弥生時代包含層）・黄灰色粘質土（地山）である。調査区の西北隅は他の場所よりも地山が高い。検出した遺構は、赤褐色土から掘り込むもの（上層）と炭混灰色粘質土から掘り込む遺構（下層）の大きく2者がある。遺構検出はそれぞれ赤褐色土、炭混灰色粘質土上面で行った。

上層遺構 上層は建物3棟、塀4条、溝4条のほかに井戸、土坑等がある。遺構は重複関係、方位、出土遺物等から少なくともA～Cの3時期に区分できる。

A期 A期は北で西に約4°振れる遺構である。主な遺構は建物S B3292、塀S A3293・3294、溝S D3295・3296がある。

S B3292は調査区南端で検出した東西3間の東西棟である。北側柱筋のみを検出した。柱間寸法は2.0m等間である。柱穴には黄色の山土が混入する。

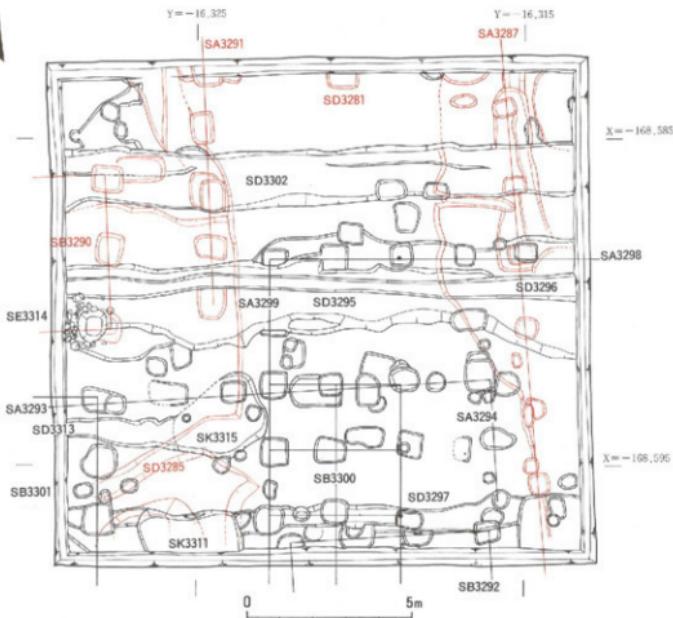


Fig.64 山田道第7次調査遺構図 (1 : 150)

S A 3293は建物 S B 3292の北に4.6m隔ててある東西塀である。6間分を検出したが、さらに西に延びると思われる。柱間寸法は1.9m等間である。

S A 3294は塀 S A 3293の東端で南に折れる南北塀である。2間分を検出した。2間目の柱穴が建物 S B 3292の東北隅の柱穴と近接していることから、この塀は2間以上延びないと思われる。柱間寸法は1.9m等間である。

S D 3295は塀 S A 3293の北の東西溝である。幅約2.6m、深さ0.5mで、やや蛇行する。埋土中には飛鳥IIIまでの土器を含む。この溝の下層北よりに幅0.5m、深さ0.3mの溝 S D 3296がある。溝の両脇はほぼ垂直に立ち上がる。両溝の性格的な関係は不明である。

B期 B期はA期の遺構を切り、また次のC期の遺構に切られる遺構である。主な遺構は溝 S D 3297がある。

S D 3297はA期の建物 S B 3292の北側柱筋と重複する溝であり、明らかに建物より新しい。幅0.7m、深さ0.3mである。

C期 C期はB期の溝を切り、ほぼ方眼方位にのる遺構群である。主な遺構は建物 S B 3300・3301、塀 S A 3298・3299、溝 S D 3302、井戸 S E 3314、土坑 S K 3315などがある。

S B 3300は調査区南方で検出した総柱の建物である。東西2間、南北2間を検出したが、さらに南に延びる南北棟であろうと思われる。最も南側の柱筋がB期の溝 S D 3297と重複し、溝を切る。柱間寸法は2.0m等間である。1本柱根が残る。

S B 3301は建物 S B 3300の西の建物である。東側の柱筋2間分のみを検出した。柱間寸法は1.9mであるが、建物全体の規模は不明。溝 S D 3297と重複し、溝を切る。

S A 3298は建物 S B 3300の北に4m隔ててある東西塀である。4間分を検出したが、さらに東に延びると思われる。柱間寸法は2.0m等間である。最も東の柱穴が下層の塀 S A 3287と重複し、塀 S A 3287より新しい。1本柱根が残る。

S A 3299は塀 S A 3298の西端から南に折れ、建物 S B 3300の西北隅にとりつく南北塀である。柱間は2間で、2.0m等間である。

S D 3302は塀 S A 3298の北の東西溝である。幅1.4m、深さ0.45mである。下層の建物 S B 3290、塀 S A 3291と重複し、両者を切る。堆積土内から飛鳥IVまでの土器が出土した。

S E 3314は建物 S B 3301の北の井戸である。下方が素掘りで上部を石で閉う。素掘りの部分では直径約1m、深さ0.5mである。堆積土を分析したが、トイレ遺構である可能性は低い。下層の建物 S B 3290、溝 S D 3295と重複し、両者を切る。



Fig. 65 土器埋納土坑 S K3315

S K 3315はS B 3300の西の土器埋納土坑である。溝S D 3313と重複するが、中・近世の耕作溝により重複部分を削平されていたために切合い関係は不明。土坑内に飛鳥IVの時期の土師器の甕が直立した状態で埋設されていた。内部からは土師器皿1点が落下した状態で発見されている。

下層遺構 下層の遺構は炭混灰色粘質土から掘り込むものである。検出した主な遺構は南北大溝S D 3281、南北塀S A 3287・3291、建物S B 3290である。

S D 3281は発掘区の中心を南北に走る幅6m以上、深さ0.7m以上の南北大溝である。堆積土は粗い砂や粘土の互層であり、水量が豊富であったことがうかがえる。弥生時代中期から飛鳥Iまでの土器が出土した。

S A 3287はS D 3281の東の塀である。一部S D 3281と重複し、S D 3281の堆積土を切る。また上層の塀S A 3298に切られる。5間分を検出したが、さらに南北に延びていたと思われる。柱間寸法は2.35m等間で、北で西に約5°振れる。埋土には黄色の山土が入る。

S A 3291は南北大溝S D 3281の西の南北塀である。4間分を検出した。柱間寸法は1.8m等間で、北で西にわずかに振れる。柱穴がS D 3281と上層のS D 3296と重複し、S D 3281の堆積土を切り、S D 3296に切られる。

S B 3290は南北塀S A 3291の西の建物である。東の柱筋2間を検出した。柱間寸法は2.4m等間である。おそらく東西棟であろう。S A 3291と同じく北で西にやや振れる。

遺物

遺物としては土器・瓦・木製品が出土した。

土器には弥生土器、須恵器、土師器の他に韓式土器、東国系内黒土師器が1点ずつある。瓦は飛鳥寺同汎の垂木先瓦小片1点である。木製品では南北大溝S D 3281から鍬と下駄の一部と思われる製品が出土した。鍬は柄と鍬身とが装着したままの状態で出土した。鍬身はいわゆるナスピ形の叉鍬で、柄は反柄である。

まとめ

まず各期の時期について簡単に述べ、当地における土地利用の変遷を記す。

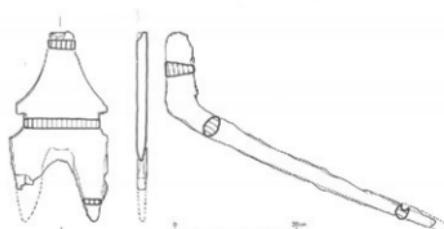


Fig. 66 S D 3281出土鍬 (1 : 8)



Fig. 67 鍬出土状況

下層の南北大溝 S D 3281から出土した最も新しい土器は飛鳥Ⅰの段階のものであり、大溝の下限を7世紀初頭とすることができる。この溝が埋まった段階で南北塙 S A 3287や建物 S B 3290・南北塙 S A 3291が建てられる。南北塙 S A 3287と建物 S B 3290・南北塙 S A 3291とは、振れの違いから時期差が読み取れるが、両者の前後関係は不明である。その後7世紀中頃にこの付近を褐色の微砂が覆う。この褐色砂は人工的な整地層ではなく、自然堆積によるものと思われる。7世紀後半に入り、その上を赤褐色上で整地して、A期（飛鳥Ⅲ）から下限を飛鳥Ⅳの時期とするC期まで当地を生活空間として利用する。藤原宮期には当地は利用されない。

以下今回の調査成果を簡単にまとめておく。

① 南北大溝 S D 3281が埋まった7世紀初頭以降、7世紀後半までの間に当地は宅地化される。最低4回の建物の建替え、およびそれに伴って溝の付け替えなどが行われたことが復原できる。周辺の調査成果ともあわせ、これら7世紀代の遺構の性格を積極的に検討する必要があろう。なお当地に於て藤原宮期以降の遺構・遺物を検出できなかったことは、藤原京、および大藤原京の範囲等を検討する上で重要である。

② 近年雷丘東方に所在した可能性が指摘されている奈良時代の小治田宮関連の遺構は、今回の調査地からは検出できなかった。また当地以東を調査した第1次調査でも大土坑 S K 2335以外同期の遺構は確認されていない。小治田宮が雷丘東方に所在していたとしても宮域は当調査地までは及んでいない可能性が高い。

③ 今回検出した東西溝 S D 3295、S D 3302から出土した最も新しい遺物は7世紀後半のものであり、両者の溝はこの時期には埋まったと考えられる。したがって7世紀末～8世紀前半の土器を含む S D 2540、S D 2800とは対応しない。つまり藤原宮の時期には存在していたと考えられる山田道の側溝とは考え難い。今回の調査結果からも、山田道は当初の推定線上には存在しない可能性が高くなつた。ただしそれよりも古い道路の南側溝であった可能性もあり、両溝に伴う建物が溝よりも南で検出されているという事実とも合わせ今後検討していく必要がある。

④ 土器埋納土坑 S K 3315出土の土師器壺は明らかに人為的に埋設されたものである。壺内にあるものを埋納した後に皿で蓋をして埋められたことが容易に復原できるが、内部から皿以外の遺物は発見されておらず、性格を把握するには至らない。近年同様の遺構が大阪を中心にくつか検出されており、今後その機能を明らかにしていく必要がある。

⑤ 遺物では、ナスピ形の叉鍬と反柄とのセット関係を明らかにすることができた。今まで両者が一対である可能性は指摘されてはいたが、実際に装着状態で出土した例はなかった。農具の変遷等を考えていく上で重要な資料であろう。ただし鍬が出土した S D 3281の堆積上中には、弥生時代中期から7世紀初頭までの遺物が含まれており、其伴遺物から鍬の年代を決めるこことは難しい。

3 甘樅丘東麓の調査

A 第71-12次調査

(1994年1月)

本調査は国営公園整備の一環として、東の麓から頂上に登る一般登山者向けの登山道を設置する計画があり、これに伴う事前調査として実施した。調査区は登山道の予定地に沿って、頂上付近から登り口まで、1区から8区までの8箇所に設定した。8調査区の合計面積は73m²である。各調査区の位置、形状は下図の通りである。

いずれの発掘区も層序は基本的には同じで、表面の腐食土の下に、黄灰色土、暗緑色土がある。その堆積層の厚さにはばらつきがあるが、各発掘区ともに顕著な造構および遺物は見出されなかった。

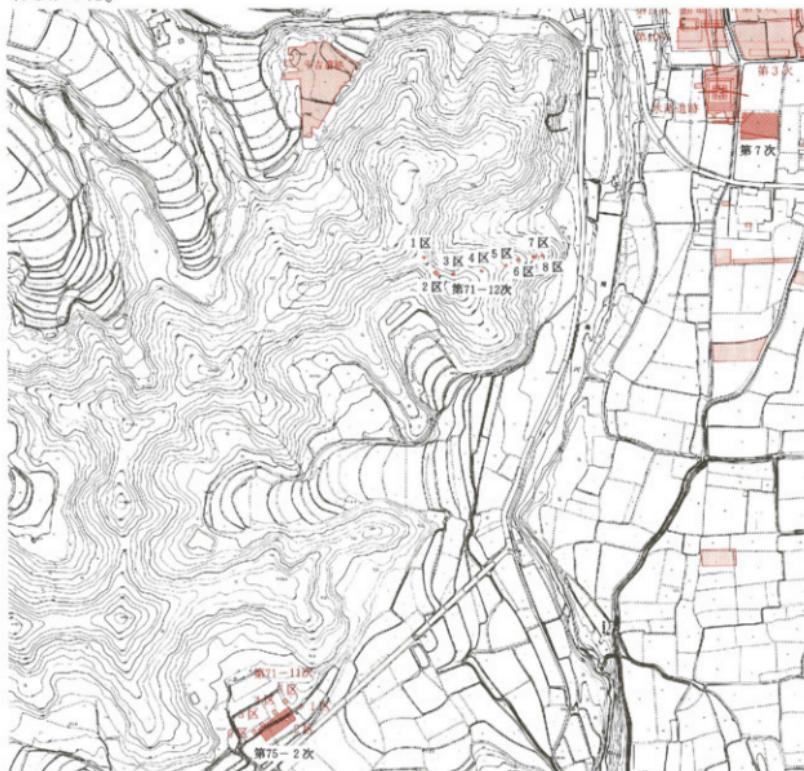


Fig.68 第71-12・75-2次調査位置図 (1 : 4000)

B 第75-2次調査

(1994年5月～6月)

本調査は、飛鳥国営公園整備事業の一環として、甘櫻丘東麓に一般登山者向けの駐車場建設計画があり、その事前調査として実施したものである。調査地は奈良県高市郡明日香村大字川原字極楽寺に所在する。

前年度、1993年12月に試掘調査をおこない(第71-11次調査『概報24』)、その成果をうけて、今年度本調査を実施した。6箇所の小規模な試掘調査の結果、旧地形と埋没谷のおおよその状況を把握し、谷の中央部に相当する箇所に6世紀末から9世紀初頭ごろまでの遺物を含む包含層が形成されていること、また試掘坑2区において遺構の存在する可能性が指摘された。このため、本調査では、谷の中央部分を中心に、南北両岸がかかり谷筋に対して直交するように、南北30m、東西12mの調査区を設定した。5月9日に機械掘削を始め、6月30日に現地調査を終了した。調査面積は約360m²である。

甘櫻丘は、海拔145.6m、比高差50mの花崗岩の残丘であり、その直下を飛鳥川が丘の東麓に沿って北西へと流れる。調査地は、この丘の東南麓に刻まれた小支谷のうちのひとつで、その谷の出口にあたる。調査区西方の谷頭部分は緩やかな平坦地になっており、柑橘樹林として利用されている。調査地は、果樹林以前の棚田の形状をいかして壠塙状に造成されており、そのため調査区の西辺と東辺では地表面で約1.6mの比高差がある。谷口にあたる調査地からの視界は東北方向に開け、約500m先に飛鳥寺を望むことができる(Fig.60)。

調査区内の基本層序は、上層から表土、柑橘樹林造成時の客土、耕作土となり、調査区の南北両隅では地表下1.4mほどで、地山である黄褐色の風化の進んだ岩盤に達する。さらに、一段低くなった調査区の東半および谷の中央部では、平安時代から鎌倉時代までの遺物を含む灰褐色砂質土が厚く堆積する。この灰褐色砂質土の下の整地層上面において、7世紀後葉の遺構を検出した。

遺構および遺物包含層

今回の調査で検出した遺構および遺物包含層は、切り土埋立て整地層2面、土石流による埋没層1面、焼土層1面、石組溝1条、素掘り溝、土坑などである。これらの時期は大きく、平安時代から鎌倉時代、7世紀後葉、7世紀中葉の3時期に分れる。

平安時代から鎌倉時代 遺物包含層である灰褐色砂質土層、および多数の素掘り溝、小土坑がある。これらの包含層・遺構からは、土師器、須恵器、瓦などのほかに黑色土器、瓦器、灰釉陶器などが出土した。

7世紀後葉 土石流によると考えられる埋没層を間に挟み、前後2時期にわたる切り土埋立て整地層とこの整地層にともなう溝がある。下層の切り土埋立て整地層S×030は、丘の岩盤を切り崩した黄褐色粘質土による埋立て整地層で、調査区のほぼ全面にわたり谷の中央部分を埋

立っている。この整地層の上面では2条の溝を検出した。SD 032は、調査区のほぼ中央で検出した東西溝である。長さ約9m分を検出した。幅1.5~2m、深さ30~40cm。抜き取りの痕跡などは確認されなかったが、北岸で塊石が遺存している箇所があり、SD 033と同様に石組溝であった可能性も考えられる。埋土からは飛鳥IVの段階の土器が多量に出土した。このなかには

漆の付着した須恵器の壺が数点含まれる。SD 033は、上層の埋立て整地層SX 031の下で確認した石組溝で、調査区の東壁に一部かかっていたことから、その周囲に断ち割り調査をおこない検出した。SD 032にはほぼ平行する東西溝で、幅0.8~1m、側石3石分約1.4mを検出した。側石、底石ともに長さ40~60cmの塊石を用いており、側石は内側に面を揃えている。これより上流の部分は土石流SX 036により破壊されたものと考えられる。

整地層SX 030およびこれにともなう遺構をおおい、かつ破壊する状況で土石流によると思われる埋没層SX 036がある。調査区西辺中央から、東隅にかけて幅約7.5mで東流する。埋土はグライ化した青灰色粘土を主体とし、多量の粗粒砂を含む。地下水の影響を受け

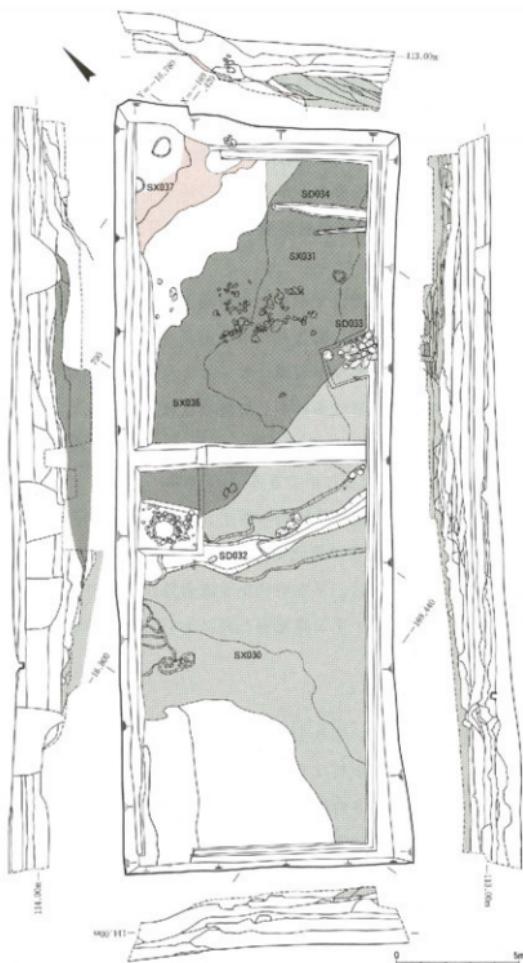


Fig. 69 第75-2次調査遺構図 (1 : 200)

ているため含水率がきわめて高く、非常にしまりがわるい。層中には、長さ40~60cm程の塊石や多量の土器、木材などを含む。切り土立て整地層SX031は、調査区北東部において認められた埋立て整地層で、東壁・北壁および断ち割り調査による層位的な確認によれば(Fig.70)、土石流SX036による谷の埋没後、その下流部分に対して、SX030同様に地山を切り上して埋立て、整地をおこなっている。

黄褐色粘質土を主体とし、厚さ20~40cmの互層状をな

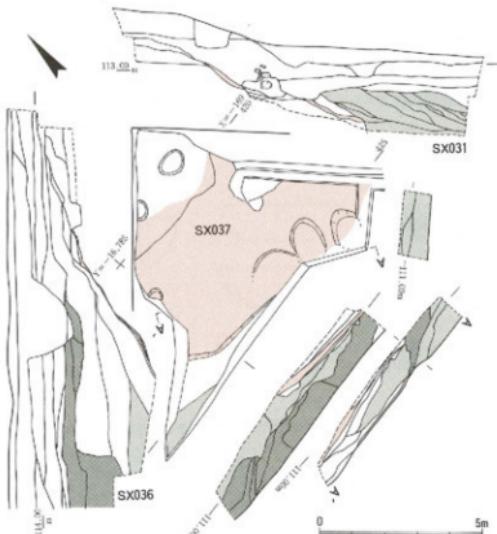


Fig.70 第75-2次調査 調査区北隅断面図 (1:150)

す。SD034は、調査区北半でSX031の上面において検出した東西溝である。長さ約4m分を検出した。埋土中からは、飛鳥IV・Vの段階の土器が多量に出土している。

7世紀中葉 排水溝掘削の過程で、北壁および西壁の地山上面に焼土層の存在が認められたため、その性格と広がりを確認する目的で、調査区北隅にかかる谷壁斜面部分について、さらに周辺部を拡張し、埋没層および埋立て整地層の掘り下げをおこなった(Fig.70)。その結果、この焼土層SX037は、地山である岩盤上面に谷壁斜面の全面にわたって、これをおおうように遺存していることを確認した。斜面上では、焼土・焼け壁土・炭化木材・土器片が地山起源の黄褐色を呈する風化土とともに包含層を形成しており、その厚さは2cmから厚いところで20cmに及ぶ。この堆積は現地表下約4mの谷底部にまで達するが、谷底部では土壤がグライ化しており炭化木材に加えて多量の草木灰および土器片を含む青灰色砂質土となる。斜面上の焼土層と青灰色砂質土層間で土器片が接合することから、これらは一連の堆積と考えられる。焼土層中の土器は飛鳥Iの新しい段階に相当する。

遺物

上層の遺物包含層である灰褐色砂質土、SX036、SD032、SD034、SX037を中心に、土師器・須恵器を主体とする多量の土器類、瓦、木製品、石製品、金属製品が出土した。7世紀後葉の遺物の中には、漆や赤色顔料の付着した土器、針描き土器、陶硯(円面硯)、滑石製勾

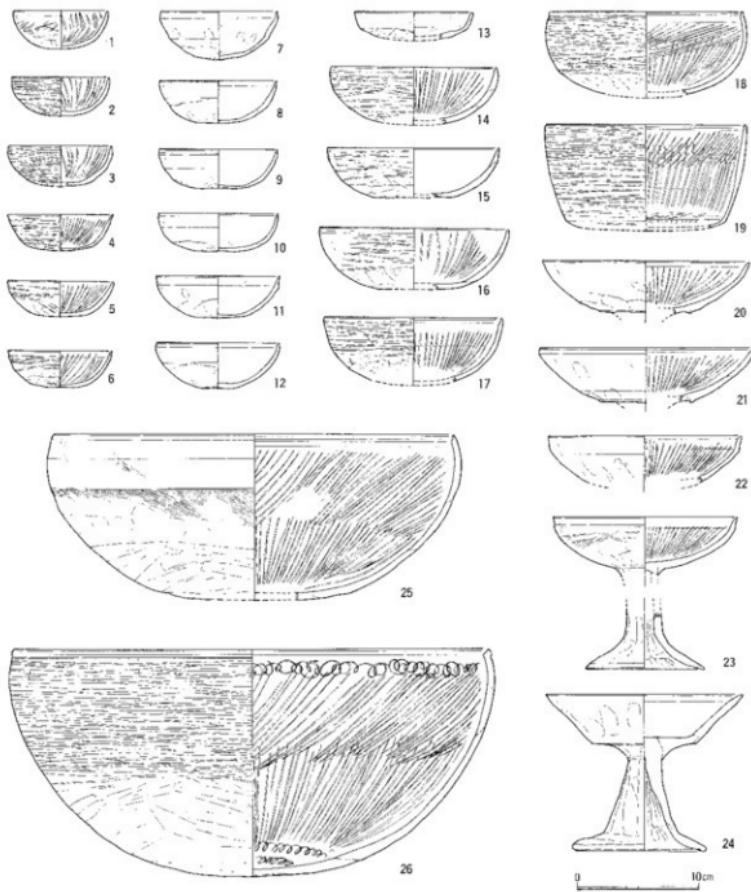


Fig.71 焼土層SX037出土土器実測図（1）土師器（1：4）

玉などがある。7世紀中葉の焼土層SX037からは、包含層を形成する焼土、炭化木材、草木灰に混じって、多量の土師器、須恵器、焼け壁土、焼け焦げた建築部材などが出土した。また、SX036からは、縄文時代の所産と思われる磨製石斧も出土している。

ここでは、焼土層SX037中に含まれていた土師器・須恵器について簡単に紹介する (Fig. 71・72)。ところで、焼土層SX037と切り土埋立て整地層との間には、無造物の花崗岩風化砂層があり、さらにこの砂層の下では、地山起源の褐色土・岩片を含み酸化鉄の沈着により硬化した厚さ4cmほどの橙褐色砂質土層が、焼上層をおおっていた。また、焼土層中の土器は細片

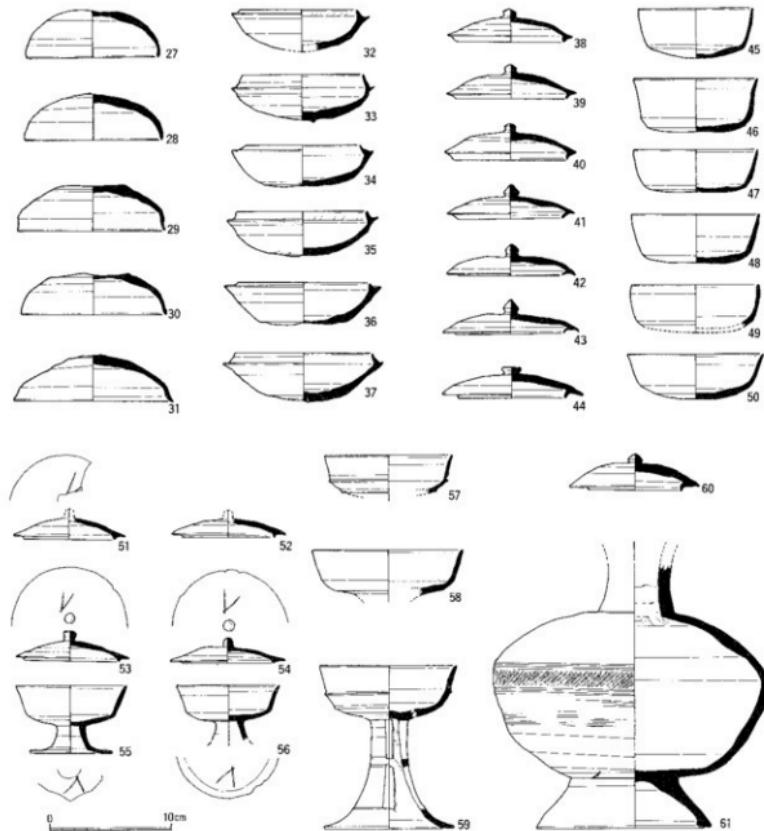


Fig. 72 燃土層S X037出土土器実測図(2)須恵器(1:4)

化したものが多いため接合率が高く、型式学的にも大きな幅がみられない。したがって、焼棄の同時性が認められ、焼土層中の土器群は、良好な一括資料として扱うことができる。

土師器には、杯A(19)・C(1~6, 14~17)・G(7~12)・H(13)、碗(18)、高杯C(20~23)・G(24)、大型鉢(25, 26)、皿、壺などがある。杯類では、杯C・Gが多量にある。杯Cは、外縁を幅2mmほどのミガキで横方向に底部まで磨き込むもので、内面の暗文も同様に工具幅が広く施文方向も不安定であり、従来知られていた杯Cとは、調整技術のうえでややありかたを異にする。径高指数は28~40前後である。杯Gは、口縁部および体部内面にのみ横ナデを施し、外縁下半は無調整のもので、粘土紐の痕跡とともにひび割れ状の皺を残すことから、

成形に型を使用した可能性も考えられる。杯C・Gともに口径7.8cm～8.6cm、9.6cm～10.1cmの小型のものが多量にあり（1～12）、それぞれきわめて高い規格性をもつ。木箱に破片を敷き詰めると前者が2.5箱、後者が3箱となり、Gのほうがひと回り大きいことを考慮する必要があるが、やや多い。これらに対し、口縁が直立し外面下半を削る杯Hは、ごくわずかしかみられない。多量にある小型の供膳形態に比べて甕などの煮沸形態は非常に乏しく、偏りのある器種組成となっている。

須恵器では、杯H（27～37）・G（38～50）、高杯（55～59）、蓋（51～54、60）、長頸壺（61）、提瓶、甕などがある。杯Hは、蓋口径10.8cm～13.1cm、底部外面はヘラカリ未調整のものが多い。杯Hには、東海地方産の可能性のあるものも含まれる（33）。杯Gは、身の口径9.4cm～11.2cmで、底部にはいずれも回転ヘラケズリを加えている。杯G蓋は、つまみの形状によりいくつかのまとまりがみられる。すなわち、頂部が緩やかにまるく付根のすぼまりのあまいもの（38～40）、宝珠形のもの（41～43）、扁平で頂部の痙むもの（44）である。胎土・かえりの形状などの特徴もこれに対応する。杯IIとGとは、ほぼ等量でGのほうがやや多い。低脚の高杯（55、56）とその蓋（51～54）では、蓋の外面、杯部の底部外面に同様の「V」字状のヘラ記号が施されており、両者の組み合わせを知ることができる。長脚の高杯は、二段二方透しである（59）。

これらの土器群は、その特徴から飛鳥Iのなかでも新しい時期の所産と考えられる。この時期の土器群については、すでに、川原寺下層S D 02（『概報』10）→山田寺下層S D 619および整地土（『概報』20）→飛鳥池灰緑色粘砂層（『概報』22）→坂田寺S G 100（『概報』3：飛鳥II）という序列が提示されている。上師器杯Cの径高指数、須恵器杯H・Gの蓋・身の口径をひとつ目の目安としてこの序列に照し合せてみると、山田寺南門前面の整地土下で検出した溝S D 619および整地土出土の土器群にちかく、飛鳥池灰緑色粘砂層出土土器よりもやや古いという位置づけをあたえることができる。山田寺の整地の時期については、『上宮聖徳法王帝説裏書』に641年（舒明13年）と伝えられており、この記述に従えば、本土器群の年代も7世紀第二四半期末頃に求めることが可能であろう。

ところで、土師器では、器種・法量の違いをこえて、胎土・器形・製作技術の特徴を共有するいくつかのまとまりに分けることができる。すなわち、①：杯C（1～6、14～16）、②：杯A（19）、杯C（17）、碗（18）、高杯C（20、21）、大型鉢（26）、③：杯G（7～12）、高杯C（22、23）、大型鉢（25）、④：杯H（13）などである。杯C・G・Hの構成比に着目すると、本土器群では、C・Gが多量にありHはわずかである。これに対して飛鳥池では、杯C・Hに比べてGの少ないことが報告されており、両者は対照的なありかたをみせる。同様に、他の遺跡で知られているような杯IIと同系の技術による高杯・鉢なども、この遺跡ではみられない。ごく狭い地域のなかにおいて、このような複数の技術基盤による上器群がみられ、遺跡によつてその構成比に相違のあることについては、遺跡差・時間差・または遺構（資料）の性格の進

いなど様々な要因が考えられる。同時期の資料について比較検討をすすめ実態の把握に努める必要があろう。さらに、個々の器種のなかにあっても、杯Cにみられた調整手法の差異や、口唇部形態の特徴などにもとづいた細分が可能であり（例えば、杯Gは、（7）、（8、11、12）、（9、10）といった細分ができる。杯Gの細分については、『藤原京石京七条一坊西南坪発掘調査報告』において試みられている）、ひとつひとつの製作単位のありかたを知るうえでの手がかりとなろう。

まとめ

① 甘樅丘に対する本格的な発掘調査は、1977年に実施した西北麓の平吉遺跡の調査に次いで2回目であり（Fig.68・『概報8』）、東南麓においても7世紀代を中心とする土地利用の状況の一端が明らかになった。

② 7世紀後葉から藤原宮期にかけての時期に、2度にわたり丘を切り上して、大規模な埋立て作業をおこなっていることが判明した。この埋立てによって、旧地形が改変をうけ、S X 036にみられるように、本来西→東方向の谷筋であったものから、現在のように東南方向に開口するように変化したものと推定される。このことは、下層の埋立て整地層S X 030にともなうS D 032およびS D 033の方向と、上層の埋立て整地層S X 031にともなうS D 034の方向の進いにも反映されている。また、多量の遺物のありかたから、調査区西方の平坦地、もしくは南・北方の尾根の付近に何らかの施設が営まれていたものと推定される。

③ 7世紀中葉の焼土層は、検出状況や包含層の内容、また土師器の中には二次的な加熱をうけて灰白色に変色したものも見られることなどから推定して、調査区北方の尾根上に存在した建物の焼失に伴う灰塵の投棄、もしくは流れ込みにより形成されたものと考えられる。上面は、自然堆積層により完全におおわれているため、これらの遺物は单一時期の所産であり、土器研究の面からも良好な資料といえる。

④ 7世紀代の甘樅丘についての史料は乏しく、その状況を窺い知ることは難しいが、『日本書紀』には、皇極3年（644年）、「冬十一月に、蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を甘樅岡に斐べ起つ。大臣の家を呼びて、上の宮門と曰ふ。入鹿が家をば、谷の宮門と曰ふ。男女を呼びて王子と曰ふ。家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を作る。」との記載がある。さらに、翌皇極4年（645年）の“乙巳の変”に際しては、「蘇我蝦夷等、誅されむとして、悉に天皇記・国記・珍寶を焼く。」とする。今回の調査では、これらの記述と対応する遺構などの直接的な資料は出土していないが、焼土層S X 037のありかた、および土器の年代観は、『日本書紀』の記述と重ね合わせて考えることのできる材料を提示することとなった。

4 川原寺の調査

A 川原寺1993-2次調査

(1993年12月～1994年2月)

本調査は、史跡川原寺の史跡指定地の南を通る県道多武峰見瀬線の歩道改修と電柱撤去など周辺整備工事による現状変更に伴う事前調査である。調査地点（Fig.78）と調査面積、そして工事内容は次の通りである。

I 区：南門南方。I-1区：4.2m²、I-2区：2.5m²。（電灯線埋設工事）

II 区：南門・南面大垣。II-1区：33.4m²、II-2区：8m²、II-3区：8 m²。（歩道改修工事）

III 区：寺域南西部。III-1区：6.8m²、III-2区：4.7m²、III-3区：5.3m²。（明日香村公共下水道）

IV 区：南面大垣。10m²。（電灯線埋設工事）

これらの調査によって、川原寺南門と南面大垣について新たな知見をうることができた。

I 区

I-1区では現、地表下1 mで、まばらなバラス敷きを検出した。バラス敷きには少量の瓦片が混じる。

I-2区はI-1区の西、2 mを隔てる。I-1区同様、地表下0.9 mで瓦片を含むまばらなバラス敷きを確認した。バラス敷きの下は花崗岩の岩盤であった。

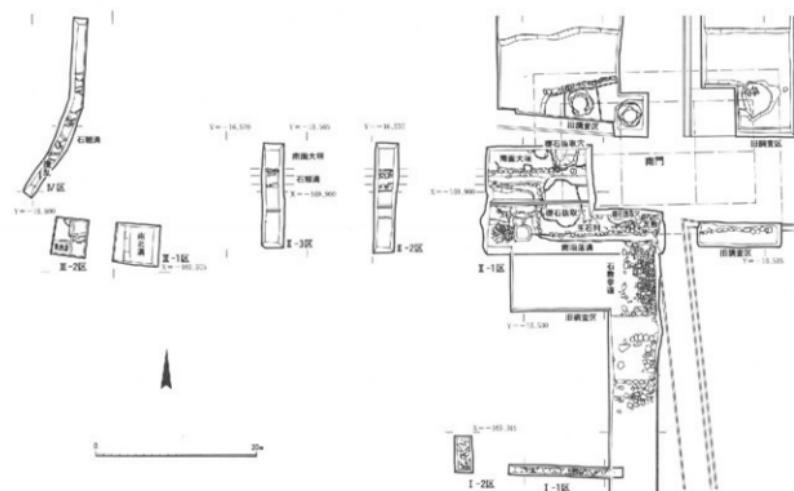


Fig.73 川原寺1993-2次調査査査構図 (1:200)

II区

史跡指定地南辺に隣接する県道北側の歩道上に、南門と南面大垣の確認を目的として3箇所の調査区を設けた。

II-1区 II-1区は南門の確認を目的とする調査区である。川原寺南門については、すでに1925年に内務省による小範囲の調査があり、さらに1957~58年の奈良国立文化財研究所を主体とする調査によって基壇および基壇縁の玉石列と移動した礎石2個、南にのびる石敷きの参道などが確認されている。今回はこれら旧調査区を一部含みながら、南門の西南部について調査を行った。調査の結果、南門の基壇、礎石抜き取り穴、南面落溝、南面大垣と南門から南に延びる参道の一部などを確認した。

調査区の層序は、現道路および旧県道の盛り土(40~50cm)、水田耕土・床土(10~20cm)、茶褐色土層(20cm)、褐色ないし明灰色砂層(10cm)などがあり、その下層で遺構を検出したが、調査区内北半の旧県道部分とその南側の旧水田部分では堆積土の状況にかなり違いがあった。最終的な遺構検出面は調査区東端で現地表面から深さ70cm、西端で深さ95cmであった。

南門 基壇南辺と西辺の玉石列を確認した。基壇南辺の玉石列は1957年の調査ですでに確認されたものを再度発掘した。人頭大程度かそれよりやや大きめの石を並べたもので、並べ方はやや粗雑である。一部ずり落ちかけた石もある。西辺の玉石列も同様だが、なかに塙の断片が混じっている。この塙は一辺36cm(1尺2寸)、厚さ12cm(4寸)ある大型の矩形塙である。西辺の玉石列は北へ約3m延びて西に折れ曲がる。

南門の基壇上では、礎石抜き取り穴3個と瓦敷きを検出した。礎石抜き取り穴は南側柱礎石の西側2個と西妻柱礎石1個である。西南隅の抜き取り穴が直径約3m、ほかは直径約2mある。西妻柱礎石抜き取りは遺構検出面から深さ35cmあり、その底面に花崗岩礎石および根石の表面が付着して残っていた。さらにその下層に礎石据え付け掘形の埋土を認めた。

瓦敷きは基壇の南辺、特に南側柱中央間にあたる部分を中心認められ、基壇南辺の玉石列によくなじんでいる。軒丸瓦713

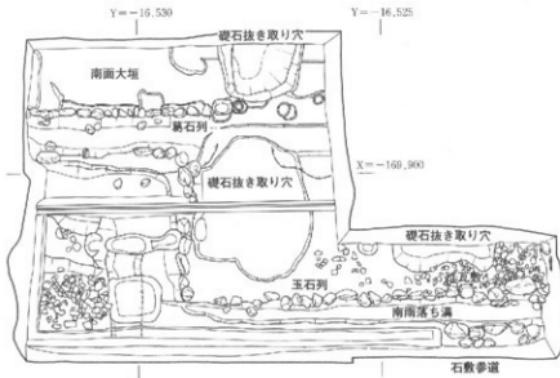


Fig.74 川原寺南門遺構図(II-1区)(1:100)

型式(Fig.75-3; 平安時代後期)をはじめ、奈良・平安時代の瓦を含む。

南門の基壇築成は、基底の花崗岩岩盤をある程度平坦にした上に灰青色砂質土層を厚さ40cmほど盛り、これをベースに基壇を築成する。基壇の掘り込み地業は基壇の全体にはおよばず、棟通り筋に幅2.6m以上の地業をおこなう。この掘り込み地業は岩盤をさらに30cm掘り込む。基壇の南辺では掘り込み地業は部分的で、中央間のあたりは整地土上に直接基壇土を版築し、黄褐色上の基壇土は厚さ5cmほどしか残らない。瓦敷きとこの基壇土との間には黄褐色上混じりの灰色粘土層があるが、これは本来の基壇土ではないであろう。

南門基壇南辺には雨落溝があり、基壇南辺の玉石列が北側石となる。南側は素掘りだが、石敷き参道を横切る部分では南側にも側石を立てる。この側石は大型で、石敷き参道の北縁石を兼ねる。雨落溝は調査区の東端で幅約60cm、深さ25cmある。西端は浅く細くなって途切れる。埋土は3層あり中層には多量の炭粒を含む。瓦、土器のほか金銅製腰鎧が出土した。土器は10世紀前半までの年代である。

基壇西側では鍵の手に折れ曲がる玉石列に沿ってまがる幅1.5mほどの素掘りの溝がある。搅乱が著しいが、上層の灰色砂層、下層の灰色粘土層とともに大量の瓦が堆積していた。

南面大垣 築地塀の南面大垣を検出した。築地本体は削平されていたが、築地葛石列と掘り込み地業を確認した。葛石列は川原石のほかに瓦や壙が混じる。葛石列の東端約0.6mは南門基壇上にくいこんでおり、それに接して一辺40cmほどの柱掘形がある。築地の添柱であろう。この柱掘形の北1.2m、さらにその西1.2mにも直径30cmほどの柱穴がある。これらは南門脇の溝り戸に関連する可能性がある。掘り込み地業は南縁だけを確認した。葛石南辺からさらに1.3m広がり、幅2.7m以上、現状での深さは0.6mである。

石敷き参道 南門の南には石敷きの参道がある。今回は南門南雨落溝の南側石を兼る北縁石とその南側の石敷き1石分を検出したことにとまる。

II-2・3区 II-2区はII-1区西辺から17mを隔て、II-3区はII-2区のさらに17m西にある。ともに南面大垣の確認を目的とした。現地表から0.9~1mで南面大垣築地基底部とその南側に石組みの東西溝を確認した。築地は幅1.3mないし1.6mを確認したが、北辺は調査区外にあるため築地基底部の輪は明らかにできなかった。II-3区では築地の南の縁に沿って平瓦片を10枚ほどならべた瓦列がある。築地掘り込み地業の南縁は、石組み溝をこえてさらに南にある。石組みの東西溝は側石の内法で幅50~60cm、深さ30cm。底石はない。

III区

明日香村公共下水道の縦坑予定地3カ所を調査した。縦坑予定地は、県道多武峯見瀬線の道路面にあり、県道とそれから川原集落へ北進する道路との交差点(III-1・2区)、そしてそれから約50m西(III-3区)で3つの調査区を設定した。

III-1区 道路アスファルト面から1.05mの深さに灰色粘質土層の包含層があり、その下層、

地表から1.2mの深さに淡緑灰色砂質土の整地土層がある。この上面で遺構を検出した。

遺構は南北溝1条である。西の岸のみ検出した。溝は幅1.8m以上、深さ0.5m。少量の瓦や土器、木片が出土した。

III-2区 III-1区の西1.5mを隔てる。層序はIII-1区と同じ。整地土層の上面で遺構を検出した。遺構は東西溝1条などである。この溝は幅0.9m以上、深さ15cmほどで、東ほど削平を受け浅くなる。元来はIII-1区で確認した南北溝と接続していたものと推測される。少量の瓦と土器が出土した。

なお、III-1・2区で確認した整地上層は花崗岩岩盤に直接のっており、ごく少量の瓦を含む。

III-3区 地表から深さ0.9~1mまでは道路の盛り土があり、その下で花崗岩岩盤が現れた。この岩盤は調査区の中程で東に向かって急激に落ち込む。落ち込みの肩はほぼ東北-西南方向にのびる。落ち込みの埋土は植物質を含む細かい粘土層である。少量の瓦が出土した。

IV区

III-1・2区の北に長さ12mほどの調査区を設けた。道路面から0.5~0.6mは盛り土と水田耕土があり、その下に褐灰色粘土層などの包含層がある。遺構はその下層、明黄褐色砂質土層の上面で検出した。主な遺構は、南面大垣の北雨落ち溝と思われる東西溝である。この溝は両岸に花崗岩川原石を立てた石組み溝で、側石の内法で幅約1.5mある。瓦と土器が出土した。土器は10世紀代。雨落ち溝の南側には南面大垣の築地本体が想定されるが、この部分はすでに最近の水道管理設工事によって完全に破壊されていた。

遺物

大量の瓦のほか、埴仏、土器、金属器などが出土した。

軒瓦は面透い鋸歯紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦（Fig.75-1；川原寺601型式）と四重弧紋軒平瓦（Fig.75-2）、つまり川原寺式軒瓦が最も多く出土した。II-1区からの出土が多く、南

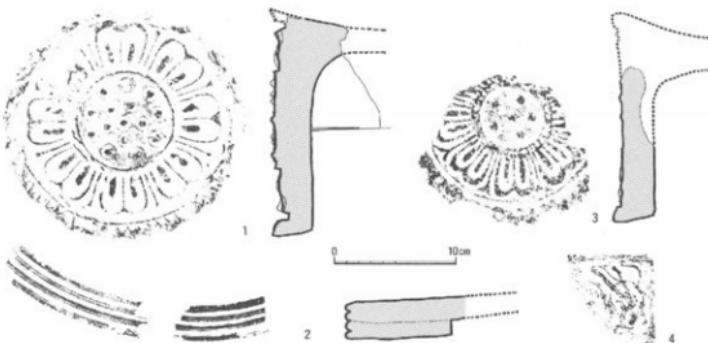


Fig.75 出土軒瓦・埴仏 (1:4)

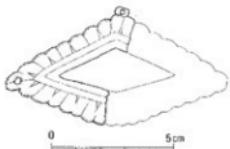


Fig. 76 金銅製瓔珞 (1 : 2)

土器は、土師器、須恵器、黒色土器、白磁、青磁、などがある。

金鳳器は、金銅製瓔珞 (Fig.76) のほか、宋錢 (『元祐通宝』; 1086年初鑄)、鉄釘など。金銅製瓔珞は、薄い金銅板を菱形に切り抜いたもので、周囲に複弁の蓮華紋を蹴り彫りする。上端に孔のあいた小さな突起があり、ほかの三つの角には垂飾を下げる孔があくと思われる。II-1区の南門南雨落溝から出土した。

まとめ

今回の調査は、いずれも面積は小さかったものの、これまで調査の少なかった川原寺の南限部分について新たな知見を提供した。

まず、南門については1957年の調査で検出した基壇南辺と西辺の玉石列を再確認した。『川原寺発掘調査報告』(以下、『川原報告』)では、この玉石列が南門の基壇上とよくなじむこと、南雨落溝に落ち込んだ瓦にも新しいものが認められないことなどを根拠にして、この玉石列を創建のものと考えた。しかし、今回の調査で、南雨落溝から出土した土器は10世紀に降るものであることがわかり、さらに玉石列の中に壇の転用品を含むこと、玉石列裏込め土に瓦片が含まれることなどから、この玉石列を創建当初のものとは断定しがたい。玉石列の仕事が劣ることや南門基壇上の瓦敷きが平安時代に下ることなどからも、検出した玉石列は少なくとも後世の手が入っていることは間違いない。したがって、この玉石列の方向から、南門が伽藍中軸線に対して若干振れている ($1^{\circ} 33'$ 西偏) とみた『川原報告』の見解についても、再考の余地があろう。

南面大垣はII-1区とII-3区で検出した瓦石列あるいは瓦列を築地廻の葛石列と考えると、その方向は国土地方眼とほぼ一致する。南門とのとりつき位置ではこの葛石列が南門基壇に入り込んでいる。葛石列の東端には小型の柱穴がある。この柱穴の北1.3mのところにも柱穴があつて、位置からするとふたつの柱穴は一対のものと考えられる。後者の柱穴を築地心とみると築地基底幅は2.4m (8尺) 前後と推測される。この場合、『川原報告』が推定したように南門の建物が振れをもつているとすると、南門の西妻柱位置が築地心より南にずれることとなり、むしろ建物は伽藍方位に正しくのつているとみたほうが築地廻との関係からは理解しやすい。ただ、南面大垣の築地については北辺を検出してないので、詳細は今後の調査に期待するところが大きい。

B 川原寺1993-3次調査

(1994年1月)

本調査は個人住宅の増築に伴っておこなったものである。調査面積は1m²である。

基本的な層序は、盛土・暗茶褐色粘質土・暗黄灰色砂（地山）の順である。遺構の検出はできず、丘陵の地表面を確認したのみである。

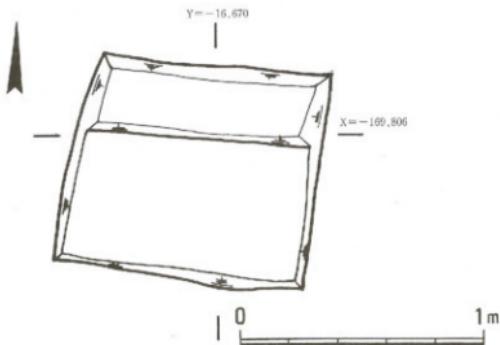


Fig.77 川原寺1993-3次調査遺構図 (1:20)



Fig.78 川原寺1993-2・1993-3次調査位置図

5 橋寺の調査（橋寺1993-1次）

（1994年1月～2月）

川原寺から橋寺にいたる参道脇の電柱立て替えと、道路敷きへの電灯線の埋設工事に伴う調査である。橋寺の北門にかかる部分について発掘調査を実施した。調査区は幅0.6m、長さ6.8m、面積4.1m²である。

調査区の東半分は現道路擁壁工事によってほとんど破壊されており、遺構を検出できたのは西側の幅0.3m部分に限られた。現道路のアスファルト面の下には厚さ0.3mの盛土層、その下に旧水田耕土・床土があり、さらに褐色粘土層と褐色砂層が堆積する。この二つの土層には室町時代までの瓦が多量に含まれていた。さらにこの層の下層、現道路面から-0.9mで黄褐色土層基壇土を確認した。厚さ10～30cmあり、瓦は含まれない。黄褐色土層上面には東西方向の素掘り溝があり、その底面で掘立柱柱穴1個を確認した。掘形に焼け土を含み、柱抜き取り穴をともなう（Fig.79）。

さて、橋寺北門は1957年～1958年にその西半分が発掘調査され、小さな花崗岩自然石を礎石に用いた、桁行3間、梁行2間の八脚門が確認された。基壇規模は東西10.4m×南北7.5m、柱間は桁行中央間が3.3m（11尺）、脇間と梁行が2.1m（7尺）である。この門は鎌倉時代に建立され、永正年間の橋寺焼亡時に焼失したと推定されている。門には基底幅5尺の築地塀がとりつく。さらに、この鎌倉時代の門の下層で、東西10.6m×南北8.2mと推定されるより規模の大きい基壇が確認され、これが創建の北門と考えられた。柱位置は再建門と同じらしい。

今回の調査で確認した黄褐色粘土層は橋寺北門の基壇土と推測される。『川原寺発掘調査報告』では、橋寺北門の南北心と川原寺南門の南北心との距離を164.55尺（49.86m）とする。今年度再発掘した川原寺南門との距離を測ると、今回の調査区は橋寺北門の東辺ほぼ中央に位置することとなるが、調査区が狭いため基壇幅など詳細は明らかにできなかった。

遺物は、瓦、須恵器、土師器、火舎などが出土した。軒瓦は鎌倉時代の巴紋軒丸瓦2点、軒平瓦1点、鬼瓦1点である。軒平瓦（Fig.80；1）は、先端が三つ又に分かれた特徴的な唐草紋で、東大寺や京都・柏杜遺跡（Fig.80；2）、尊勝寺跡などと同紋である。この型式の軒平瓦は、12世紀末～13世紀初めにかけて東大寺再建を推進した重源、さらには大仏様建築との強い関連が指摘されている。橋寺では建仁三年（1203）に塔の再建に着手したことが記録にあり、伽藍地ではこの頃の瓦窯が見つかっている。13世紀に進められた橋寺の再興の状況を知る上で興味深い瓦といえよう。

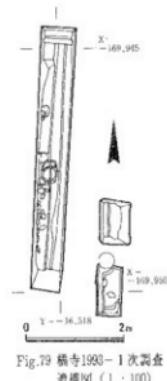


Fig.79 橋寺1993-1次調査
諸構図（1:100）



Fig.80 出土軒平瓦（1:1; 4）
京都・柏杜遺跡出土
軒平瓦（2; 1:8）

6 山田寺第9次（寺域東南隅）調査

（1994年11月～12月）

山田寺跡については、1976年以来、8次にわたり、塔・金堂・回廊・講堂・宝蔵などの伽藍主要部、および南門・東西南面の大垣など寺域の確認調査を行ってきた。これらの調査成果を受け、特別史跡の追加指定・土地公有化事業が進められたが、それによって史跡整備の必要性が高まってきた。今回の調査は、これから着手される整備事業の実施設計にあたり、これまで未解明であった寺域東南隅部の状況を知るために実施したものである。

寺域の東辺については、第4次調査（1982年）と第8次調査（1990年）において、東面大垣とそれに伴う石組溝などを確認し、南辺については、第7次調査（1989年）で南門とそれにとりつく南面の大垣、およびその前面を流れる東西溝などを確認している。これらの調査成果からすると、寺域東南隅の平面位置は予測できるものの、東へ急激に標高を増す現在の地形が寺域本来の地形なのか、後の崩壊土の堆積によるものか速断できなかった。このようなことから、今回の調査は寺域東南隅の位置と地形、および大垣の構造と変遷の解明を目的としている。

調査地周辺の地形は、東から西へ下がる雛壇状の水田地帯で、一条の小川がほぼ真西に向かって流れている。想定される寺域東南隅の位置は、ちょうどこの小川によって分断されており、直接コーナー部分を検出することが困難と思われる所以、若干北へずらした位置に発掘区を設定した。また、東側からの崩壊土が厚く堆積している可能性があり、安全勾配を考慮した結果、最終的に遺構を確認した範囲は、東西7m・南北10mの約70m²である。

遺構

発掘区の基本的な層序は、表土（厚さ20cm）、床土（10cm）、暗茶褐色土（20cm）の下に、丘陵側からの崩壊流出土である微砂と粘土と粗砂の瓦層が地表下2.0～2.2mまで何層も繰り返して堆積しており、その下で古代の瓦片や土器片を含む黒灰色粘質土となる。この黒灰色粘質土層は70～90cmの厚さを持ち、その下面で瓦列を伴う土壙状の遺構S X 535を検出した。なお、S X 535の両側にも流水や崩壊によつてもたらされた粘土と砂の層が交互に堆積しており、その中には大垣が倒壊した際の建築材や落瓦を含む層もある。それらの下面、すなわ

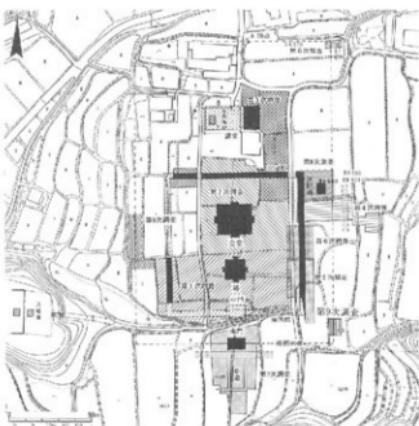


Fig.81 山田寺第9次調査位置図

ち地表下3.8mで花崗岩の岩盤からなる地山層となる。

調査によって検出した主たる遺構には、東面大垣S A 500とその東を流れる2条の南北溝S D 530・S D 531、および互列を伴う土壙状の遺構S X 535がある。

東面大垣S A 500は、第4次調査の所見から、東西1.8m、南北1.4m、深さ1.7m前後の柱掘形を持つ掘立柱塀で、柱間寸法は2.4mであることが判明している。このため今回の調査では、上層の土壙状遺構を保存するため一箇所でのみ柱穴を確認した。その結果、東西1.4m、南北1.3m、深さ2.1mの柱掘形を検出し、さらに柱掘形底面から浮いた位置で礎板を確認した。この礎板は、長さ93.5cm、幅22.5cm、厚さ13cmの松材で、ほぼ中心に貫通しない枘穴（直径7.5cm）があり、それを中心に直径約20cmほどの柱の圧痕がしるされていた。礎板が掘形底面から70cmほど浮いた位置に存在することは、第4次調査で確認された偏平な自然石や第7次調査の瓦詰めなどとも共通しており、掘立柱塀が創建当初のものではなく、ある時期に改修されたことを示している。なお、東面大垣S A 500は、花崗岩の地山岩盤を削り残して作った高まりの上に砂質土と粘質土を積み上げて造った幅約2mの基壇を作っていた。この基壇の東側には、屋瓦や垂木などの建築部材が散乱しており、その様子から一本柱脚であった東面大垣の上部には瓦が葺かれていたこと、その大垣塀が東側に倒壊していることなどが判明した。

東面大垣の東で2条の南北溝を確認した。西寄りにある南北溝S D 530は、東面大垣心から

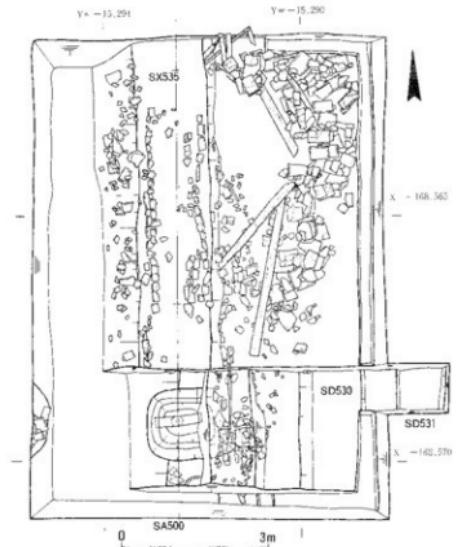


Fig. 82 山田寺第9次調査遺構図(1:100)

東3.65mに西肩を持つ幅1.2m以上、深さ0.4mの素掘り溝である。また南北溝S D 531は、S D 530の東半に重複して掘られた幅0.9m、深さ0.3mの素掘り溝である。この2条の南北溝は、すでに第4次調査で検出されており、今回はその南延長部を確認したことになる。しかし第4次調査で検出した溝S D 531は、石組を伴う溝であったが、今回検出した部分では石組みはおろか、その抜き取りの痕跡すら確認することができなかった。調査した範囲が狭いこともあり、あるいは別の溝の可能性も残るが、溝S D 530との先後関係も共通するため、上記のように理解しておく。

瓦列を伴う土壙状遺構S X 535は、東面大垣S A 500の倒壊後、落下瓦や倒壊

した建築部材などを埋め込むように整地した上に、大垣の基壇をも包み込むように盛り上げた土壘状の高まり遺構で、下端幅約3m、上端幅1.2m、高さ約70cmの規模をもつ。盛土には、瓦を交えながら粘質土や砂質土を交互に積み上げており、現存する最上部には1.2mの間隔で南北に走る2列の瓦列が残っていた。なお、落下瓦などを埋め込んだ整地土中から「延喜通寶」が出土している。

遺物

調査によって瓦類、土器、金属製品、建築部材、石製品、錢貨などが出土した。これらは整理途中であり、ここでは主要なものについて触れておく。

瓦類には、軒丸瓦5点（山田寺式C：2点<以下括弧内「点」省略>・D：3）、軒平瓦38点（重弧文A：2・B：10・C：6・D：2・E：1）、垂木先瓦7点（A：1、B：2、D：4）、鶴尾片1点のほか、破片を含む大量の丸瓦と平瓦がある。ここでは出土状態からみて、東面大垣の一本柱扉の倒壊によって、そこから落下したと判断できる完形あるいは完形に近い丸瓦と平瓦を中心に述べる（Fig.83）。このような丸瓦は8本あり、すべて粘土板巻き作りである。行基式は3本で、凸面に縦位繩叩き目を施す（全長40cm前後）。玉縁式は5本で、うち凸面に斜格子叩き目を施すもの（筒部長31cm前後）が4本で、縦位繩叩き目を施すもの（筒部長34cm）が1本あり、後者の凹面の布目痕は粗い。完形かそれに近い平瓦は54枚ある。粘土板桶巻き作りの平瓦は33枚で、凸面に斜格子叩き目を施す。これらのうち全長が41cm前後のものが26枚で、36cm前後のものが7枚ある。一枚作りの平瓦は21枚あり、凸面に縦位繩叩き目を施す。うち凹面の布目痕が密なものが20枚で、粗いものが1枚あり、前者は全長39cm前後のもの（13枚）と34cm前後のもの（7枚）に細分される。以上から、東面大垣の一本柱扉には当初、石川麻呂～天武朝の造営期に作られた凸面斜格子叩き目の玉縁式丸瓦と平瓦を中心に葺き、奈良時代以降の扉の改作や修理の際に、凸面繩叩き目の丸瓦と平瓦を補足したことが判る。さらに布目痕が粗い丸・平瓦があるので、10世紀頃に

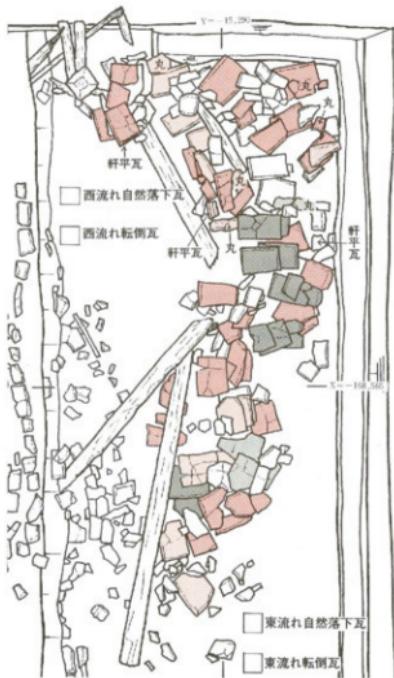


Fig.83 S A 500所用瓦出土状況図（1:50）

も若干の瓦を補足したといえる。落下丸瓦は平瓦に比べて非常に少なく、軒平瓦も4枚と少なく、軒丸瓦に至ってはみつかっていないが、落下瓦のなかには若干であれ軒平瓦があるので、この崩には本来軒瓦も葺いていたのだろう。半瓦凹面に残る重なりの痕から判る益足（16~20cm）と後述の垂木の残長から、この崩には軒丸・平瓦各1枚と丸瓦2本、半瓦3枚を葺いていたと推定される。その後長い年月のなかで、瓦はつぎつぎ落下し、片づけられ、平瓦主体になったのである。

出土した建築部材は垂木、斗、棟木である。垂木は発掘区北端から2本出土し、現存直径は約8cm、長さは66cmと118cmである。端部を枘につくり、枘部分に円い穴をあけ、短い方の材では枘の足元を斜めに切っており、垂木の拵み部分と考えて間違いない。斗は敷面部分を残すのみで、斗縁、斗面部分は完全には残さない。平面形は約30cmの方形で、東回廊出土の巻斗の寸法にほぼ等しい。棟木材は断面円形で上面にはほぼ一定間隔ではつった痕跡があり、垂木を納めるための簡略な仕事と思われる。ただし、はつりは前後揃わずにずれており、垂木は前後ずれて掛かれることになり、前山の垂木とセットとするには疑問を残す。

石製品には蓮弁を削り出した砂岩片があり、灯籠の一部かと考えられる。また錢貨は、貞觀永寶（初鑄870年）2点、延喜通寶（初鑄907年）1点が出土した。

まとめ

今回の調査の主な目的である寺域東南隅の解明については、東面大垣一本柱崩の柱穴、およびその倒壊後につくられた瓦列を伴う上墨状高まり造構を確認することによって達成できた。調査で検出した柱穴は、第7次調査で確認した南門および南面大垣の成果から、寺域東南隅から北3間日のものと推定できる。また今回調査地の基盤面の高さを回廊東南隅のそれと比べると、今回の方が約1m低い。これは第4次調査でも確認されているように、創建時の整地が、回廊から南北溝SD530へむけ東に傾斜をもたせて行われたことを示している。しかし、東面大垣崩が低い基壇の上に建てられている事実が今回判明したから、回廊と大垣間の雨水などは東面大垣の西裾に沿って南へ排水されていたことになる。大垣の東にある南北溝SD530・531の主たる役目は、斜面上方からの水を境内地に入れないことにあるのだろう。

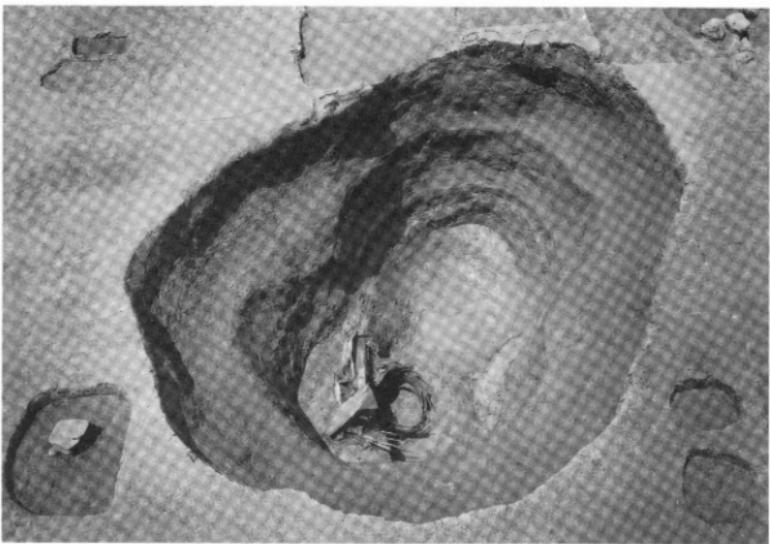
東面大垣が創建後間もなくに建替えられたことは、すでに第4・7次調査で判明していた。今回大垣崩が倒壊した状況で発掘できしたことにより、それが瓦葺きであること、瓦の差し替え補修を何度も受けたこと、その倒壊した年代が10世紀前半頃であることが判明した。そして大垣倒壊後に、それらの廃材を埋め込むように整地した上に大垣と同じ位置に土壙状の高まり積み上げたこと、それが再び東からの崩壊土によって埋没してしまったことなどがたどれたのである。おそらくこの東からの崩壊土は、東回廊を倒壊させたものと同じ可能性があり、もしそうであるなら、上墨状高まりは構築後まもない10世紀末頃に、寺域東辺の諸施設とともに廃絶したことになる。さらに今後の検討を待ちたい。



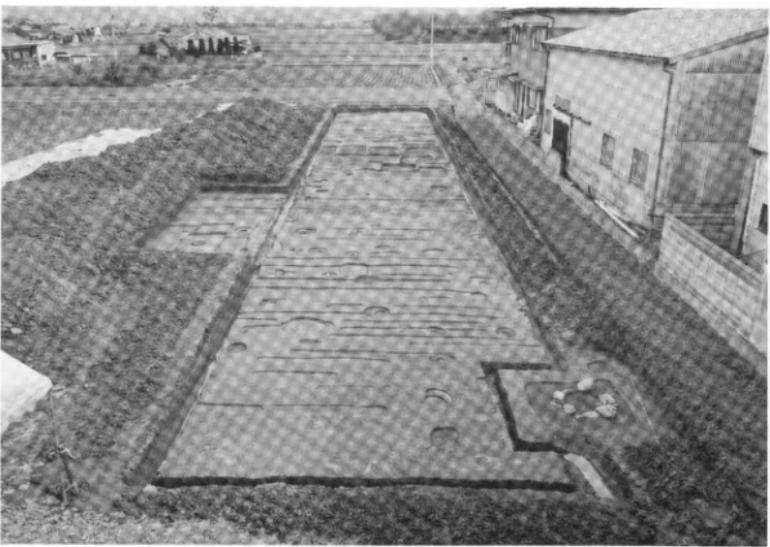
P L. 1 第76次調査区全景（北東から：人列は S A1216・7000）



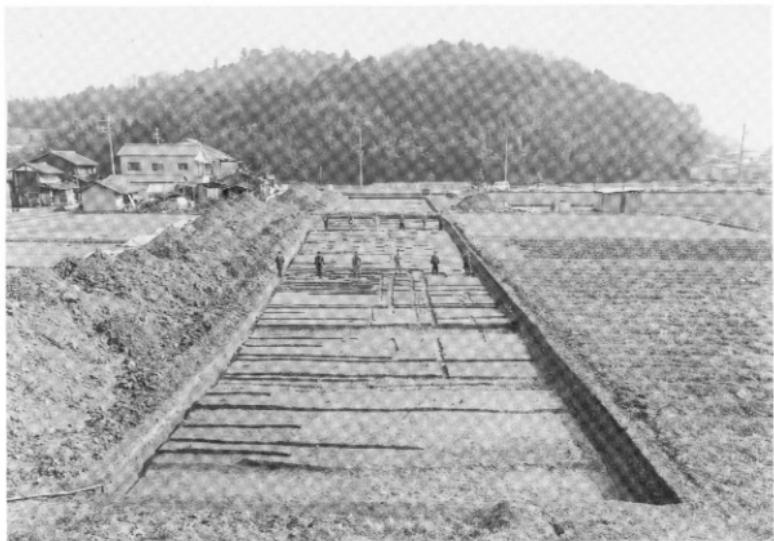
P L. 2 第75-6次調査区（下層）全景（北から）



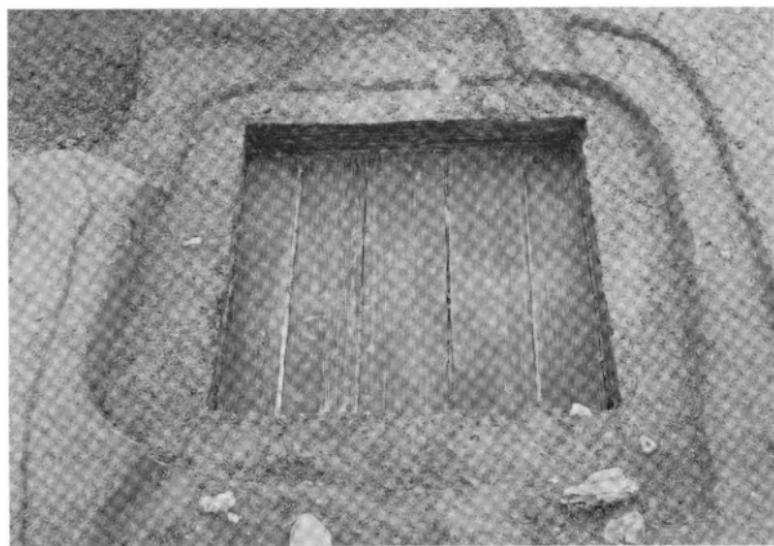
P L. 3 第75-7次調査井戸 S E 8350 (南東から)



P L. 4 第75-12次調査区全景 (西から)



P L. 5 第74次調査中区（東から：人列は手前がS A245、後方がS A230）



P L. 6 第74次調査樹状遺構 S X215（北から）



P L. 7 第75次調査西区（下層）建物S B 350（北から）



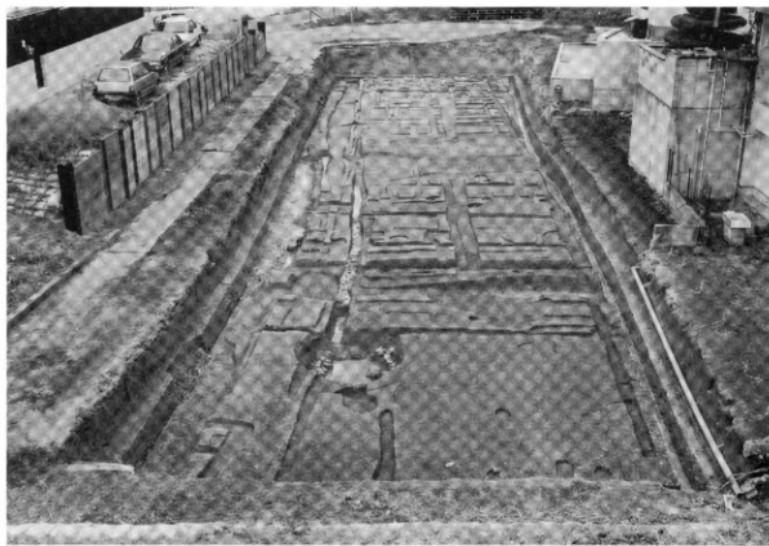
P L. 8 第71-13次調査（雷丘北方遺跡第4次）2・3区全景（東から）



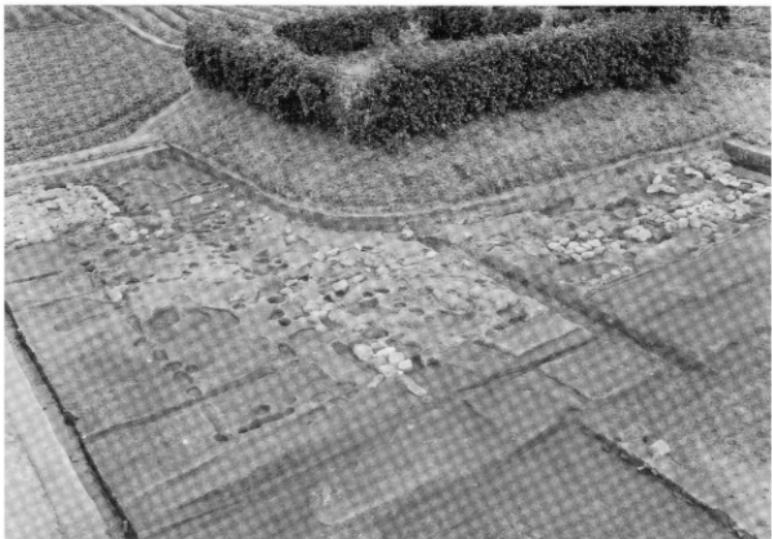
P.L. 9 第75-3次調査（雷丘東方遺跡）
北区S X3333（北から）



P.L. 10 第75-10次調査区全景（南から）



P.L. 11 第75-11次調査区全景（南から）



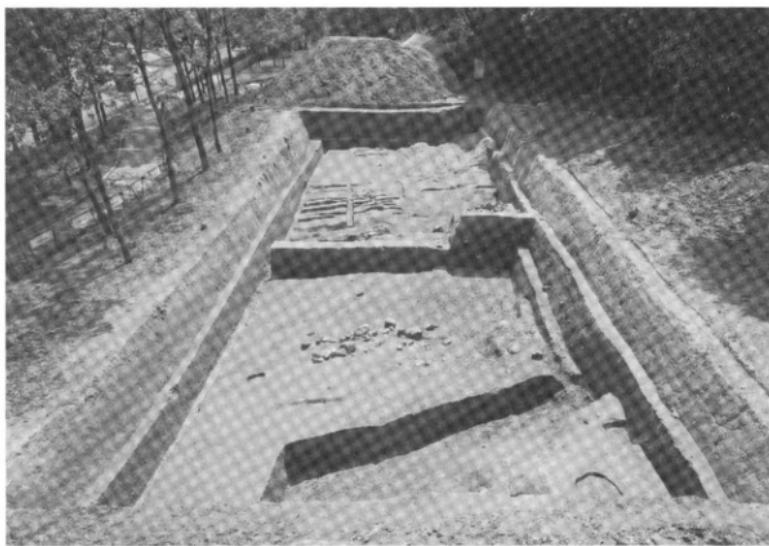
P L. 12 本薬師寺1993-3次調査東塔基壇周囲（南西から）



P L. 13 水落遺跡第7次調査区全景（西北から）



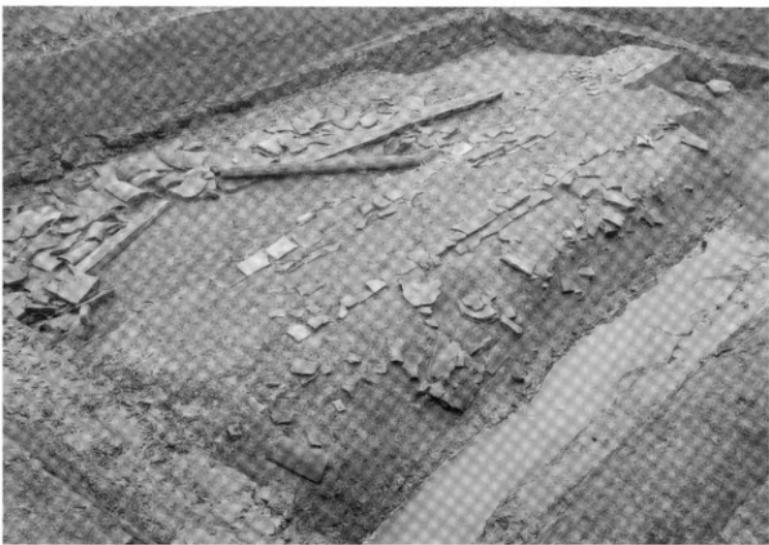
P L. 14 山山道第7次調査区全景（東から）



P L. 15 第75-2次調査区全景（北から）



P L. 16 川原寺1993-2次調査II-1区全景(西から)



P L. 17 山田寺第9次調査区全景(西北から)

飛鳥・藤原宮発掘調査機報 25

1995年5月発行

編集 発行：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

〒634 横原市木之本町宮ノ塚

Tel 07442-(4)-1122

Fax 07442-(4)-1742

PRELIMINARY REPORTS
OF EXCAVATIONS
AT THE ASUKA FUJIWARA PALACE SITES
NO. 25

Table of contents

	Page
List of archaeological excavations conducted by the Division of the Asuka and Fujiwara Palace Site Investigations in 1994 and their locations.....	2
Chapter I : Excavations at the Fujiwara Palace site.....	5
1 Govermental office compound in the western quarter	7
A. 76th excavation of the palace and capital site investigations [PL.1].....	7
B. 75–6th excavation [PL.2]	13
C. 71–15th excavation	17
D. 75–7th excavation [PL.3]	18
E. 75–12nd excavation [PL.4]	20
2 Eastern section of surrounding outer moat, eastern surrounding wall of the palace and second avenue of eastern sector of the capital (75–13rd excavation)	25
3 Western section of surrounding outer moat (75–1st excavation)	35
4 Other quarters	
A. 75–5th excavation	36
B. 75–9th excavation	36
Chapter II : Excavations at sites in the Fujiwara Capital area	37
1 Second and third blocks on the seventh street, eastern sector of the capital (74th excavation) [PL.5・6]	39
2 First and second blocks on the seventh street, eastern sector (75th excavation) [PL.7]	45
3 Fourth block on the eighth street, eastern sector (75–4th excavation)	51
4 Third block on the eleventh street, eastern sector (71–13rd excavation) [PL.8]	52
5 Third block on the twelfth street, eastern sector (75–3rd excavation) [PL.9]	58
6 Other blocks on the eastern sector	
A. Third block on the fifth street (75–10 excavation) [PL.10]	61
B. Fourth and fifth blocks on the eleventh street (75–8 excavation)	62
7 Second block on the seventh street, western sector (75–11 excavation) [PL.11]	63
8 Moto-yakushiji Buddhist temple in the third block on the eighth street, western sector	66
A. 1993–3rd excavation [PL.12]	66
B. 1994–1st excavation	74
Chapter III : Excavations in the Asuka Area	75
1 Mizuchi Site (7th excavation) [PL.13]	77
2 Yamada-michi ancient highway (7th excavation) [PL.14]	89
3 Eastern foot of the Amakashi-no-oka Hill	
A. 71–12nd excavation	94
B. 75–2nd excavation [PL.15]	95
4 Kawahara-dera Buddhist temple	
A. 1993–2nd excavation [PL.16]	102
B. 1993–3rd excavation	107
5 Tachibana-dera Buddhist temple (1993–1st excavation)	108
6 Yamada-dera Buddhist temple (9th excavation) [PL.17]	109

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
May, 1995